3.23
687

始

文學士 島越保太著

受驗參考

現代文解釋新講座

東京 敎文書院刊

大正
15. 6. 7
内交

文學

本書は中學校・師範學校・商業學校・高等女學校等、中等學校に於ける上級學生の參考用に資し、兼ねて諸官立學校入學志望者の受驗準備用に充つるを目的として撰修したものである。

一　本書第一篇總說は、現代文解釋に關する基礎的準備であつて、所謂解釋の理論である。この理論の上に立脚していよ〳〵實際問題の解答をするのが次の練習篇である。

一　練習篇は之を通釋篇・摘釋篇・大意篇・語釋篇・書取篇の五部に分ち、その中通釋篇に最も力を注ぎ、更に之に語釋・通釋・要領・備考の四項を掲げ、その提出文中の難語難句は語釋中に、大意要領は要領中に、而して修辭その他は備考中に說明して、解釋に對する基礎練習を行

はしめる。

一その基礎の上に部分解とも見らるべき摘釋・大意・語釋・書取の練習を添へ、以て受驗に對する周到なる準備として過去の問題を研究すべく、官公立學校の試驗問題を摘出し、國語科に對する自信を强めしめるの資とした。

一附錄として添附した『國語試驗問題と試驗官の講評』は受驗者の必讀に値する有益な講評であつて、受驗者の多くが國語の智識に缺くるところある實例に鑑み、大いに練習を積むの要あるを認知さるるであらう。

大正十五年五月

著者識

323—687

受驗參考

現代文解釋新講座

目次

第一篇　總說……一

第一章　現代文とは何か……一

第二章　現代文の種類……一

(一)　文體による分類……一

(二)　文の形式の上より見ての分類……四

(三)　思想の性質より見たる分類……五

(四)　散文の分類……六

(五)　時代より見たる現代文の種類……七

(六)　發生の原因による分類……九

第三章　現代文讀解の態度……一〇

第一節　文語文讀解の態度……一三

第二節　口語文讀解の態度……一三

第四章　現代文讀解の三要素……一九
第一節　現代文讀解の理解的方面……一九
1. 發音（附假名遣改正案）……二〇
2. 句讀……二三
3. 文法上の慮顯……二六
4. 文字語句文章の意味附方……二八
5. 抽象的叙述の具體化……二七
6. 構文の改造……二〇
7. 作者の立場の考察……二三
第二節　理解力査定問題……二四
第一項　單語問題……二五
第二項　全文通解問題……二八
第三項　摘解問題……二四
第三節　大意の把捉……九九
第一項　大意の程度の示されてゐる問題……一〇二
第二項　大意の程度の示されてない問題……一〇五
第三項　大意を說明する問題……一〇五
第五章　國語鑑賞の問題……一〇八
第一節　鑑賞問題の意義……一〇八
第二節　修辭の原理……一一一
1. 結體の原理……一一五
2. 朧化の原理……一二四
3. 增義の原理……一二六
4. 存餘の原理……一三〇
5. 融會の原理……一三四
6. 奇警の原理……一三八
7. 順應の原理……一三九
8. 變性の原理……一四一
第三節　鑑賞問題の實際例……一四六
第六章　答案作法……一四八
第七章　本書の學び方……一五一
第二篇　通釋篇……一五三

一　小川の漣漪にも……（專檢）…一五三
二　不敵なる清盛（樗牛）……（千醫）…一五四
三　ラフアイット……（神商）…一五五
四　紳士たるものは……（仙工）…一五七
五　洵に忠孝（樗牛）……（仙工）…一五八
六　自然現象は……（海機）…一五九
七　大勢なほ定まらずして……（千醫）…一六〇
八　志を持するには……（陸士）…一六一
九　然れども日本人が……（女高）…一六三
一〇　凡大江の沿岸……（名工）…一六四
一一　眞の豪傑は……（東高）…一六六
一二　憲法は國家統治の……（川商）…一六六
一三　その北馬南船（知泉）……（海機）…一六八
一四　舟のゆくては（鷗外）……（海機）…一六九
一五　往古學問としいへば……（女高）…一七〇
一六　道は須臾も……（七高）…一七二
一七　文王は西北の方……（山商）…一七三
一八　あをによし奈良の都……（專檢）…一七五
一九　下京より吉田に……（女高）…一七六
二〇　山紫水明の語……（女高）…一七八
二一　梁の惠王……（海機）…一八〇
二二　日本帝國が（大西）……（山商）…一八一
二三　その人清癯……（海機）…一八二
二四　新羅王誓ひて曰く……（陸士）…一八三
二五　天下の微弱を（大西）……（山商）…一八四
二六　つら〳〵國運推移……（海機）…一八六
二七　誠によくこそ（紅葉）……（新醫）…一八七
二八　舊臘來……（長商）…一八八
二九　おのが顏を……（廣高）…一八九
三〇　戰國以來……（女高）…一九〇
三一　沈默は愚人の（露伴）……（陸經）…一九一
三二　楊巨源の詩（蘇峰）……（山商）…一九二

三三　蕪村が畫道の功（東圃）……（京蠶）…一九四
三四　請ふ先づ懷疑……（東高）…一九五
三五　祇園精舍の鐘（東圃）……（廣高）…一九七
三六　東方は精華の（麗水）……（東工）…一九九
三七　蓋し將は……（海兵）…二〇〇
三八　語の創新なる（逍遙）……（神商）…二〇三
三九　國は豐榮（大隈侯）……（神商）…二〇四
四〇　成敗と是非とは……（專檢）…二〇五
四一　伏見鳥羽に始まりて……（女高）…二〇五
四二　明治中興の業は……（女高）…二〇七
四三　武士道……（海兵）…二〇九
四四　曩に敵國同盟を渝へ……（海機）…二一〇
四五　大駕奄ち登遐して……（海機）…二一一
四六　余輩が歷史上の事實……（廣高）…二一一
四七　彼の文は先秦文學中……（海兵）…二一三
四八　皇考維新の盛運……（海機）…二一四
四九　天下不良の徒（山縣公）……（海機）…二一五
五〇　明治聖代の詔勅は……（東高）…二一六
五一　大丈夫苟も（露伴）……（外語）…二一七
五二　彼平生の大功（鐵腸）……（米工）…二一八
五三　都會は百事甚だ複雜……（千醫）…二二〇
五四　西行は生れ（東圃）……（小商）…二二一
五五　虎の虎たるは（雪嶺）……（東蠶）…二二二
五六　言論の自由（沼南）……（專檢）…二二三
五七　世界を家とする……（神商）…二二四
五八　如何に世界が……（神商）…二二五
五九　自然を師とす（樗牛）……（米工）…二二六
六〇　風風ぎ日和ぎ（蘆花）……（桐工）…二二七
六一　人生信によりて立つ……（陸士）…二二八
六二　孔子既に志を（樗牛）……（北大）…二三〇
六三　皇室中心主義を宣揚……（外語）…二三一
六四　山陽が當時の（知泉）……（專檢）…二三三

六五 我國の詩文人（逍遙）……（山南）…二三四
六六 毀譽褒貶の海 ……（千醫）…二三六
六七 獵夫は往々（三叉）……（北大）…二三七
六八 梅に取るべきは（桂月）……（女高）…二三八
六九 それ用兵の法 ……（新醫）…二四一
七〇 それ同化作用を……（長商）…二四二
七一 名だたる犬吠崎の燈臺……（外語）…二四三
七二 言語は君子の（露伴）……（陸士）…二四三
七三 元和偃武以前 ……（女高）…二四四
七四 先帝踐祚の砌 ……（北大）…二四六
七五 先生の風采は ……（米工）…二四八
七六 嘗てロシヤモスコヴア……（桐染）…二四九
七七 我等は內省して……（陸士）…二五一
七八 人は信仰に（八束）……（專檢）…二五二
七九 樂平の歌は（東圃）……（廣高）…二五三
八〇 今日の帝國臣民は ……（女高）…二五四
八一 歐米の思想界の動搖は ……（女高）…二五六
八二 太宰府の配處（櫻牛）……（山南）…二五七
八三 歲華は人を待たず ……（米工）…二五七
八四 友の千里の外に……（桐工）…二五九
八五 谷蔭に蘚碧に（紅葉）……（北大）…二六〇
八六 混亂は融化の基……（海兵）…二六一
八七 凡そ葛藤なければ ……（陸士）…二六二
八八 余が冬を愛す（逍遙）……（水產）…二六三
八九 思を陳ぶる（蘇峰）……（京醫）…二六四
九〇 成敗と是非（沼南）……（慶應）…二六五
九一 唯それ誠や……（九樂）…二六六
九二 世或は月照（學堂）……（北大）…二六七
九三 平家の一門……（高校）…二六八
九四 二宮先生は博學多才……（山南）…二六九
九五 吾人の周圍を ……（名商）…二七一
九六 强兵は富國に俟ち ……（名商）二七三

九七 我邦維新以來 ……（名商）…二七三
九八 頼朝の平治の亂に ……（海機）…二七四
九九 常識は人間學の骨子……（陸士）…二七六
一〇〇 顧れば晉等の双肩は……（明專）…二七六
一〇一 人生の倏忽を（櫻牛）……（大商）…二七八
一〇二 千仞の谷を埋めんと……（千圃）…二七九
一〇三 人の冷酷を怨み……（遞官）…二八〇
一〇四 假令活動向上が（梁川）……（高校）…二八一
一〇五 明治二十年代は……（東高）…二八二
一〇六 我が大和民族（蘇峰）……（廣高）…二八四
一〇七 古來戰爭の後には ……（女高）…二八五
一〇八 心體光明なれば……（外語）…二八八
一〇九 優劣の論議は ……（北大）…二八八
一一〇 吾人今日生きて……（神商）…二八九
一一一 大儒小儒各分派を爲し……（名商）…二九二
一一二 或は青年の文學的傾向 ……（山南）…二九三
一一三 夫れ天地は大人物なり ……（山南）…二九四
一一四 着想を紙に落さずとも ……（小高）…二九六
一一五 嗚呼煩惱の羈に繫がれ……（大商）…二九七
一一六 身儒林より（櫻牛）……（米工）…二九九
一一七 日本民族ね……（鹿農）…三〇〇
一一八 人誰か禍福の（嘲風）……（三農）…三〇一
一一九 我等は內省して……（慶應）…三〇二
一二〇 小松の內府が（櫻牛）……（專檢）…三〇三
一二一 雲の扉裂けて（露伴）……（商大）…三〇四
一二二 プリンヂイシイ（鷗外）……（高校）…三〇五
一二三 曹丕の魏を以て……（神商）…三〇七
一二四 人天然と親しむ（蘇峰）……（神商）…三〇八
一二五 風は梢に鳴り ……（名商）…三一〇
一二六 彼はふと自分を顧みた……（山南）…三一一
一二七 實に沈默は金である……（和商）…三一二
一二八 英雄豪傑の偉業（逍遙）……（大商）…三一三

一二九 詩を讀みて（梁川）……（小商）…三二四
一三〇 樗牛の學識如何……（明專）…三二五
一三一 我が國文化狀態の……（海兵）…三二七
一三二 藤原俊成の詠ずる所……（海生）…三二八
一三三 英雄も汝が……（陸士）…三二九
一三四 明治の革新（東圖）……（金醫）…三三〇
一三五 統一とは……（女高）…三三一
一三六 大雅池氏……（廣高）…三三三
一三七 邦人の外國崇拜……（米工）…三三四
一三八 國家に禍するは……（米工）…三三五
一三九 予竊に思ひらく……（仙工）…三三五
一四〇 凡そ我等人間（藤非）……（桐工）…三三六
一四一 普遍の方面より研究……（廣工）…三三八
一四二 威武に屈せざる人……（北大）…三三九
一四三 梅の蕾が大きくなった……（北大）…三三九
一四四 春は快樂の天地（梁川）……（慈醫）…三三一
一四五 書を讀みて……（外語）…三三二
一四六 二河南に合し（東圖）……（大商）…三三三
一四七 家屋庭園の壯觀（峰月）……（大商）…三三四
一四八 内部に待つもの……（高校）…三三五
一四九 足らざることを知るは……（專檢）…三三五
一五〇 寒菊の霜をいたゞき……（女高）…三三七
一五一 芭蕉は一俳人（梁川）……（神商）…三三八
一五二 何人も他に知られたし……（山商）…三四〇
一五三 輓近學術益々開け（詔書）……（山商）…三四一
一五四 再啓昨日は……（千醫）…三四三
一五五 順序をいへば……（福商）…三四四
一五六 滔々たる天下……（和商）…三四五
一五七 世に神に禱り（樗牛）……（和商）…三四六
一五八 希臘印度の古哲は……（高商）…三四七
一五九 現實界に於ける一切……（高商）…三四八
一六〇 泰平は歡迎するも……（米工）…三四九

一六一 自己中心の思想……（金醫）…三四九
一六二 偉大なる文學は……（大商）…三五〇
一六三 歡び悲み苦み……（名商）…三五一
一六四 歐洲大戰の齎せる……（廣工）…三五二
一六五 あはれ我が友……（仙工）…三五三
一六六 秋風の音は……（水産）…三五四
一六七 凡そ書繁なれば……（東高）…三五五
一六八 分にあらざるの禍……（外語）…三五七
一六九 日本の文化は……（桐染）…三五七
一七〇 酒入れば舌出づ……（早高）…三五九
一七一 甲人乙人を議す……（女高）…三五九
一七二 日暮一たびうつれば……（大商）…三六〇
一七三 談山神社……（女高）…三六〇
一七四 住みにくき世から……（千醫）…三六二
一七五 津々浦々……（海機）…三六三
一七六 時々は即興の散文詩……（海機）…三六四
一七七 余の東郷氏に（學堂）……（陸士）…三六四
一七八 山河依然たり（鯉洋）……（海兵）…三六七
一七九 墳墓何の權か（透谷）……（桐染）…三六七
一八〇 夕日は遂に湖心に（信綱）……（千醫）…三六九
一八一 海陸の配合（小西和）……（北大）…三七一
一八二 評の性は多く（露伴）……（仙工）…三七二
一八三 漫に文華をいふ（桂月）……（水産）…三七三
一八四 霧の過ぎ去る（武郎）……（金醫）…三七四
一八五 支那は歴代概れ（玄耳）……（長商）…三七五
一八六 自然そのものは……（廣高）…三七六
一八七 櫻の花が（藤村）……（長商）…三七七
一八八 道は荒波の磯邊（紅葉）……（新醫）…三七七
一八九 古來國を成す（大隈侯）……（東高）…三七八
一九〇 月がよいので（泣菫）……（女高）…三八〇
一九一 密迹金剛の（泣菫）……（外語）…三八一
一九二 人の心は物に（嘲風）……（北大）…三八二

一九三　春はものゝ句に（漱石）……（山商）…三八三
一九四　傳統を尙ぶ時文藝は……（同大）…三八四
一九五　今人は新眼を（露伴）……（北大）…三八五
一九六　景色を見られ（白村）……（慶應）…三八六

第三篇　摘釋篇……

二〇一　詩を讀みて（梁川）……（小商）…三九一
二〇二　人天然と親む時（蘇峰）……（神商）…三九一
二〇三　梅の蕾が大きく（荷風）……（北大）…三九三
二〇四　虛文空論儀容を飾り……（熊商）…三九四
二〇五　ケーベル先生は（漱石）……（臺農）…三九五
二〇六　時に隱然自ら（逍遙）……（廣高）…三九六

第四篇　大意篇……

二一三　人の外に道なく……（神商）…四〇五
二一四　獨樂の運動……（愛醫）…四〇五

一九七　詩人は我々と（藤代）……（東高）…三八六
一九八　休戰以來滿一年（蘆花）……（專檢）…三八七
一九九　無邪氣な人が（虛子）……（大商）…三八九
二〇〇　戰爭は總ての（貞信）……（陸士）…三九〇

二〇七　住みにくき世（漱石）……（宇農）…三九八
二〇八　足らざる事を（露伴）……（高校）…三九九
二〇九　日本國民の最大（東圓）……（千醫）…四〇〇
二一〇　太平愈〻續きて（桂月）……（福工）…四〇二
二一一　この一篇を讀み終るや……（海生）…四〇三
二一二　歐米の思想界の動搖は……（女高）…四〇四

二一五　吾人の祖先は……（愛醫）…四〇六
二一六　聖德太子は（大朝）……（臺農）…四〇六

二一七　謹みて案ずるに……（大商）…四〇七
二一八　皇室中心主義は……（國大）…四〇八
二一九　輓近學術益開け（詔書）……（山商）…四〇九
二二〇　古より文筆の人……（神商）…四一〇
二二一　學ぶ所を行ひ……（陸士）…四一〇
二二二　政治は特に簡易を……（專檢）…四一一
二二三　十七八歲の頃（藤村）……（大女）…四一二

二二四　嘗て一古寺に（繆牛）……（東高）…四一四
二二五　實に文學は（藤井）……（高校）…四一六
二二六　自然は宇宙の（成瀨）……（女高）…四一六
二二七　日本畫の前途を（春山）……（神商）…四一七
二二八　文學といふもの（芳賀）……（醫專）…四一八
二二九　獨逸人が模倣に（遠藤）……（海兵）…四二〇

第五篇　書取篇……四二二

第六篇　語釋篇……四三四

附　大正十五年國語問題と試驗官の講評……四四八

受驗參考　現代文解釋新講座　目次終

受驗參考

現代文解釋新講座

鳥越保太著

第一篇　總說

第一章　現代文とは何か

現代文の本質

總べて何事によらず、之を研究しようとする時には、まづ第一に其の研究しようとする對象物の意義を明瞭正確に捉へて置かなければならぬ。現代文研究に於ても亦さうである。現代文とはどんなものであるか、それを十分に知らないでどうして現代文の本質を捉へることが出來よう。此の意味に於いて余はまづ本題を掲げる譯である。

分つてゐる樣で其の實精確に其の本性を捉へ難いものは國文であらう。然し國文の中でも、殊に現代文は、それが餘りに我々今日の生活に近い爲に、ともすれば我等の嚴密な檢討の手から逃れようとする。其の爲、大體其の輪廓が分る位の程度に止り、精密な理解に到達しないのが今日

の通弊であらう。

現代文は何かと問はれたなら、何人も「問はれなければ分つてゐるが、問はれると分らなくなる。」といふ樣な感があらう。是卽ち精確なる檢討の缺けてゐるといふ證據である。勿論現代文といふも必ずしも一樣でない。けれども現代文と呼ばれるもの丶中には必ず、そこに共通の不可缺の屬性があるに相違ない。故にまづこの屬性を抽出して、他の現代文以外の文に比較して判明(distinct)ならしめ、次に其の現代文中に含まれる諸屬性相互の關係を明晰(clear)ならしめねばならぬ。かくの如くに判明し、且明晰となつた概念を精確なる概念といふのである。

精確なる概念

現代文とは誰の書いた文か。現代文は現代人の書いた文の總稱である。それでは現代(modern times)とはどういふ意味か。現代とは必ずしもPresent dayの意味ではない。勿論此のプレゼントデーも其の一部に含むには相違ないが、一般にいふ現代はそれよりは範圍が廣い、即ち今日と餘りに隔たりのない一時代—更に詳言すれば、過去四五十年の昔より今日に至る間をいふのである。故に現代人とは其の間に生存してゐた人で、それらの人によつて書かれた文が現代文なのである。勿論現代といふことは比較的の言葉で、今日に近いほどより現代的といふことは出來るのである。それでは現代人の書いた文は皆現代文といつてよいか。然し必ずしもさうは行かない。之を限定する言語的の要素が入る。幾ら現代人が書いたとて其の文章に用ひた言語が所謂古語(old language)であるならばそは形式に於いて古文といはねばならない。即ち現代文は必ず現代流行の言葉を以て書きあらはされねばならぬ。勿論所謂up-to-dateのものでなくてもよいが、少くとも現代人の頭の中を構成してゐる言葉でなければならぬ、かゝる言葉を現代語といふ。此の意味に於いて現代文は現代人が現代語を以て書きあらはしたものであるといふ事が出來るのである。

現代文と現代語

然らば現代文は唯〻現代人が現代語で書きさへすれば、それは皆現代文といふ事が出來るか。といふに、形式上より之を見ればそれは十分現代文としての資格はあるが、更に精密に之を限定するならば、それだけでは未だ不十分である。更に之を其の內容の上より吟味して見る必要がある。現代文は、其の含む思想內容が假令古代のそれであらうとも一度は必ず現代化された思想とならねばならぬ。現代人の思想感情とならねばならぬ。

故に現代文は現代人が其の思想感情を現代語で表章したものであるといはなければならぬ。これは極めて嚴密なる限定を施したもので、最も狹義に解したものである。其の最も廣い意味に於いては第一義的に唯一つの要素現代人の書いたものは皆之を現代文と唱へてゐる向もある。故に一口に現代文といふも實は極めて曖昧たるものである。余はすべてを網羅するの意味に於いて本

書の取扱ふ材料は最も廣い意味に解して取捨する事とした。

第二章　現代文の種類

前章述べた處によりて現代文の意義即ち內包（connotation）としての要素は明かになつた事と思ふ。故に本章は更に進んで其の外延（denotation）の解剖を試みよう。此の現代文といふ名稱を冠し得る文章は如何なる種類に分類されるべきであるか。

凡そ分類は其の分類標準（fundamentum divisionis）の立て方によりて種々に種類を分ける事が出來る。

文體による分類

（一）文體による分類。

文體によつて現代文を分類する時は口語體、文語體の二種となる。

口語體は日常會話に用ひる言語其のまゝの形式によりて記述されたものであつて、最も現代的な形式である。語法の形式よりいふ時は、何人も一讀直ちに理解されねばならない形式の文で、其の言葉其のものを直ぐに取つてもつて吾人日常の會話として差支へのないものである。

文語體、之は所謂文語を以て書かれたものであつて、流行の上から見る時少しく「古い」といふ感じがないでもない。兎も角も吾人の日常の會話に用ひる言葉よりは old fashion に屬するものである。故に文語は是が理解の過程としては一應口語に譯してでなければ我がものとなし得ないものである。

故に口語文と文語文とを比較して、何れがより現代的であるかといへば勿論口語文を擧げるべきである。文語文の生命は唯書寫言語（written language）として存在の意義を持つのみで會話言語（spoken language）としては最早殆んど存在の價値を失ひつゝある、否現に失つてゐるのである。

文の形式の上より見ての分類

（二）文の形式の上より見ての分類。

文を其の形式の上より見て、古來散文と韻文（律文）の區別がある。

散文は其の言語・文字の排列に一定の規律のないもので、日常書き連れる處のものはそれである。新聞雜誌の記事、歷史・物語・小說の文等は概れ之に屬するものである。

韻文は言語・文字の排列に一定の規律あるもので、古來唱へられる短歌・長歌・旋頭歌（せどうか）・神樂歌（かぐらうた）・催馬樂（さいばら）・今樣・俳句・川柳・新體詩等、すべて俗に詩又は歌と名のつく形式のものは概れ之に屬するのである。古來の掟に從へば、韻文は皆韻律の整つてゐる處に其の特色を持つてゐたのであるが、現代式の詩歌には可成破格のものが多い。所謂今人の自由詩といふものに至つては全然散

文と其の形式を區別する事が出來ないものが多い。卽ち今日は知解の文を大體散文と見、情感の文を詩と見るの傾向が多く、其詩を自由詩と律詩(韻文)とに區別して考へて居るのである。

要するに散文と韻文とは截然と區劃されるほど判明なものでなくて、散文にして韻文の要素を多く持つたものもあり、韻文にして散文の要素を多く持つたものもあるのである。

思想の性質より見たる分類

(三)　思想の性質より見たる分類。

思想其のものゝ性質より文を見る時に知解の文と情感の文との二種となる。(更に之に意の文を附加へるものもある。)

知解の文

知解の文(Intellectual Sentence)とは主として讀者の理解力に訴へるもの、卽ち事理を明かに傳へれば足ると考へるもので、法律、數學、理學等の文は之に屬する。

情感の文

情感の文(Sentimental Sentence)は主として讀者の感情に訴へるもので、趣味を添へて人の感を惹くことを目的とするもの、所謂詩歌、小說、劇曲等は之に屬する。歷史の文、哲學の文などの中に、理解と、情感との中間に屬するものが多い。情感の文は更に叙事文、抒情文、劇風の文の三種に分つ事が出來る。

叙事文

叙事文(Epic)は又叙事詩ともいふ。作者の私見を交へないで事物を有りのまゝに寫すもので、主觀的色彩をつけずに客觀を客觀として寫す所に意義を持つ、故に亦客觀詩とも稱せられる。

抒情文

抒情文(Lyric)は叙情詩ともいふ。作者の感情を抒べ歌つたもので、世に所謂詩歌の大多數はそれで、殊に戀歌の如きは其の絕好の標本と見てよい。此の文は作者の主觀を抒べる處から一名主觀詩とも稱せられる。

劇風の文

劇風の文(Dramatic Sentence)は一名劇詩ともいふ。作中の人物に一人々々に各自の情感を抒べさせ、而して其の全體を公平無私に有りのまゝに寫すもの、換言すれば、全體は叙事詩風にして、作中の人物各自の云爲が抒情詩風になつてゐるもの、卽ち局部を叙情的に全體を叙事的に仕組んだものである。

散文の分類

(四)　散文の分類。

散文の分類も種々に行はれる譯であるが、記實文、叙事文、說明文、議論文は最も廣く用ひられるもので、中には更に之に書簡文を加へて五種類とするものもある。

記實文

記實文(Description)は物を有りのまゝに寫す文章で、自然界及人間界の諸物について形狀、色彩、位置、組成要素等につき、作者に見えると同じ樣に讀者の心に現ぜしめるを本領とする。所謂寫生文などは主として此の種類に屬するものといつてよい。

叙事文

叙事文(Narration)は事の過程を寫すものである。其の題材の主要なるものは動作と事件とである。記實文が場所(Space)の方面の靜態を寫す事を主とするに對して、之は時間に於ける過程進行(Progress)を寫すを本領とするものである。旅行記、物語、小說等はこれに屬するもので、其の着眼の要點は接續の具合、因果の關係を明らかにする所にある。物語及小說等の上乘なものは、多く精妙なる記實文を叙事文式に繫いだものといはれてゐる。

說明文

說明文(Exposition)は事理を說明する文章である。記實文・叙事文が主に外界具體の事物を主題とするに對して、是れは主に內界抽象の理を證斷することを目的とし、記實文・叙事文が讀者の想像感情に訴へるに對して、之は知識理解力に訴へるを以て本領とする。隨つて說明文に要する所は偏見・獨斷・先入等の私人的感情を交へずして、公平冷靜に事理を解說するにある。故に說明文は學問上の文、學者の文といつてよい譯である。

議論文

議論文(Argument)は單に論文ともいひ、又勸說文ともいふ。讀者を動かして我が意見を納得せしめるを主眼とするもので、又說明文に相手を服せしめようとする個人的企圖の加はつた文章と云つてもよい。隨つて理解力殊に思考力に訴へることが大である。けれども其の主張に權力光彩あらしめる爲に想像的感情的文飾を加へる事も屢〻ある。要するに四種の文中では最も人格的色彩の濃厚なものである。

書簡文

書簡文(Letter)の他の文章と違ふ所は、相手が唯一人なるか、又は一人と看做すべき團體なるかにある。即ち他の文章は讀者が廣く不定であるが、書簡文は讀者が唯一人で限定的である。故に書簡文は其の心して讀まればならぬ。書簡文には古來種々な面倒な形式習慣があつたのだが、今日の所謂現代式書簡文は可成に舊套を脫したもので、其の言文一致體と名づけられるものは古への候文に比較して霄壤の差異がある。

時代より見たる現代文の種類

(五)　時代より見たる現代文の種類。

現代文は固より現代人の作つたものではある。其の作物の形式より見る時は其の用ひる處の言語が必ずしも現代語を用ひ、現代の語法のみによつて書き表はしてない。或は全然古文に擬するものがあり、或は半ば古文に擬するものがある。かうした因襲的分子含有の程度により分類する時は次の三種となる。

純擬古文

純擬古文は德川時代以來の普通文の形式を其のまゝ蹈襲したものであつて、表現の形式も用語も共に現代と全然懸け離れたものである。其の之を現代文の一種とするは唯現代人によつて作られたといふことゝ、兎も角も現代に於いて可成の流通性を持つてゐるといふことの二要件あるに

よるものであつて、純粹の現代文として眞生命を有しないものである。

半擬古文　半擬古文、これは半現代文といつてもよからう。因襲的な古文の形式を脱せんとして脱する能はず、尙幾分の舊態を存しながら、而も一面何處かに新鮮味を包藏するものである。因襲より創造への過程を歩む一樣式である。古い教育を受けた現代人の作に之を見る。

純現代文　純現代文、これは讀んで字の如く、用語に於いても、表現に於いても、其の思想內容に於いても、どこまでも現代が創造した文、現代の時代思潮の流れてゐる文をいふのである。

發生の原因による分類　(六)　發生の原因による分類。

現代文を其の發生の原因によつて分類する時は次の三種となる。

純和文體　純和文體、本邦固有の形式の發達したものである。然し現今用ひる現代文中純和文體と名附けられるものは殆んどないといつて可からう。唯あるは和文的分子を比較的多く含有してゐて耳に軟く感ぜられるといふ程度のものである。

漢文直譯體　漢文直譯體、これは「子の曰く…」、「豈……せざるべけんや」、などといふ極めて堅苦しい形式のもので、今日では殆んど日常會話からは其の跡を斷つた樣であるが、それでも演說・文章等で文章に勢氣あらしめる場合に屢〻用ひられる事がある。故に決して忽諸に附する譯には行かぬ。

歐文直譯體　然し之とて純漢文直譯體といふものは殆んど存在しないで、局所的使用をなすといふに止まつてゐる。但し題材を支那に求めた場合など、どうしても漢文系の書き現し方でないと十分其の氣分を現すことが出來ないから、よほど碎けた程度のそれが適用されてゐる樣である。

歐文直譯體、これは現代文としての一特色で、古い形式の文法語法では解し得られない新鮮味を持つた文章で、外國語を解し得る新人によつて多く書かれる、所謂ハイカラの文である。「米國婦人は男子に隷屬し其の支配を甘んじて受けるには餘りに强かつた。」などといはれては外國語の素養のないものには決して解るものでない。尙現代文には直譯するのでなくて歐文其のものを本邦語の如くに其のまゝに用ひる向も多くなつた。センチメンタルの氣分だとか、デリケートな表情だとか、チヤーミングされるとか。

かう外國語の多くある文になると傳統的因襲に捉はれてゐる頭の古い人達には非常に嫌はれる樣であるが、マツプ・ツー・デートに出來てゐる新進の青年達に非常な歡迎を得る樣である。故に現代人とし現代を解せんとする者はどうしてもかういふ方面の研究は忽せにする事は出來ない。

其の他各種の方面から色々の分類を試みる事も出來ようが、以上で其の大樣は盡した事と思ふ。何れにしろ實際に書かれた一文は決して純然と何々文と定まつて仕舞ふ事は稀で、種々なる形式

現代文の特色

が混合されてゐるのが普通である。即ち現代文はあらゆる方面から眺めて見て、局所的でなくて世界的となつたといふことが其の特色であらう。

第三章　現代文讀解の態度

現代文の種類は前章所説の如く多種多樣である、故に是が讀解に對してもそれ相應に工夫を凝らさればならないが、現代文としての本質より考へて見て最も注意を要するのは口語文の讀解であらう。然しながら因襲的な文語文も亦未だ全く現代より影を失つてゐるといふ譯には行かないので、本章ではまづ舊式文語文について略説し、次に口語文に及び、最後に現代文讀解の主眼に及ぼさうと思ふ。

口語文の讀解

文語文の解釋

第一節　文語文讀解の態度

文語文は從來一般に行はれた形式で、和文系か、漢文系か、或は其の兩者の混淆した形式かであつて、其の背景とする所は結局古來の國漢文を出でない。隨つて是が解釋の態度といふも大凡古來の儘と見てよい。けれども從來一般に行はれた如くに唯口語文に、或は平明なる言葉に換言しただけでは十分でない。勿論辭典を中心に解釋すべきではあらうが、辭書其の儘を適用してはよくない。何故なれば辭典の譯し方は往々字句に拘泥して現代の思想を現はすには極めて迂遠にして不適當なものがあり、時には全然意味の異なつたものもないではない。殊に學術的のテクニツクに於て其の甚だしきを見る。例へば、政治＝マツリゴト、國體＝クニガラ、滑車＝スベリグルマでは何が何だか譯が解らぬ。かういふ言葉はそれ相當の專門書について研究して置く必要がある、さうして原文を對照して考察し、其の文、其の場合の意義を示すに最も相應はしい解釋法をとらればならぬ。

文語文解釋の要義

世には文語文の解釋といへば、之を換言し口語譯すればそれで萬事終れりと考へてゐるものがないでもない。勿論解釋は平明化で、口語が文語に比して平明なる言葉である以上、口語譯する事が平明化といふ職分を全うするに意義と價値とを有する事は明らかではあるが、文の解釋は文の含む思想感情即ち其の內容を捉へて平明に書き表はすことであるから、必ずしも口語でしなければ其の目的を達し得ないものではなからう。要は其の文の內容及形式を縱橫に解剖し、詳細に吟味し、鑑賞し、活用し、自己の言葉で最も平明に表章するに至る時は萬事終れりである。

口語文と世界的影響

口語文は吾人が日常會話に使用してゐる言葉で書きあらはしてある。隨つて一讀直ちに其の意味を解する事が出來る。それゆゑ、文語文の如くに殊更に之を口語譯する事も必要なく、全く持て餘してゐるのが現今の狀態である。この持て餘してゐるのは受驗者、生徒ばかりでなく、實は出題者、教師の側でも少なからず困却してゐる。余は此の混亂を見るに忍びず拙筆を揮つて先に「國語教授の考察及考査」なる一本を公にした。讀者亦本書と併せ讀まれるならば更に何物かを得られる事であらう。該書は教師の參考であり、本書は生徒の參考として物するのである。

口語文と云つたつて常に平明な何人にも了解出來る言葉のみで書き現はしてあるとは限らぬ。文語であるか口語であるかは語法上の差別であつて語其のものには變化はない。故に口語文にも隨分と難解な言葉が用ひられる。特に今日は凡てが世界的になつてゐるので、其の思想表現の樣式も、多分に世界的影響を蒙つてゐる。舊式な文語文が和文漢文の背景を持つ如く、口語文は確かに西洋思想の影響を受け其の背景を持つてゐる。用語としても同樣に古來の支那或は日本で創造したものばかりでなく、歐米語の譯語あり、歐米語その儘を用ひてある場合も決して少くない。「文化生活」だとか、「戀愛至上主義」だとか、「交響樂」だとか、「幻想曲」だとか、其の他無限といふほど難解な譯語がある。こんな言葉は漢和大辭典を幾ら引いたつて出て來るものではない。尤も近く出來たものゝ中には時代の要求に應ずる解釋をしたものもないではないが、これらの言葉を日本或は支那の思想に求めようとするのが既に無理である。宜しく歐語に還元して其の意味を求めねばならぬ。

活喩法の修辭

そこで近來は難解な譯語を使ふよりは、歐語其の儘を用ひて置く方が遙に意味が判然とするといふ所から、ドシ〳〵原語のまゝに用ひられる向きがある。感傷的といふよりはセンチメンタル(sentimental)、絶頂といふよりはクライマツクス(Climax)、劇的場面といふよりは劇的シーン、活動寫眞の代りにキネマを用ひるといつた風に擧げて數へれば隨分ある、同時に表現の形式に於いても亦さうである。「事情の變化は昨日の敵を今日の味方とし、今日の味方を明日の敵とする」といふ樣に抽象語を主語として所謂活喩法の修辭を使ふ事は在來の邦文には餘りやらぬ事であつて之を從來の表現形式では事情が變化すれば昨日の敵は今日の味方となり今日の味方は明日の敵となる。」と書く所である。尤も抽象語を主語とする事が古い形式には全然ないといふ譯ではないが更に一歩を進めて「障子を通して忍びこんだ雪明りが、菓子鉢の中のアリヘイの、鮮明な色の山に碎けてゐる——藤森成吉」といつた風の書振りに至つては新しい樣式である。況んや「瞑想に耽りつゝそぞろあるける彼は何時しか興福寺の境内に、彼自らの姿を見出しぬ。——」

「文學とは何か、それを詳しく說明するには餘りに今は多忙である。が何人も文學の何物であるかはおぼろげながら知つてゐる。然し其の本質を明らかにせよといはれると、セント・オーガスチンの言葉を思ひ出させる、「汝若し余に、時とは何かと問ふならば、余は知らない。然し汝若し余に、之を問はなかつたならば、余は之を知つてゐる。」と。誠にさうである。文學は幸福、愛、生命の如きもので、その中にある時はそれは了解され認識され得るのである、けれども正確には云ひ現せない。とはいへ、それは云ひ現はし得べき性質を持つてゐない事もない。この意味を發見すべき最善の場所は書架である。

新しい樣式の文例

書架の一番下には辭書がある。次にはヒストリーやケミストリーやフイジツクスなどの書物があり、其の上の棚には徒然草や太平記、近松全集、現代文學書などが光つてゐる。それから他の棚には我々の職業に必要な敎育書がある。或意味に於いてこれらのすべて及び一切の他のブツクスなるものは文學である。"literature" の根本的意義は "letters" である。さうして "letter" は一の準備した表面上に彫り込む、或は摺り込むといふ意味である。合理的に排列した letter の連續が "book" を形造るのである。然し "book" の根本的意味を尋ねる事になると "tree" に至らねばならぬ。何故なればラテン語では "book" の事を "liber" といふ、それは樹の幹をおほうてゐる樹皮の內皮といふ意味である。而して "book" 又は "boc" は古代英語では "beech" の事である、即ち彼等の祖先は其の銀色の表皮の上に彼等の最初のルーン文字を彫りつけたものである。

左樣にして吾人が若し書物の紙葉(the "leaves" of book)を考へる時、吾人の心は永い歷史の上に歸つて行く。即ちガタ〳〵と八釜しい印刷屋、その前が平和な修道者の群がる庵室、その前が繪や文字で壁を蔽ふた陰鬱な穴居、さうして其の歷史の跡は深い側まで行く。そこで原始人は滑らかな木の葉を採り、その上に彼等の思想を尖つた棒で彫りつけてゐた。さう云ふ譯なので樹木はすべての本のアダムである。而して人の手が樹木又は其の生成物、又はその代用物の上に書いた處のものすべてが文學なのである。然しそれは定義としては餘りに廣い。吾々はもつと或物を除外しそれを限定しなければならぬ。……、」

舊套を脫せる文の解釋

などの文に於いては全く舊套を脫してゐる。これらの文を解する時、單に普通の字典が示す單語の意味を根蔕として考察し、原文の形のまゝに言葉遣ひだけを平明化するのでは、どうしてもうまい解釋は出來ない。

まづ言葉の持つ概念を考へればならぬ。つまり何を云つたのか、どういふ事を述べてゐるのか

を考へねばならない。「……興福寺の境内に、彼自らの姿を見出しぬ……」とは、結局「來た」といふ事に外ならない。それをわざ〳〵自分自身を主觀と客觀との兩樣の位置に置いて眺めた書振りになつてゐる、そこに面白味がある。かくの如くにまづ其の概念を捉へて其の表現の形式を味ひ而してこれを平明化するのである。而かも其の平明化は單に語句のみの平明化でなくて其の文の思想を平明化する事に注意を集中しなければならない。これ即ち現代文讀解の態度である。

文の思想の平明化

世には言葉を言ひかへて以て解釋と心得てゐる人が少くない。若し言葉をつかひかへたが爲に原文の思想が明かになつたとすれば、それは勿論其の文に對する立派な解釋である。けれども若し言葉をいくら云ひかへてもそれが爲に原文の思想がわかり易くならぬとすれば、それは決して其の文を解釋したものとは謂はれない。然るに世には無理に原文を云ひかへて、却つて原文よりもわかりにくいものとして了つて、而もそれで其の文の解釋が出來たものと思つてゐる人が少くない。それは全く主客を顚倒したものであつて、語句の平明化といひ表現形式の凡化といひ、それは要するに思想を平明化する爲の手段に過ぎなくて、それ自身が文の解釋であるとは謂へないのである。だから原文のまゝでよく分る言葉や表現形式までを無理に言ひかへなくてはならぬといふ理由は少しもない。

現代文解釋の要諦

然しながら原文と全然離れてもよいといふ譯ではない。全然離れてしまつては解釋にはならない。故に解釋は原文の語句や表現形式につき、而もそれに囚はれず、之を平明な日用語に改める事によつて、その文の持つてゐる思想をわかり易くするといふ事に外ならない。

第四章　現代文讀解の三要素

現代文讀解上必ず踏まねばならない要素が三つある。理解、鑑賞、活用之である。何よりもまづ如何なる思想・感情が書かれてあるか、これを認識し理解する事は其の第一過程でなければならない。理解したら次に鑑賞玩味しなければならない。十分鑑賞玩味して同化吸收したら、之を我が力として活用し應用しなければならない。此の意味に於いて以上の三つは現代文讀解上なくてならぬ重要なるエレメントである。それ故次に稍詳細なる說明を加へよう。

理解と鑑賞と活用

第一節　現代文讀解の理解的方面

解釋と把捉

現代文を通して作者の思想感情を認識し理解するには更に二つの方面がある。一は所謂解釋といふことで他は即ち把捉といふ事である。前者は記述のすべてを丁寧に讀者の意識に移して文字、

語句、文章の總べてに意味をつけて我がものとする即ち類化統覺の働きで、後者はかうして意味附けられた、理解されたものを一定の法則の下に系統立て組織立てゝ、其の眞髓、要點を抽出して一括し保存に便ならしめようとする概念力の問題である。

それではこの現代文を我がものとして理解するには、我々の心はどんなプロセスを辿るかを說明しよう。

發音

1發音。茲に思想がある、其の思想が形の上に表はれたものが言葉である。故に思想は言葉を通さなければ發表されない。其の言葉が更に有形に表はされたものが記述である。故に記述を通して作者の思想を知るには、どうしても、まづこの記述(written language)を言葉(spoken language)に還元し、さうして更に其の言葉を其の作者の思想に還元して行かねばならない。故に讀解の第一義は書かれ或は印刷された言葉を聲高く話すといふ事である。その思想を表はす固有の言葉の音を正確に明瞭に發するといふことが必要である。若しもこの發音を誤らうものなら大變な誤解を生ずる虞れがある。

讀方假名附

此の發音を試驗問題として表はしたものは所謂讀方假名附と稱せられるものである。之は最も廣く用ひられた問題形式なので誰でもよく承知してゐるが、新しい意味に於いて注意の二三を附け加へよう。

讀方假名附問題に就いて。

假名附に就いてまづ考へる事は所謂「假名遣」の事である。我が國の假名遣は可成に複雜であるが大別して字音假名遣と國語遣との二となる。字音假名遣といふのは漢字の音・訓をどう假名附けるかの方面である。是が更に歷史的假名遣といふのと表音式假名遣といふのと二樣となる。歷史的假名遣といふのは、從來一般に困難を訴へながら用ひられて來た古代の發音符號其のまゝの假名遣である。漢字の字音には漢音・吳音・唐音及び現支那音の四種があり、後の二種は比較的表音的なので讀み易く、書き易いものであるが、漢音・吳音に至つては今日の發音のまゝの書きあらはし方でなくて、其の當時の發音通りに書いて今日の如くに讀むのであるから、なか〳〵骨が折れる。醫は「イ」であるが長は「キ」を用ひねばならぬ。央、押、嘔、王、翁は共に今日の發音では「Ō」(オー)であるが、歷史的の字音はそれ〴〵にアウ、アフ、オウ、ワウ、ヲウである。

歷史的假名遣と表音式假名遣

同樣の事は國語假名遣にもある譯である。其の歷史的假名遣の紛れ易いものを大別すると、名詞の假名遣と動詞の假名遣が其の主なるものであるが、これを五十音圖について考へる時は、は行、や行、わ行、及びさ行濁音、た行濁音などである。一例へば、

紛れ易い名詞の假名遣と動詞の假名遣の例

（一）「老い」、「生ひ」、「率ゐ」等に於ける「い」、「ひ」、「ゐ」の混同。
（二）「思うて」、「思ふ」、「けふ」（今日）、「絶ゆ」等に於けるが如く、「う」、「ふ」、「ゆ」の混同。
（三）「越え」、「こゑ」（聲）、「故」（ゑ）、「いへ」（家）等に於けるが如く、「え」と「ゑ」と「へ」の紛れ。
（四）「おる」（織る）、「をる」（居る）、「おち」（祖父）、「をち」（叔父）、「うを」（魚）、「あを」（青）、「かほ」（顔）、「しほ」（鹽）、「あふぎ」（扇）、「たふす」（倒す）、などの如き「お」と「を」の紛れ、「ほ」と「ふ」の紛れ。
（五）「あわ」（泡）、「あは」（粟）、「いはく」（曰く）、「かはく」（乾く）の如き「わ」と「は」の紛れ。
（六）「うぢ」（氏）、「うじ」（蛆）、「ふぢ」（藤）、「ふじ」（富士）、「閉ぢ」、「感じ」等の如き「ぢ」と「じ」の紛れ。

紛れ。

（七）「くず」（葛）、「くづ」（屑）、「まづ」（先づ）、「先んず」等に於ける「ず」と「づ」の紛れ。

等は其の主なるもので、專門家はいざ知らず一寸閉口する厄介物である。

そこで是等の不便を除き現代文に最も適した假名遣たらしめるべく、去る大正十三年十二月二十四日文部省で開かれた臨時國語調査會は滿場一致で、假名遣改定案を可決した。其の趣旨並に要領は大略次の如くである。

假名遣改定案の趣旨並に要領

現今わが國に行われている國語および字音の假名遣は、これを學ぶのに一方ならぬ苦心を要し、しかもあやまりなくつかいこなすことがなか〳〵困難である。わが國民は、すでに漢字に苦しんでいるのに、そのうえ、むずかしい假名遣とゆう重荷を負うている。本會がさきに常用漢字を公にし、さらにまた假名遣の整理をはかつて、この改定案を發表するのは、文字の使用を容易にして國民教育の發達と國家文運の進展を促そうとするためである。……

假名遣改定整理の方針及び適用の範圍

これで以て本案の趣旨は明らかであらう。次には假名遣改定整理の方針及び適用の範圍を調べるに、それは次に掲げる凡例によつて明らかであらう。

凡例

（一）本案は大體東京語の發音により、なお地方に於けるものをも考慮して整理したのである。
（二）本案は主として現代文（口語、文語とも）に適用する。
（三）固有名詞及び其の他の特殊の事情のあるものは、しばらく從前の通りとする。たゞしなるべく本案の假名遣による。
（四）外國語の表記は別に定める。

次には國語表記上の通則を示さう。

國語表記に關する通則

國語表記に關する通則

第一條　國語の拗音を書くには、や、ゆ、よを右側下に細書する。
　たゞし特別の場合に限り細書せずとも差支ない。

第二條　國語の促音を書くにはつを右側下に細書する。
　たゞし特別の場合にかぎり細書せずとも差支ない。

第三條　國語のア列長音はア列の假名にあをつけて書く。

第四條　國語のイ列長音はイ列の假名にいをつけて書く。

第五條　國語のウ列長音はウ列の假名にうをつけて書く。

第六條　國語のエ列長音はエ列の假名にいをつけて書く。

第七條　國語のオ列長音はオ列の假名にうをつけて書く。

第八條　國語のア列拗音の長音はア列拗音の假名にあをつけて書く。

第九條　國語のウ列拗音の長音はウ列拗音の假名にうをつけて書く。

國語假名遣改定案の主文

第十條　國語のオ列拗音の長音はオ列拗音の假名にうをつけて書く。

注意一　外國語の拗音促音の書き方には通則第一條第二條を適用する。

注意二　外國語の長音は通則第三條以下の場合の「あ」「い」「う」のかわりに「ー」をつけて書く。

右の通則の中で特に注意すべきは、長音の表記にあいうの三つを用ひる方法を採用してゐる事である。而して國語假名遣改定案の主文は次の如くである。

國語假名遣改定案

第一　ゐ、ゑ、をはい、え、おに改める。たゞし助詞のをを除く。

例

(一)ゐをいに改めるもの
　いど(井戸)いのしゝ(猪)、くわい(慈姑)、まいる(參る)、いる(居る)。

(二)ゑをえに改めるもの
　こえ(聲)、つえ(杖)、すえ(末)、うえる(植ゑる)、すえる(据ゑる)。
　但し「醉ふ」はよひに改める。

（三）ををおに改めるもの

おけ（桶）、おか（岡）、うお（魚）、おどる（踊る）、おしえる（教へる）、しおれる（萎れる）、おかしい（をかしい）、おしい（惜しい）、あおい（青い）。

第二　ぢ、づはじ、ずに改める。

例

（一）ぢをじに改めるもの

くじら（鯨）、ふじ（藤）、わらじ（草鞋）、ねじる（捻ぢる）、はじる（恥ぢる）、よじる（攀ぢる）。

（二）づをずに改めるもの

うずら（鶉）、うず（渦）、みず（水）、ゆずる（譲る）、うずめる（埋める）、さずける（授ける）。

めずらしい（珍らしい）、はずかしい（恥かしい）。

しずかに（靜かに）、まず（先づ）。

第三　わに發音されるはは わに改める。

たゞし助詞のはを除く。

例

かわら（瓦）、かわ（河）、にわ（庭）。

あらわす（著す）、まわる（廻る）、こわれる（毀れる）。

あらわぬ（洗はぬ）、きらわぬ（嫌はぬ）、誘わぬ（誘はぬ）、かわいらしい（かはいらしい）、

くわしい（委しい）。

けわしい（險しい）。

にわかに（俄かに）、すなわち（則）。

第四　いに發音されるひはいに改める。

例

うぐいす（鶯）、たい（鯛）、はい（灰）。

ついやす（費す）、たいらげる（平げる）、ならいます（習ひます）、わらいます（笑ひます）、

まいます（舞ひます）。

ちいさい（小さい）、こいしい（戀しい）。

ついに（遂に）。

第五　おに發音されるふはおに改める。

例

あおい（葵）。

あおる（煽る）、あおぐ（仰ぐ）、たおす（倒す）。

第六　うに發音されるふはうに改める。

例

あらう（洗ふ）、まう（舞ふ）、やとう（傭ふ）。あやうい（危い）。

第七　えに發音されるへはえに改める。

たゞし助詞のへを除く。

例

かえる（蛙）、いえ（家）、まえ（前）。

かえる（歸る）、さえずる（囀る）。

さそえ（誘へ）、ひろえ（拾へ）。

さえ（助詞のさへ）。

第八　おに發音されるほはおに改める。

例

いきおい（勢）、かお（顏）、しお（鹽）。

なおす（直す）、におう（匂ふ）。

なお（猶）。

第九　ウ列長音に發音されるくふ、すふ、ぬふ、ぶふ、ゆふ、るふの類のふはうに改める。

例

くう（食ふ）、すう（吸ふ）、ぬう（縫ふ）、おぶう（負ふ）、ゆう（結ふ）、くろう（狂ふ）、ゆうだち（夕立）。

たゞしユの長音に發音されるいふ（言）はゆうに改める。

第十　オ列長音に發音されるおふ、そふ、のふ、もふ、よふ、ろふの類のふはうに改める。

例

うけおう（請負ふ）、あらそう（爭ふ）、きのう（昨日）、おもう（思ふ）、まよう（迷ふ）、ふくろう（梟）。

第十一　オの長音に發音されるはう、オ列長音に發音されるわう、あふ、おほは、おうに

改める。

例

（一）はうをおうに改めるもの

あおう（逢はう）、かおう（買はう）、まおう（舞はう）。

こおう（强う）、しおう（咨う）。

（二）わうをおうに改めるもの

よおう（弱う）。

（三）あふをおうに改めるもの

おうぎ（扇）、おうち（棟）。

（四）おほをおうに改めるもの

おうかみ（狼）、おうやけ（公）、しおうせる（爲遂せる）、おうい（多い）、おうきい（大きい）。

第十二　オ列長音に發音される、かう、こほ、はこうに、がうはごうに改める。

例

（一）かうをこうに改めるもの

こうがい（笄）、こうじ（麴）、こうべ（神戸）。

さこう（咲かう）、きこう（聞かう）、こうばしい（かうばしい）。

あこう（赤う）、ちこう（近う）、こう（斯う）。

（二）こほをこうに改めるもの

こうり（氷）、こうろぎ（蟲斯）、とどこうる（滯る）。

（三）がうをごうに改めるもの

いそごう（急がう）、なごう（長う）。

第十三　オ列長音に發音されるさうはそうに改める。

例

はなそう（話さう）、かえそう（返さう）、ちらそう（散らさう）。

あそう（淺う）、くそう（臭う）。

そう（然）。

第十四　オ列長音に發音される、たう、とほ、とをはとうに改める。

例

（一）たうをとうに改めるもの

とうげ（峠）、たとうがみ（畳紙）。

うとう（打たう）、かとう（勝たう）。たとう（立たう）。

いとう（痛う）、かとう（堅う）、つめとう（冷たう）。

（二）とほとうに改めるもの

とうる（通る）、とうい（遠い）。

（三）とをとうに改めるもの

とう（十）。

第十五　オ列長音に發音される、なうはのうに改める。

例

しのう（死なう）、あぶのう（あぶなう）。

第十六　オ列長音に發音されるはう、はふ、ほほは、ほうに、ばうはぼうに、ぱうはぽうに改める。

例

（一）はうをほうに改めるもの

ほうき（箒）、ほうむる（葬る）。

（二）はふをほうに改めるもの

ほうる（投る）。

（三）ほほをほうに改めるもの

ほうずき（酸漿）、ほう（頬）、ほうのき（朴木）。

（四）ばうをぼうに改めるもの

あそぼう（遊ばう）、とぼう（飛ばう）、はこぼう（運ばう）。

（五）ぱうをぽうに改めるもの

すつぽう（すつぱう＝酸）。

第十七　オ列長音に發音される、まう、まふはもうに改める。

例

（一）まうをもうに改めるもの

もうける（儲ける）、もうす（申す）、あゆもう（歩まう）、やすもう（休まう）、たのもう（頼まう）、あもう（甘う）、せもう（狭う）。

（二）まふをもうに改めるもの

すまう（角力）。

第十八　オ列長音に發音される、やう、よほはように改める。

例

（一）やうをように改めるもの

ようか（八日）、はよう（早う）、ようやく（漸く）。

（二）よほをように改めるもの

もようす（催す）。

第十九　オ列長音に發音される、らうはろうに改める。

例

いのろう（祈らう）、かえろう（歸らう）、とうろう（通らう）。

くろう（暗う）、かろう（辛う）、あろう（粗う）。

第二十　ウ列拗音の長音に發音される、きうはきゆうに改める。

例

おうきゆう（大きう）。

第二十一　ウ列拗音の長音に發音される、しうはしゆうに改める。

例

しゆうと（舅）、しゆうとめ（姑）。

あたらしゆう（新しう）、かなしゆう（悲しう）。

すゞしゆう（涼しう）。

第二十二　オ列拗音の長音に發音される、けふはきように改める。

例

きよう（今日）。

第二十三　オ列拗音の長音に發音される、せうはしように改める。

例

まいりましよう（參りませう）、そうでしよう（さうでせう）。

右の如く改定は主として發音通りにするといふにある。が玆に除外例として助詞のを、は、への三つだけはもとの通りに書く事になつてゐる。此の三つは一般の人々に非常な親しみを持つものであるから、不徹底なそしりは免れぬがそのまゝとする事になつてゐる。

次に字音の表記に關しても大體は國語の表記と同樣であるが、兩者の間幾分かの出入もあるから全文を次にかゝげる事にする。

字音の表記に關する通則

第一條　字音の拗音を書くには、や、ゆ、よを右側下に細書する。

たゞし特別の場合にかぎり細書せずとも差支ない。

第二條　字音の促音を書くには、つを右側下に細書する。

たゞし特別の場合に限り細書せずとも差支ない。

第三條　字音のウ列長音はウ列の假名にウをつけて書く。

第四條　字音のオ列長音はオ列の假名にウをつけて書く。

第五條　字音のウ列拗音の長音はウ列拗音の假名にウをつけて書く。

第六條　字音のオ列拗音の長音はオ列拗音の假名にウをつけて書く。

字音の表記に關する通則

第七條　左の如き語は發音のまゝに書く。

銀杏＝ぎんなん。　天皇＝てんのう。　三位＝さんみ。

法被＝はつぴ。　十方＝じつぽう。　一邊＝いつぺん。

七寶＝しつぽう。　北方＝ほつぽう。　六本＝ろつぽん。

學校＝がつこう。　脚氣＝かつけ。　甲冑＝かつちゆう。

法度＝はつと。　雜貨＝ざつか。　立派＝りつぱ。

右に基づく字音假名遣改定案の本文は次の如くである。

字音假名遣改定案

第一　ゐ、ゑ、をを、い、え、おに改める。

例

(一)ゐをいに改めるもの

胃、威、位、遺、委、尉、

域、員、院、韻、

水、炊、衰、推、對、遺、類、

(二)ゑをえに改めるもの

會、惠、回、衛、
越、猿、園、圓、苑、援、寃
(三)をを**お**に改めるもの
汚、惡、嗚、
翁、
屋、温、穩、園、遠、怨、

第二　くわ、ぐわはか、がに改める。

例

(一)くわを**か**に改めるもの
化、貨、菓、過、科、火、課、
會、悔、壞、回、怪、快、獲、擴、活、猾、觀、官、還、貫、
(二)ぐわを**が**に改めるもの。
臥、瓦、
外、月、元、丸、願、

第三　ぢ、づはじ、ずに改める。

例

(一)ぢを**じ**に改めるもの
持、痔、
軸、舳、陣、
女、除、重、住、
(二)づを**ず**に改めるもの
豆、頭、途、圖、

第四　わに發音される**はは**わに改める。

例

琵琶の**琶**、枇杷の**杷**、

第五　ユの長音に發音される、いう、いふはゆうに改める。

例

(一)いうを**ゆう**に改めるもの

尤、又、友、幽、郵、誘、由、有、遊、悠、憂、猶、

(二)いふをゆうに改めるもの

邑、揖、

第六　オ列長音に發音される、あう、わう、あふ、おふはおうに改める。

例

(一)あうをおうに改めるもの

鶯、櫻、鸚、央、奥、

(二)わうをおうに改めるもの

往、王、旺、皇、凰、麻、横、

(三)あふをおうに改めるもの

凹、押、鴨、

(四)おふをおうに改めるもの

凹

第七　オ列長音に發音されるかう　くわう、かふ、こふはこうに。がう、ぐわう、がふ、ご

ふはごうに改める。

例

(一)かうをこうに改めるもの

好、考、向、肴、香、講、高、慷、航、幸、効、江、降、校、行、

(二)くわうをこうに改めるもの

宏、紘、光、廣、黄、皇、惶、荒、

(三)かふをこうに改めるもの

甲、岬、閣、

(四)こふをこうに改めるもの

劫

(五)がうをごうに改めるもの

號、鄉、强、豪、傲、

(六)ぐわうをごうに改めるもの

彊

(七)**がふ**を**ごう**に改めるもの

合

(八)**ごふ**を**ごう**に改めるもの

劫、業、

第八　オ列長音に發音される**さう**、**さふ**は**そう**に。**ざう**、**ざふ**は**ぞう**に改める。

例

(一)**さう**を**そう**に改めるもの

掃、双、爪、早、相、倉、曹、壯、操、騒、爭、桑、喪、葬、

(二)**さふ**を**そう**に改めるもの

挿

(三)**ざう**を**ぞう**に改めるもの

造、藏、象、像、

(四)**ざふ**を**ぞう**に改めるもの

雜

第九　オ列長音に發音される**たう**、**たふ**は**とう**に。**だう**、**だふ**は**どう**に改める。

例

(一)**たう**を**とう**に改めるもの

刀、島、討、盜、打、橙、糖、當、湯、桃、陶、稻、禱、悼、

(二)**たふ**を**とう**に改めるもの

答、塔、踏、納、

(三)**だう**を**どう**に改めるもの

道、堂、棠、菊、

(四)**だふ**を**どう**に改めるもの

納

第十　オ列長音に發音される**なう**、**なふ**は**のう**に改める。

例

(一)**なう**を**のう**に改めるもの

腦、惱、濃、

(二)なふをのうに改めるもの

納

第十一　オ列長音に發音されるはう、はふ、ほふはほうに。ばう、ばふ、ぼふはぼうに改める。

例

(一)はうをほうに改めるもの

邦、邦、寶、方、包、保、褒、

たゞし蘇枋の枋は發音に從い、はうをおうに改める。

(二)はふ又はほふ　ほうに改めるもの

法

(三)ばうをぼうに改めるもの

暴、冒、坊、房、亡、望、膨、

(四)ばふ又はぼふをぼうに改めるもの

乏

第十二　オ列長音に發音される、まうはもうに改める。

毛、孟、亡、妄、盲、望、網、

第十三　オ列長音に發音されるやう、えう、えふはように改める。

例

(一)やうをように改めるもの

羊、洋、樣、陽、楊、

(二)えうをように改めるもの

要、曜、遙、謠、夭、幼、杳、

(三)えふをように改めるもの

葉

第十四　オ列長音に發音される、らう、らふはろうに改める。

例

(一)らうをろうに改めるもの

老、勞、郎、廊、

（二）らふをろうに改めるもの

蔦、臘、蠟、

第十五　ウ列拗音の長音に發音されるきう、きふはきゆうに。ぎう、ぎふはぎゆうに改める。

例

（一）きうをきゆうに改めるもの

求、救、休、久、九、仇、嗅、糾、臼、丘、

（二）きふをきゆうに改めるもの

及、級、急、給、泣、

（三）ぎうをぎゆうに改めるもの

牛

第十六　オ列拗音の長音に發音されるきやう、けう、けふはきように。ぎやう、げう、げふはぎように改める。

例

（一）きやうをきように改めるもの

兄、況、狂、鄕、彊、竟、强、匡、京、姜、

（二）けうをきように改めるもの

喬、教、叫、梟、皎、

（三）けふをきように改めるもの

夾、俠、協、怯、

（四）ぎやうをぎように改めるもの

仰、行、形、

（五）げうをぎように改めるもの

堯、僥、

（六）げふをぎように改めるもの

業

第十七　ウ列拗音の長音に發音されるしう、しふはしゆうに。じう、じふはじゆうに改める。

例

（一）しうをしゆうに改めるもの

秋、州、秀、酋、收、修、周、蒐、讐、繡、舟、臭、祝、羞、

(二)しふをしゆうに改めるもの

輯、習、執、集、襲、

(三)じうをじゆうに改めるもの

柔、聚、獸、

(四)じふをじゆうに改めるもの

十、汁、拾、

第十八　ウ列拗音の長音に發音されるちうはちゆうに。ぢゆうはじゆうに改める。

例

(一)ちうをちゆうに改めるもの

啁、嘲、宙、肘、丑、胄、晝、

(二)ぢゆうをじゆうに改めるもの

重

第十九　ウ列拗音の長音に發音されるにう、にふはにゆうに改める。

例

(一)にうをにゆうに改めるもの

柔、乳、

(二)にふをにゆうに改めるもの

入

第二十　ウ列拗音の長音に發音される、りう、りふはりゆうに改める。

例

(一)りうをりゆうに改めるもの

流、留、柳、劉、

(二)りふをりゆうに改めるもの

立、粒、笠、

第二十一　ォ列拗音の長音に發音されるちやう、てう、てふはちように。ぢやう、ぢよう、でう、てふはじように改める。

例

(一)ちやうをちように改めるもの
丁、町、頂、長、聽、挺、
(二)てうをちように改めるもの
兆、超、凋、調、朝、鳥、弔、吊、
(三)てふをちように改めるもの
喋、蝶、
(四)ぢやうをじように改めるもの
丈、場、定、釀、
(五)ぢようをじように改めるもの
重
(六)でうをじように改めるもの
嬢、條、
(七)でふをじように改めるもの
帖、疊、

第二十二　オ列拗音の長音に發音される、ねう、ねふはにように改める。

例

(一)ねうをにように改めるもの
繞、尿、
(二)ねふをにように改めるもの
捻

第二十三　オ列拗音の長音に發音されるひやう、へうはひように。びやう、べうはびように改める。

例

(一)ひやうをひように改めるもの
平、兵、
(二)へうをひように改めるもの
票、表、奏、豹、
(三)びやうをびように改めるもの

鋲、病、屏、

(四)べうをびように改めるもの

秒、眇、苗、猫、廟、

第二十四　オ列拗音の長音に發音されるりやう、れうはりように改める。

例

(一)りやうをりように改めるもの

兩、良、量、凉、梁、令、亮、靈、

(二)れうをりように改めるもの

僚、寥、了、料、聊、

以上は改定假名遣の大様であるが、之で一まづ假名遣は苦しめられずに濟むことになる。發音に關してはアクセントの問題もあるが、日本語は未だこの點の統一がついて居ないので此の說明は省く事にする。

句讀

2　句讀　解釋上發音に次いで重要なるものは句讀(Punctuation)である。句讀は作者の意味を明瞭ならしめる爲に一記述を數文に、或は一文を其の諸要素に分別して、其の間に若干の休止を置き、語句相互間の意味を明瞭ならしめることである。此の句讀は句讀點によつて示す。我が國に用ひる句讀點は三種ある。即句點(。)、讀點(、)、併列點(・)これである。其の他近頃は英語をまれて疑問點(?)(イントラグーションマーク)、感嘆點(!)(エキスクラメーションマーク)、ダッシュ(——)、等を特殊な文法的修辭學的の必要から使用する。又括弧(　)も屢々用ひられる。其の他に引用記號として一重勾(「　」)、二重鉤(『　』)がある。括弧だの引用記號などは純然たる句讀點ではないけれども句讀點に準じて用ひられる。

これまでの試驗問題として句讀を要求してゐるは極めて稀である。けれども現代文讀解の上からは極めて重要なるものである。今後は必ず多く課する樣なる事と思ふ。試驗問題として要求しないにしても讀解に際しては必ず一應は考へればならないものである、頭の古い型の教師は餘りに考へなかつたが新人は此の句讀には多大の注意を拂つて居る。故に漸次に此の種の問題は增加する事と思ふ。實際句讀を正しく切り分ける事が出來れば現代文の解釋は十中八九は出來たものと見て差支へないのである。次に其の一例を示さう。

(注意)一、全文ニ句讀ヲ施スベシ。二、漢字ニハスベテ假名ヲ附スベシ。三、傍線ヲ附シタル箇所ノ意義ヲ餘白ニ解釋スベシ。

虛文空論儀容を飾り邊幅を修め識見氣幹の世を蓋ふに足るものなきは固より吾輩の取る所に非ず大言壯語徒に一時の快を取り沈着寧靜の氣象なきもの亦吾輩の取る所に非ず吾輩の今日に望む所のものは他なし特殊の本領あり識見高く才學敏き先覺先進の士起て以て士氣の挽回を謀り虛文虛禮に拘泥せる紳士と危言壯語に滔々たる壯士との假面を排斥し去らんこと是れなり（能本高工）

句讀の切り方の例

此の文は、傍線を施してある部分の意義がわかれば、句讀の切り方如何によつて、全文の解釋は容易に出來るのである。其の句讀の仕方は次の如くである。

「虛文、空論、儀容を飾り、邊幅を修め、識見、氣幹の世を蓋ふに足るものなきは、固より吾輩の取る所に非ず。大言壯語、徒に一時の快を取り、沈着、寧靜の氣象なきもの、亦吾輩の取る所に非ず。吾輩の今日に望む所のものは、他なし、特殊の本領あり、識見高く、才學敏き先覺先進の士、起て以て士氣の挽回を謀り、虛文、虛禮に拘泥せる紳士と、危言、壯語に滔々たる壯士との假面を排斥し去らんこと是れなり。」

この文に於いて特に注意を要する部分は「吾輩の今日に望む所のものは」から終りまでである。而して此の抽象的な主格に對する說明は何處で終るかが問題である。まづ文の形の上より見る時には、終止の形が三つある。「他なし」と「本領あり」と「是れなり」の三ケ所は是である。若しこの「他なし」に句點を施すと次の文の主語が「先覺先進の士」である樣になつてしまふ。若し「特殊の本領あり」の次に句點を施す時は、文が切れて意味がわからなくなる。故に最後の「是れなり。」の所までは決して句點を施してはならないのである。

句讀の必要

解釋は作者の眞意を捉へる事が主要の事項である。其の眞の意味を誤りなく傳へようする時句讀の必要が起つて來る。故に句讀の仕方如何では作者の思想と全然異なつた解釋となるかも知れない。茲にこんな文がある。

「るり色の水に浮ぶルソー島湖畔に連なる綠樹白壁はるかに紺青の空にそびえて雪をいただくアルプの連峯、久しく單調平凡な景色にあきてゐた私には如何にも心地よく眺められます。」

此の一文はどう句讀をつけるか。

「るり色の水に浮ぶ、ルソー島湖畔の綠樹。白壁はるかに紺青の空にそびえて、雪をいただくアルプの連峯、久しく……」

などとする事も出來る。これでも意味のとれない事はない。かうなると、何だか「ルソー島湖」といふ湖がある樣に思はれる。さうして其の湖畔に連なる綠樹が、るり色の水に浮んでゐる樣に考

へられる。然し作者は決してそんな意味を含めて書いてはゐない。作者の眞意はかうだ。

ろり色の水に浮ぶルソー島、湖畔に連なる綠樹・白壁、はるかに紺青の空にそびえて雪をいただくアルプの連峯。久しく單調平凡な景色にあきてゐた私には、如何にも心地よく眺められます。

此の種の句讀問題はこれまでは餘りに課されてゐない。けれども讀解上から見て、又將來出るかも知れないといふプロバビリチーの上から見て是非共に十分なる練習を積んで置く必要がある

文法上の顧慮

3 文法上の顧慮＝文の解剖。發音が出來て句讀を正しくする事が出來れば記述の器械的讀方は出來る譯であるが、讀解といふ點から見ると未だ不十分である。書かれた言葉各々の官能を明瞭にし、其の相互の關係が明かにならなければ、正確なる理解ではない。そこで文を各要素に解剖して、それらの間の關係を十分に調査闡明しなければならない。

單文と複文の解剖

文の解剖とは、一文を其の要素に分別して、其の各要素の機能を明かにし、さうして其の各要素間の關係を決定しようとする事である。即ち單文であるならば、主語(Subject)述語(Predicate)に別け、次いで述語動詞が自動詞ならば、補足語(Complement)は入らないか？、他動詞ならば、客語(Object)はどれか？―直接客語は、間接客語はどれか？、主語の修飾語は、動詞の修飾語は客語の修飾語はどうだと考へる。複文であるならばどれが主句で、どれが從句で、どれが前提でどれが斷案か。どれが條件でどれが結論か。nn詞の性質・機能はどうか。などと色々の問題が次から次へと出て來る。文法上解剖に關する事を一々說明した日には迚も此の小册子では不可能である。そこで特にまぎれ易い二三を說明して置く。

代名詞に就いて

(一)代名詞に就いて。代名詞は名詞の代用語だから、文中に代名詞のあつた場合には、其の代名詞はどの名詞を代表してゐるのか―英語の所謂先行詞(antecedent)―を明かにしなければならぬ。然し其の兩語の關係は、必ずしも明瞭であるとは限らない。だから周到な注意を要するのである。

言論の自由社會に存せず、編史の業政務の一部たりし世にありては、史氏興朝の爲に回護の筆を執るが故に、記事に曲筆多く、批評に公正を得難かりしなり。其の積習の風を成すや、何等の拘束なき人が、この時期既に去りたる世に在りて筆を執りても亦成敗と是非とを混同してみずから曉らず。陋と謂ふべし。(專檢)

此の文中の「この時期」の「この」は、何を受けたのであらうか。其のまゝ「この時期」として置いたのでは、その點が明かにされずに殘る。こゝでは「言論の自由社會に存せず、編史の業政務の

一部たりし世」を受けたものであることを明かにして解かねばなるまい。

爲めに四圍の風潮に從ひて漂蕩し、腐敗を歎じ墮落を慨するものも、其の矯正せざるべからざるを唱へながら、漸次風潮に推し流されて、齊しく腐敗墮落の渦中に盤旋する、滔々として皆然り。

此の文中の「其の矯正せざるべからざるを」の「其の」は、何を受けてゐるのであらうか。無論、「腐敗墮落」を受けた詞である。

要するに、代名詞が何を受けてゐるか不明瞭な場合には、まづ之を明かにして、其の意味の徹底する樣語を補ひ然る後に愼重に解釋すべきである。

動詞に就いて

(二)動詞に就いて。文語にも、動詞の終止形と連體形とが同じ語尾である場合があるが、口語では、終止形と連體形とが全然同樣である。隨つて終止形であるべき所を、連體形であると誤解して、其の次に來る語につゞけて解釋したり、又は連體形であるべき所を、終止形である如くに解して文を切つたりするやうな錯誤に陷らぬやうに注意を要する。殊に入學試驗問題の樣に、句讀を切つてない文を解釋する場合には此の注意が肝要である。

秋の夕日が西山に沒しようとする際の空の色は太陽から出る黃金色の本性を最もよく發揮する……（松本亦太郎）

此の文の「出る」は終止形か連體形か。句讀が施してなければ一寸迷ふ。若し「出る」を終止形とする時は、次の「黃金色の本性を最もよく發揮する」の句に於いて主語のないのに氣がつく。そこで主語が省かれたものと考へて「それは」と補ふ。「それは」何を指すのか、「それは」は「太陽から出る空の色」を指すと考へねばならない。そこで次の如く考へざるを得なくなる。

秋の夕日の西山に沒しようとする際の空の色は、太陽から出る。その太陽から出る空の色は、黃金色の本性を最もよく發揮する。……」

之でよささうに思はれるが、更に考へるに、原文の意は

秋の夕日が西山に沒しようとする際の空の色は、太陽から出る黃金色の本性を最もよく發揮する。」

と句讀してあるので連體形である。こんな例は幾らでもあるのだから、よほど注意しなければならない。

助動詞に就いて

(三)助動詞に就いて。助動詞にも動詞と同じように終止形と連體形との混同がある。

塔上の鐘は、事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らしある時は無三に鳴らした。祖來る時は祖

を殺しても鳴らし佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝雪の夕雨の日風の夜を何遍となく鳴らした。鐘は今いづこへ行つたものやら、余が頭をあげて蔦に古りたる櫓を見上げたときは寂然として既に百年の響を收めて居る。（夏目漱石）

此の文に「鳴らした」が三ヶ所ある。さうして之は或場合は終止形であるが、他の場合では連體形である。どれが終止形で、どれが連體形だらう。本文にはかう句讀してある。

塔上の鐘は、事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らした。祖來る時は祖を殺しても鳴らし、佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を、何遍となく鳴らした鐘は、今いづこへ行つたものやら、余が頭をあげて蔦に古りたる櫓を見上げたときは、寂然として既に百年の響を收めて居る。

此の樣に嚴重に句讀を施してあれば容易に解釋もつくが、試驗問題には往々無句讀の儘に書く。そこで格別の注意が入る譯である。

使役の助動詞「す」、「さす」、「しむ」と、受身の助動詞「る」、「らる」とは、尊敬の意味に用ひられる事がある。

又使役の助動詞「す」、「さす」、「しむ」は、使役の意味の外に「可能」又は「自然に起つて來る動作」の意味にも用ひられる。

使役の助動詞と敬語の助動詞

故によく其の文を熟讀して、前後の意味を考へて適當な解釋を下す樣に心がければならぬ。例へば

（一）使役の「す」、「さす」、「しむ」。

早く此の藥をのませよ。

茶屋に腰打掛けてラムネを拔かせ榮螺を燒かす。

旗の青きは涙の和ぎたるを知らするなり。

母子に朝早く起きさす。

國民をして天を仰がしめよ。

これを憐みて金を償ひ歸參することを得しむ。

（二）敬語の「す」、「さす」、「しむ」。

我をはかるなりけりとて泣かせ給ふ。

大いに民心を得させ給ふ。

この年み位に卽かしめ給ふ。

の如く、使役の場合には、客語を要するが、敬語の場合には客語がないから、少し細心に注意すれば直ちに了解出來よう。「る」、「らる」、について も同様である。即ち

（一）受身の「る」、「らる」。

人に問はるゝ時はいかゞ答へん。

自ら信ずるものは毀らるれども怒らず。

懲せられて士班に列せらる。

（二）敬語の「る」、「らる」。

生きては王事に勤勞せられ、死しては國家の鎮護となられしなどその功績のほど何にかたとへむ。

まづ靜まられよ。

ともかく試みられよ。

の例の示す如くに、受身の場合は客語があるが、敬語の場合には之がない。故に此の點に注意すれば、直ちに了解する事が出來よう。

又「べし」は、普通推量、可能、當然（「筈である」、「ねばならぬ」、「相違ない」等の意）、命令、

決意（又は斷言）等の意味に用ひられる。例へば、

古寺の庭に紅つやゝかなるは若楓なるべし。（推量）

風起らば雨止むべし（同）

などと推量をあらはすが根本の意義である。がこれより轉じて、可能の意となる。

以て其の注意深きを見るべきにあらずや。

三尺の秋水、鐵をも斷つべし。

更にこれより轉じて適當なることを示す場合となる。

事務をとるには瑣事なりとも仔細に吟味すべし。

これより更に轉じて當然の意となる。

人は必ず道德を守るべきものなり。

油盡くれば、火は消ゆべし。

更に轉じて命令の

講堂に參集すべし。

の如き意を表はすものとなる。

右の如く「べし」は種々の意味に用ひられるものであるから其の場合、場合を察して正鵠を得た解釋を施さねばならぬ。

助詞に就いて

(四)助詞に就いて。副詞にも亦誤り易い二三がある。其の中で最も曖昧たるものは「の」である。

助詞の「の」

(1)最も普通なる體言を修飾する「の」。

義經の鎧。牛の角。机の上。

梅の花。中の箱。上の石。

花の都。浮草の身。夢の浮世。

近くの山。わざとの使。京までの道中。

(2)主語を示すもの。

梅が枝に鶯の來鳴くはよいものだ。

(3)「或は……など」の意を含むもの。

痛いの痒いのといつて話にならぬ。

今更よいのわるいの何のかのといふ事は承知ならぬ。

死ぬの生きるのと大騒ぎをした。

助詞の「に」

(4)代名詞として用ひたもの。

待つて居るのは辛い。

行きたいのを我慢した。

これは僕ののである。

上のが君のにして下のが僕のなり。

助詞「に」にも數種の意味がある。

(1)目標を示すもの。

人に物を與ふ。師に道を問ふ。

花に舞ひ月に歌ふ。山に近し。

甲は乙に等し。

富士山は駿河の國にあり。

秋にありては紅葉を可とす。

(2)添加の意味。

月に叢雲、花に風。

牡丹に唐獅子、竹に虎。

(3)枚擧の意味。

子供に女に年寄だけだ。

あなたに私にこの方にすべて三人です。

(4)其の他に普通の副詞としての「に」もある。

あきらかに知る。

うれしげに見る。

の類是である。以上は極めて平凡なものであるが、時に混亂を招き易いものであるから注意を要する。

助詞の「や」

助詞の「や」も亦色々の意味に用ひられる。

(1)疑問の場合。終止形に續く。

わが思ふ人はありやなしや。

思ひきや、かくあらんとは。

さることあるべしや。

文の解剖に就いて

(2)枚擧の意。直接體言に續く。

みな人は蝶や花やといそぐ日も。

何となく花や紅葉を見るほどに。

(3)感投の意。

かゝれや者共と下知す。

うてやこらせや。

うれしやたのしや。

難波津に咲くやこの花。

さらしなや姨捨山。

よの中はいかにやいかに。

(4)反語。

誰か之を目して全く失敗せりとせんや。

以上の如く助詞にも多義にして動もすれば誤り易いものが多々ある。心して解すべきである。

(五)文の解剖に就いて。日本文には、主語、客語、補語、述語等の省略されたものが多いから

文章を解釋する場合には省略された要素を補つて觀察しなければならない。さうしないと、解釋其のものが曖昧となるのみでなく、意外な誤解をする虞れがある。これは難解の文意を考へる場合にも、又意味の多義に亘る場合にも、最も必要な觀察法であると謂つてよい。

我が國文化狀態の第一缺陷は、主として西洋文明の歷史的考察が未だ我が學界に洽く普通せざるによらずんばあらず。而かも此の考察は、實に容易の業にあらず、必ずや識見の非凡と典籍の涉獵とに加ふるに、彼の國土の文物に親炙し、彼の人民の思想風俗を體驗し、若しくは少くともこれに接觸して、始めて博大且深刻となり、眞に事象の正鵠に中り得べきのみ。

（海軍）

文字・語句・文章の意味附け方

此の文中の「博大且深刻となり」は、何に就いて言つた語であらう。之を明示して置かなければ意味が徹底しない。これは前の「西洋文明の歷史的考察」に就いて言つた語で、解釋する場合には之を補つて說かねばならない。

4 文字・語句・文章の意味附け方。幾ら上手に讀めても、幾ら精密に解剖されてもそれだけでは十分に作者の思想に接する譯には行かぬ。言語・文章は符牒である、記號である。故にこの符號といふ假面の代表する本體を捉へねばならない。言語だけでは、何にもならない。さういはれる物

それ自身、さう書かれる物それ自身を見出さねばならない。かやうに言語・文字の代表する思想それ自身を言語・文字に結びつける事を「意味づける」といふのである。

換言法

處が同一音韻の言葉は永久に同一內容を持つものかといふにさうは行かぬ。同じ言葉でも時代によりて違ふ。例へば「車」といふ言葉でも、平安時代にはそれは牛車を意味したであらうし、今日では人力車を意味し、更に進んだ貴族仲間では、それは自動車に解せられ、仲仕には大八車、土方にはトロッコと考へられるかも知れない。といふ風に其の內容が人により、場所により、時によつて異なる。

また或場合には、同一の語も內包と外延との廣狹によつて、其の意義の範圍を異にする。「犬」といつても、其の指す犬が一般的な犬といふ意義の事もあるし又「隣のポチ」を指す事もある。故に解釋に當つては餘程細心の注意を要する譯である。此の意味附け方にも種々ある。一々之を列記する事は到底不可能であるので其の中の主なるもの擧げて說明しよう。

(1) 換言法。これは或言葉を他の言葉でいひかへる方法である。例へば「老人」といへば了解出來ないけれども「としより」といへば合點が行くといふ樣な場合に「老人＝としよりのこと。」とする樣なものである。これは最も初步的な意味のつけ方であつて、意味附け方は勿論是一つではない。

然るに世には換言法を以て唯一の意味附け方の如く考へて、何でも彼でも、言換へなければ承知出來ない樣に思つてゐるものもある。それは大きな考へ違ひである。そこで他の意味づけ方を順に說明しよう。

例解法

(2)**例解法**。茲に「貨幣」といふ言葉がある。其の言葉の意味はと聞かれると、誰でも一寸困る。此の時「貨幣とは錢のことだ」といふのは換言法である。その時「錢とは……」と聞かれたら、「貨幣のことだ」と答へたら循環論法だ。そこで貨幣とはかういふ性質のものだといへばよく合點が行くのだが、さてなか〳〵其の性質を捉へる事が出來ない。そこで「貨幣」といふ名稱に含まれるものを考へて見る。金貨がある。銀貨がある。銅貨がある。そこで、「貨幣とは金貨や銀貨や銅貨などの錢のことである。」といへば成程と合點が行く。かやうに例を擧げて說明するから之を例解法といふ。

用例法

(3)**用例法**。茲に「壯快」といふ言葉がある。之を解釋するに「愉快」というては物足りない樣な氣がする。「氣持ちがよい」といつても變だ。「面白い」でも滿足しかねる。といつて「壯快とはこれ〳〵である」とも一すいひかねる。然しこれを使用する事は出來る。其の時、

「飛行機に乘つて大空を飛び廻るのは壯快である。

富士山の日の出は實に壯快の限りである。

昨日の野球勝戰の壯快さよ。

の如く、壯大なもの、勇壯なるものに對する時の心よさを壯快といふ。」

といへばよく解る。これは例を用ひて解釋するから用例法といふのである。

定義法

(4)**定義法**。定義は最も完全に概念を意味附ける法である。定義を與へられる時其の概念は始めて判明（distinct）にして明晰（clear）な正確なるものとなる。故に學術上の用語は皆一定の意義として定義が與へられてある。例へばこゝに「國家」といふ言葉がある。「國家とはクニの事だ。」といふのは換言法である「日本・支那・英國などの樣なものを國家といふ。」は例解法である。然しこれでは未だ常識的の解釋でまだ十分に理解されない。そも〳〵「國家」は法學上の術語である。故に正確なる國家の概念を得ようとするならばどうしても法學上から定義を與へねばならぬ。卽ち「國家とは一定の民族が一定の領土により獨立の主權を以て之を統治する團體をいふ。」といはねばならぬ。

正しい定義の仕方

正しい定義の仕方。本來定義の職分は與へられた概念を其の他の概念と明晰に區別するにあるので、まづ其の概念が如何なる種類の概念に屬するかを示さねばならぬ。換言すれば概念の屬す

る上位の概念を擧げる。即ち「人」といふ概念を定義するには、其の上位の概念「脊柱動物」を示して「人は脊柱動物なり。」とする。かうすれば、人は節足動物でもなければ軟體動物でもない、よほど範圍が縮小されて來る。然しそれだけでは未だ明晰ではない。即ち、同種の脊柱動物—獸類鳥類・魚類なども脊柱を持つてゐるではないか。それらとどう區別するかの問題が起る。是に於いて人と他の脊柱動物とを區別する種的差異即ち「人」についていへば、「人」が他の脊柱動物と異なる特性を捉へねばならぬ。さうして今假に「人」の特性を「理性を有する」ことであるとする。さうして「人は理性を有する脊柱動物なり。」と斷定する。かうして「人」たる概念は始めて明晰となる。

説明法　(5)**説明法**。定義するのが一番正確な意味附け方であるが、それほど其の概念の性質が研究されてゐないものは據なく他の方法を採られねばならない。それが説明法である。説明法に色々ある。

差別法　差別法。これは或事物の概念につき、之と混同され易い事物との差異を指摘して其の區別を明白にするものである。例へば、

西洋人と日本人と異なる處は、一は碧眼にして一は黑眼を有する點である。

共和政治は民德を基礎とし、君主政治は名譽を基礎とし、專制政治は恐怖を基礎とする。

熱心の狂奔と異なる處は、其の目的が高尚で其の行動が度を越えないといふ點である。

記載法　などといふの類である。

記載法。これは定義に必要であると否とを問はず、事物の外部に發して、容易に吾人の感官に映じ易い數多の屬性を列擧して宛然其の事物を眼前に見る如くするものである。

定位法　定位法。一定の順序又は階段をなしてゐる概念につきて其の相互の關係的地位を明白にするものである。例へば、

財は散じて奢侈に流れず、物を惜んで吝嗇に陷らず、之を節制といふ。

勇氣は怯懦と粗暴との中間なり。

などの類是である。

例證法　例證法。これは類似した適例を引用して概念を明白にしようとするものである。例へば、

繪畫は無聲の詩なり。

水晶は硝子に似たる結晶なり。

鰻は其の形蛇に似たる魚なり。

の類是である。

反例法　反例法。之は一對の反對概念の一方を説明するに屢々用ひられる。例へば、

右は左の反對なり。

善は惡の反對なり。

然しこれは循環論證に陷るものであるから說明法としては極めてまづいものである。

發生的說明法

發生的說明法。之は或事物の發生の順序を述べて之を明晰ならしめようとするものである。例へば、

ゴムは熱帶地方に產する或植物から取る白色の液を原料として製造したるものなり。

の如き類である。

以上の如くに說明法には色々の方法がある。これらを適當に使用して意味を正確ならしめる樣に勉めねばならぬ。正確なる知識は思考の賜であるから、各自相當に工夫をめぐらして出來るだけ明瞭に意義をあらはす樣に心掛けねばならぬ。

抽象的叙述の具體化

5 抽象的叙述の具體化。抽象的の叙述は解つた樣で其の實明瞭を缺くものである。而して此の不明瞭を明瞭ならしめるものは具體化である。具體化といへば言葉が六ケしいかも知れない。此の事は屢々「例を擧げて說明せよ」といふ言葉で發表される。即ち抽象的叙述は例を擧げて說明する事が出來て始めて其の眞意が了解され得るのである。畢竟するに抽象的の叙述といふものは具體化個々の實例、事實から類似の點を抽き出して之を總括して出來上つた概念であるのだから。そこで其の結論としての抽象的叙述の了解はどうしてももとの個々の具體的事實に環元しなければ、眞意を解する事が出來ない譯である。從來の試驗問題は難解の語句を平易な言葉に換言すれば、それで滿足されたのであるが、現代文には、そんなに難解といふ樣な語句は多くない。讀むことも出來る、意味もおぼろげながら解る。けれども未だ明瞭さに於て缺けてゐるといふのが多い。つまり幾ら平易に換言しても了解の不十分なのがある。これは發表が抽象的であるからだ。かゝる語句の眞の了解は必ず之を具體化する事に俟たねばならぬ。所謂摘解の問題などには之をドシ〳〵採用されるがよいと思ふ。何れは出題者の方から要求する樣にもなる事であらう。例へば

成敗と是非とは判然別事に屬す。[1] 成敗は當時の形勢によりて別れ、[2] 是非は後人の公說によりて定まる。若し成者皆是にして敗者必ず非ならば、君子不遇の嘆あらずして正人雪寃を後代に望むの慨なかるべし。

右の文を讀み傍線の箇所を解釋するに當つて

(1) 成功と失敗とは其の時の有樣によつていづれともなり。

(2) よいかわるいかは、後の世の人の公平な意見によつて定まるのである。

具體的說明の例

とした丈けでは未だ不十分である。

(1)成功と失敗とは當時の有樣によつていづれともなる、即ち湊川の戰に正成の敗れたのは當時の形勢が官軍に非であつたが爲であつて、若しも北畠顯家などがこの戰に加つて官軍の兵力が今少し優勢であつたなら、勝つて居たかも知れない、といふ樣に事の成ると敗れるとは全く其の時々の有樣によつて別れるものである。

(2)其の事のよいかわるいかは後の人の公平な意見によつて定まるものである、即ち或事に成功したもの必ず善いのではない、失敗したもの必ず惡いのではない、湊川の戰に於いて敗れた正成を善とし、勝つた尊氏・直義を惡とするのは皆後の世の人の公平な判斷によつて定まるのである。

と例を擧げて具體的に說明して始めて其の叙述の意味が眞に明瞭になる。こんな例は幾らでもある。解釋者にここまで綿密愼重に解釋するの用意があつて始めて、其の文は眞に明瞭にされるのであるから、不斷から其の心懸で練習をして置く必要がある。然るに玆に大いに注意する事は其の具體化に用ひる引例である。この引例が惡ければ全く其の抽象的叙述の意味を損ふことになるので最も適當なる好例を捉へる事に專心意を用ひなければならぬ。

構文の改造

6構文の改造。構文には一定の正規な型（レギュラー フォーム）がある。主語はすべての先頭に立ち、述語は主語に續く。さうして補足語は何處に、修飾語は何處にと、それ〴〵の要素にはそれ〴〵、正規な型に於ける固有の位置がある。然しこれらの正規な順序も感情の爲には屢々打壞されて、色々の力を現はす變態を現はす。この變態といふものは理性的に考へて變態なので、感情的に見ると却つて此の變態が自然的の表現形式であるかも知れない。例へば、

「めがねを掛けてはつぴ着て安ぢいさんは、廣き工場の片すみにせぐくまり、常に何をか刻みゐる。」

と理智的に述べただけでは、何等の感情も現はれてゐない。然しいはんとする人の思想だけは現はれてゐる。これで了解は出來る、述べてゐる人の思想だけは捉へられる。けれども何等の感興も起らない。凡そ感興といふものはかうした規則だの、順序だのと理智の冷眼で眺められては述も起らうにも起り得ない。感興はすべてを超越する、すべての規則を突破する。さうして何物の障害をも認めないほど力强く、自由に、奔放に、ほとばしり出るものである。從つて感興が高まれば高まるほど、理智は影をひそめる。理智が影をひそめる時、其の思想は、すべての拘束を脫して、感興其のものの自由なる支配にまかせる。故に其の表現は變態たらざるを得ない。

廣き工場の片すみに
安ぢいさんはせぐくまり
常に何をか刻みゐる
めがねをかけてはつぴ着て。

何と面白いではないか。眞に感興其のものである。角がない、無理がない、聞いて自然だ。然し靜かに冷やかに、理智の光りに全文を照して、合理的に之を解剖すれば、確かに變態である。故に正確に其の思想を捉へようとするならば、どうしても正規な順序に直さなければならない。かやうな例は尙幾らでもある。次に其の二三の例を揭げよう。

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと靜かにて、熾熱燈の光の晴れがましきもやくなし、今宵は夜毎にこゝに集ひ來る骨牌仲間もホテルに宿りて、舟に殘りしは余一人のみなれば。（森鷗外著「舞姫」）

この文で、中等室の卓のほとりは非常に靜かで、今宵は夜毎にこゝに集ひ來る骨牌仲間もホテルに宿つて、舟に殘つたのは余一人だけなので、熾熱燈の光の晴れがましう輝いてゐるのも用がない。』として始めて「やくなし」の意味が解る。

改造の例

正規なる文に改造

「搖れぬ樣にやつてくれと、警部は更に人夫にむかつて諭告した。護送掛は鰐口を握つて門外に立つた。吊臺は徐かに揚げられた。天白く星疎らに、風は梧桐を動かして雞の聲が遠方近方に聞こゆる時。」

この文でも同樣で「天白く星疎らに、風が梧桐を動かして雞の聲が遠方近方に聞こえる時に」其の前に書いてある事件が行はれてゐたのである。故にここを正規な文に直されば、本文の眞義は解されない。

かういふ文に出會つた時には、出題者もこの邊に要點を持つてゐるものであるから、受驗者はよく注意して答案を認めねばならない。

以上は主として感興本位の倒裝文を正規な順序の文に改造する事であつたが、構文の改造は普にそれのみではなくて、他の必要からも起る。即ち同じ思想でも色々の表彰形式がある、また似而非なる表現法もある。例へば、

蜘蛛が空中に張つた網で蟬を捕へた。

蟬が、空中に張られた網によつて蜘蛛に捕へられた。

の二文に於て兩者は全く同じ事實を書いたものであるが、表彰形式は全然異なるもので、前者は

能動態で、後者は受動態である。かくの如く能動態の文は受動態に、受動態は能動態に改造して始めて其の文意を正確に捉へる事が出來る。其の他文の改造は文意を明瞭にする上に必要であるから、肯定は否定に、否定は肯定に、全稱は特稱に、特稱は全稱に直して考へて見るがよい。類似な思想で書き換へて見るがよい。反對の思想で書き換へて見るがよい。其處にクリヤーな思想が得られデイスチンクトな概念が得られるだらう。

作者の立場の考察

7 作者の立場の考察。文は作品であり、作品は作者の個性的顯現である。同じ物でも見る人によ、見方により、見る時により、見る場所によつて種々に現はされる。臆病者には瓢簞もお怪ケ異に見えよう、然し酒呑には酒を聯想する種となり、一瓢を携へて一日吉野山に遊ぶなどゝ勝手な熱を吹きたくなるだらうし、歴史家は太閤の馬印を思ひ浮べ、經世家は之を以て餘を押へるの要領か以て唯一の處世法と觀ずるであらう。然し修養家は「ぶら〳〵と暮すやうでも瓢簞の胸のあたりにしめくゝりあり」と喝破して參禪修養の活教訓とするであらう。同じ瓢簞も見る人によつてかくも異なる。而して何れを眞、何れを僞といふ事も出來ぬ。何れも眞である。かうした異なつた思想、異なつた感情が、異なつた人の異なつた技巧によつて表現されるのである。故に百人百色である。即ち個性の顯現である。而かも更に各人の表現の仕方も空間的に環境の如何により、時間的には境遇の相違によつて、千種萬態となる。即ち文は個性が刹那、刹那の感じによつて、色々と表現形式に差別が出來る。かういふ譯であるから、文を通じて其の個性の刹那の生活に面接し、之を解釋するにはどうしても作者の立場を考察しなければならない。

そのうちに興義は、次第にひもじくなり出した。かれは何かを食はうとしたが、生きた雜魚より外に食ふものがなかつた。

「わしは佛弟子ぢや。殺生をしてはならない。」

かれは、さう考へると、空腹をかゝへたまゝ、あちこち泳いでゐた。小さい雜魚は、そのひもじさうな青い目つきを見ると、すばやく委を藻隱れの彼方や、砂の高みのかげにかくしたりした。興義の空腹はしだいに烈しくなり、何か食はねばならなかつた。ときには、心とはべつべつに突然雜魚を追ひかけようとしては、ぢつと尾ひれをちゞませ、物蔭にひそみながら考へ込んだ。おれは、あゝいふ生きものをあやめてはならない。この一事だけは護られねばならない。興義は、目まひのしさうな空つぽなからだの奥のちからが脱け、ふら〳〵して、ぼんやり蒼い水中をながめ込んでゐた。（室生犀星）

この文はこれだけ讀んでは何が何だか譯が分らない。これは魚になつた興義―興義といふ僧が病

作者の立場を考察して意味初めて判明す

氣で意識を失つて幾日か寢てゐた、その間に魚になつて（勿論夢幻の中に頭の中でそれを感じたのである）、細かに魚の心理を經驗してゐる筋の一節である。即ち自分は佛弟子だから生物を殺してはならぬと考へながら、空腹に堪へがたさに、我知らず雜魚を追掛けては、はつと自ら反省して恥入る所の心理描寫である。かう考へて讀んで始めて意味が分る。

讀むに從つて、拙劣な布置と亂脉な文章とは次第に眼の前に展開して來る。そこに何等の映像をも與へない叙景があつた。何等の感激をも含まない詠歎があつた。さうして又、何等の理路を辿らない論辯があつた。彼が數日を費して書き上げた何回分かの原稿は、今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に心を刺されるやうな苦痛を感じた。

（芥川龍之助）

之は小說の原稿に失敗した人、馬琴が八犬傳の原稿が全然失敗の作だと自ら認め、反省しながら失敗作を讀んで行く時の描寫である。其のつもりで讀まれば其の眞意は分らない。

生命の力の弱いものは、暫くその活動を封じて外界との交渉を絶たしておけば、大方その間に火を萎びさせていぢけてしまふか、だれてしまひます。項羽は迂闊にその筆法で私等を葬らうとしたのでせう。併し眞に力强い生命は、到る處に生命の力を見出し、それを糧にして益々育つて行きます。如何なる闇も彼の火を强くこそすれ、弱める事は出來ません。かゝる時に、眞の火を持つてゐるかゐないか、又その火がどの位の力を持つてゐるかがわかるのです。（長與善郎）

之は韓信が劉邦に向つていふ詞である。そんな事は勿論この文だけでは容易に分らないが、然し本文中に「項羽は迂闊にその筆法で私等を葬らうとした……」とある處から考へると項羽の敵たる事が分る。即ち劉邦方の誰かの言葉であることが分る。さうして其の言葉遣から考へると、其の敬語の具合から劉邦に家來が言つてゐる事が分るのである。かう見當をつけて、其の立場で考へて見なければ、全文の眞義を捉へる事が出來ない。

以上で大體解釋的方面より見ての要點は擧げ得たと思ふから、受驗者達は愼重に前述諸項を頭に浮べて問題を考察し、答案の作製をするならば完全に近いものを得られよう。

第二節　理解力査定問題

此の解釋に關する問題は種々あるけれども今日高等學校或は專門學校入學試驗に出される問題は、單語問題、通解問題、摘解問題の三種に纏める事が出來る。

第一項　單語問題

單語問題

單語問題といふのは、文中にあるのを摘出していふのではなくて、獨立した語句として提出される問題である。從つて其の語句の特殊的な意義を求めてゐるのでなくて、其の語句の根柢的意義、代表的意義（若しくは正しい讀方）を聞いてゐるのが原則である。此の語句の意味附け方については前節四項に說明して置いたから既に了知の事と思ふが重れて云へば、社會＝世の中、理想＝高い望み、といふ樣な換言的解釋は最も陳腐な答案で、全然惡いとはいはぬけれども、甚だ勝味の少ないものである事を忘れてはならない。摘解問題中に單語解の問題のある事があるが、それはその文中に於ける相對的に前後に調和する解釋を要求してゐるのであつて、本項述べる所の單語問題とは區別して考へればならぬ。畢竟するに單語問題は、其の單語に對する根柢力の有無を驗するものであつて、摘解の方は相對的解釋力を驗するのであると思へばよい。故に出來得る限り、定義法なり、說明法なりを用ひるがよい。特に學術上のテクニツクに對して常識的な字義的換言法を用ひる事は最も慎しむべきである。例へば、意識＝こゝろ、眞理＝まことの道理、本能＝本來の能力、などと解釋することは餘りに常識的で、科學的素養の貧弱なる事を暴露したものといつてよい。中學生や小學生ならそれでもよいが、苟しくも專門學校等に入學しようとする競爭試驗の答案としては貧弱である。即ち、意識＝精神の覺醒辨別の狀態、即ち心が醒めてゐて自分は今何を考へてゐるかをはつきりと知つてゐる時の心の狀態をいふ。眞理＝論理上論證を經たる普遍の原理をいふ。本能＝何等の教育指導を受くることなくして、自ら目的に合する行動をなし得る生得の諸能力をいふ、例へば吸乳、戀愛、模倣、鳥の營巢等の如し。要するに語句の解釋は摘解或は通解より以上に困難なるものであるから、愼重に其の本來の意義を考へ、丁寧懇切なる解釋を下す樣心掛ければならぬ。

全文通解問題

第二項　全文通解問題

これは最も多く用ひられる問題形式である。即ちなるべく全文の語句なり表現なりに從つて而かも之に囚はれずに原文を平明な日用語に改め、それに依つて原文の思想を明かにするといふ事である。それは單なる言葉の言ひ換へと考へる事は斷じて宜しくない。要は原文の含む思想の平明化にあるのだから、言葉の言ひ換へは思想平明の手段としてのみ必要であつて、必要以上の言ひ換へは、それによつて却つて原文の意味を分りにくくするものであるから特に注意を要する。

それから又通解の外に無闇に摘解をやるのも宜しくない。通解は通解だけで原文の思想を平明化するのを原則とする。摘解までもやらなくては其の原文の意味が明かにならぬといふのは、一面からいへば其の通解が不十分であり、且下手であるといふ事を證するものである。隨つて「通解せよ」といふ時に摘解をやる事は萬止むを得ない場合即ち通解だけではどうしても解釋が不十分だといふ場合に限るのである。と申して大ざつぱな解釋は宜しくない、難解の語句は勿論、平易な語句の箇所にも周到な注意を拂ふ事が肝要である。平易らしく見える所で案外躓くものである、故に一語一句がすべて問題であると考へて水も漏さぬ緻密さで全部を掬ひ上げなければならない。

通釋は文章の種類によつて多少の手心を要する。文語文は形式に、口語文は內容に重きを置くべき事は前揭の通りであるが、其の區別よりも文章の內容、記述の傾向によつて特に解釋上注意を要すべき事項がある。

叙事的問題

叙事的問題は大體から言つて其の語句さへ解れば、其の意味は捉へ得るものではあるが、其の發表の仕方に注意しないと原文と大差のない樣な平凡な解答になり易いものである。この種の問題中史實、傳記、地理等に關する問題を完全に解釋する爲には一般の歷史や地理に關する知識が必要である。例へば問題中に、

明治の革新には壽永の昔の如き偉人の傑闘して人目を眩せしむるものなし。

といふ句があつたとして、其の「壽永の昔」は安德天皇の御代で平家が亡びて源氏が之に代つた時代の意である、隨つて其の次の「偉人」は源頼朝といふ事になる。必ずしも此の事實を說明して解釋する必要は無いにしても、少くとも之を意識して解釋しないと徹底した解答は出來得ない。又人物に就いても同樣で、「縣居翁」は加茂眞淵の事であり、「小松の內府」は平重盛の事であり、「攝關の家」は藤原氏の事である位は知つてゐて附記する位でなければならぬ。然し既知の事柄でも必要の限度を超えてまでも委しく書き立てることは宜しくない。

之を要するに叙事文解釋に於ては、事件なり、景觀なり又は之に伴ふ感想なりを、其の問題によつて十分に思ひ浮べて其の文の言はうとする所を、其の語に應じて遺漏なく紹介するといふ心持で書けばそれでよいのである。

論說的問題

論說的問題は叙事的のそれと異なつて、原文の意味を其の儘傳へた丈では完全な解答とならないものが多い。故に其の論點や論旨が十分に了解出來る樣に、前後の關係が明瞭に分る樣に、周到なる注意を拂ふ事が肝要である。然し單に論點や論旨が明らかにさへなればそれでよいと言ふのではない、根が國語の問題だから語句の解釋も決して忽せにせず、更に進んで此の點にも多大

の注意を拂ふ必要がある。あまりに論理を辿る事に沒頭し過ぎて語句の注意を忘れると、とんでもない誤解をして勝手な理窟をこねる樣な事になるから、一々の語句に注意する事は叙事文同樣必要である。

第三項　摘解問題

摘解問題

次に研究すべきは主要部摘解の問題――文中に指定されてある主要部のみを解釋する問題である。勿論通釋の一部分を要求するものに過ぎないのであるが、全文の通解よりも負擔が輕いと看做す事は出來ない、即ち摘解は獨立した語句文題を解釋するのではなくて、全體の一部としての其の部分の解釋を要求するのであるから通解の一部分を更に詳しく深く說明する事を要求したものと見てまづ差支へはない。隨つて範圍は狹いが深味がある。故に通解より更に愼重なる考慮を要するのである。

此の種の問題に臨んでは、全文を通釋すると同じ態度でまづ全文を仔細に觀察し、而して他の部分との意味の關係を精査した上で、解答を作製しなければならぬ。一部分の解釋であるからと油斷して、其の部分だけの觀察に沒頭して全文の觀察を怠るのが一番惡い事である。

單語や成句の問題と大差なき問題

此の種の問題中には、たゞ單語や成句の問題と大差のない樣なものもあり、それより稍複雜なものもあり、又更調子の變つた語句其のものは極めて平易だが意味の曖昧なものなどがある。

單語や成句の問題と大差のない問題、例へば、

つら〳〵國運推移の迹を察するに、常に二樣の趨向の相並び相繼れて進むを見る。倘文の風と武斷の氣と、一方は華奢一方は質素、彼は變化を好み、此は秩序を貴ぶ。これらの趨向の古今に亘りて起伏するさまは、恰も紅白二條の綱を一筋に結りたるが如し。

などの如きもので

(1)國運推移の迹＝國家の成行きのうつり變つて行く次第。
(2)趨向＝おもむき向ふ事。かたむき。傾向。
(3)倘文の風＝文學を倘ぶ氣風。
(4)武斷の氣＝武力を後楯にして政務を斷行する氣風。
(5)紅白二條の綱を一筋に縒り＝紅色と白色との二本の綱を一本によりあはせる。紅と白とが表となり裏となりかはるゝあらはれる樣に、倘文の風と倘武の風とが互に勢を得てゆく事をあらはす。

難語難句の類を主とした解釋

の如き解釋で大體宜しからう。

次は稍困難なるもの即ち所謂難語難句の類を主として解釋させようとするものである。例へば

さても保元の亂は、前古未曾有の大變にして、天慶以後(1)兵革動くこと屢々なれど、(2)輦轂の下に於て、(3)骨肉相鬩ぎ、道義地を拂ひしこと、此に過ぎたるはなかるべし。これより(4)源平迭に時を得て、皇室(5)陵夷の端全くこゝに開けぬ。（海機）

の如き類で

(1)兵革＝戰爭。兵は兵器で、矛戟刀劒の類。革は革で作つた甲冑、即ち武器の意。これより轉じて戰爭の意に用ひられる。

(2)輦轂＝「輦轂の下」の略。天子のおひざもと。帝都。「輦轂」はもと天子の乘輿のこと。

(3)骨肉相鬩ぎ＝肉親の親子兄弟が爭ひ合つて。

(4)源平迭に時を得＝源氏と平氏とがかはるがはる榮えて。

(5)陵夷＝次第に衰へる事。陵は丘陵、夷は平坦、丘陵が次第に平らかになる樣に次第に衰へる事。

などは是で、前の單語や成句の問題に比すると稍取扱ひ易いかも知れない。唯これらは其の難語

解釋上考慮を要する問題

句の意味を記憶さへして居ればよいのだから。

第三は語句其のものは極めて平易であるが解釋上考慮を要するものである。例へば、

足らざることを知るは滿つるに到る路なり、(1)至らざるを悟るは上に向ふの途なり、吾が趣味の猶足らざるを知り猶至らざるを悟る者は幸なり、其の人の趣味將に漸く進み漸く長ぜんとす、吾が趣味の幼きをも省みで我が善しとするものを必ず善しとし我がをかしとするものをいつもをかしとして高きに遷り卑しきを改むることをせぬ者は幸無し、(2)其の人の心の花既に石となりて生命を失ひ居ればなり、(3)慾望は我を桎梏す、自在なし、趣味は我を繫縛せず、自由あり、其の物を得ざれば苦しみ其の願を遂げざれば惱み吾が心を外のものの奴隷として其の使役する所となるは慾望の然らしむるなり、(4)慾望は人を窘しめ趣味は人を活かす、趣味饒なる人は幸なるかな。（高校）

此の問題は難語は殆んどない。又長文である割合に、解釋を要求されてある部分は實に僅少である。然し全文を十分に熟讀玩味して精察熟考しなければ傍線の部分の意味を明瞭に捉へる事は困難である。即ち

(1)至らざるを悟るは上に向ふの途なり。

此の問題の解答をするに、まづこのセンテンスの主部は何であるかを考へねばならない。それは「至らざるを悟る」といふ事である。さて其の「至らざる」ものは何であるか。此の「至らざるを悟るは」は「足らざることを知るは云々」と共に廣く一般に就いていふ所の謂はゞ概論であるから、すべての事に通ずるものであるが茲では「學德才藝の類」を指したものと考へて可い。そこで本問は、

「一體自分は學德才藝等何に就いても未だ十分といふ所に達してゐないと自覺することは向上發展の第一歩である。此の自覺によつて自分は完成に至るのである。」

の意で、「途」は「方法」「手だて」とも解し得るが、其の意味に用ひる時は普通に「道」と書く。「途」の本義は「筋道」「プロセス」の意であるから「向上發展の方法」と解くよりは「向上發展の第一歩」とする方が適當な解釋である。

(2)「その人の心の花既に石となりて生命を失ひ居ればなり。」

此の問題は澤山の疑問がある。第一は「その人」とは誰を指すか。第二は「心の花」とは何の事か。第三に「石となる」とは何を意味するのか。

「その人」は其の前に書いてある——つまり「自分の趣味の低級にして幼稚であるのにそれを悟らず、趣味の向上を圖らない人」の義である。

「心の花」は「趣味を感得する心」である。

「石となり」は「石の樣に無味乾燥無活動となる」の義。

故に本問は

「自分の趣味の幼稚であるのにそれを悟らず、趣味の向上を圖らない人は、其の美しい花の樣な心即ち趣味を感得する心がもう石の樣に固まり乾からびてしまつて、活動する事が出來なくなつてゐるからである。」

の意である。

(3)「慾望は我を桎梏す、自在なし、趣味は我を繫縛せず、自由あり。」

は比較的平凡であるが、何故「慾望は我を桎梏す」るか、何故「趣味は我を繫縛せざ」るかを説明しなければならない、即ち

「慾望は目的物があり、其の目的の遂行達成を期するといふ點から、我が心を束縛して、心に自由がない。これに反して趣味は、自分で心を樂しますだけであるといふ點から、我が心を束縛しない。だから心に自由がある。」

の意である。桎梏（シツコク）は刑具、「足かせ」、「手かせ」のことで、轉じて「束縛」の義。

(4)「慾望は人を窘しめ趣味は人を活かす」

は前問の結論である。

「だから慾望は、人を窮屈にして苦しめ、之に反して趣味は、人をのび〳〵させ活々させる。」とすればよい。茲にある「窘しめ」は「くるしめ」と訓むのではあるが、「苦しめ」とは意味が異なり「ゆきつまつてこまる」（自動）「ゆきづまらせる」（他動）の意である。

以上の諸例で摘解の一斑と要領とは會得せられたらうと思ふ。要するに摘解問題は全文の文旨及び他の部分の意味を考へて其の部分の意義を明かにすればよい。

第三節　大意の把捉

古文、現代文の別なく理解力を知る問題として解釋問題の外に大意把捉問題といふのがある。之は解釋にのみ重きを置く古い型の所謂訓詁王義の問題に比すれば確かに新しい型に屬するもので茲數年來の流行である。

大意の把捉とは何か。今一篇の文章を讀んで見るに、まづ二三の概念が關係して單文をなし、

單文と單文とが關係して複文乃至混文をなし、複文が更に複合して茲に段落を形成し、段落が更に複合して一篇の文章となる。而して此の一篇の文章を熟讀する時、何人も其の間に自ら主想と從想のある事を見出すであらう。同樣に各段落に於ても主想と從想とがある。而して此の一篇の文の表はす思想は、文章の修飾部を解釋する事によつて把捉されるのではなくて、まづ此の段落の主想を捉へ、その甲段落の主想と乙段落の主想の關係から一篇の主想を見出して初めて此の一篇が把捉される。かくの如くに複雜なる人の思想感情の表現たる文章を讀んで、其の主想を捉へる事を大意の把捉といふのである。

全文を解釋した場合には、その全文の大意がわかつて居るべき筈である。若し分つてゐないなら、其の解釋はどんなに立派であらうとも啻に機械的に原文を口語文に言ひ換へたものに過ぎないであらう。故に全文の大意の把捉といふ事は、其の問題が大意を書く事を要求してゐると否とに係らず、一應は是非考へて見なければならぬ必要條件である。そこで茲に大意の把捉に關する諸注意を與へて置かう。

文の大意を把捉するには、先づ全文を通讀して、其の文は何に就いて、何を言つたものであるかと、其の骨子眼目となつてゐる事柄を辿られればならぬ。其の際注意する事は、其の主眼骨子た

中心思想の顯在と潛在

る中心思想が本文の上に明らかに顯在してゐる場合と、潛在してゐる場合との二樣になつてゐる事である。

一方には海外發展の急務を說き他方には家族制度の必要を說く、これ豈春花秋葉を同時に眺めんとするものにあらずや。若し家族制度を何處までも擁護せんとせば人をして國內はおろか勢ひわが出生したる鄕閭を離るゝ能はざるの境遇に囚はれしめざるべからず。若し天涯萬里の外に新事業を經營せんとせばこれまた勢ひ家を振りすてて飛び出さざるべからず。二者豈兩立し得るの理あらんや。（德富蘇峯）

顯在の文例

此の文の如きは主想がちやんと始と終に明瞭に顯れてゐるので少し注意すれば其の論旨は容易に發見される。かくの如くに其の主想が本文中に顯在してゐるものは文の構成からいへば多くは、頭括式、尾括式或は兩括式といつた形であるから最も都合がよいが、顯在のもの必ずしも左樣に括つてない。かうなると少々發見に困難を感ずる。

國の主權は國家の獨立を代表す。主權なければ統一なし。統一なければ國家なし。國の獨立の存在は獨立主權の存在に係る。主權とは社會最高の主力にして、外部に對して獨立なる權力を謂ふ。主權を防衛するは國の獨立を防衛するなり。我が國は萬世一系の皇位を以て、主權の存する所となす。皇位は天祖の靈位にして皇胤之を受け、天壤と共に窮りなし。神聖なる皇位を侵すことあらば、そは國の主權を侵す者なり、國の存在を毀損するなり。之を防衛するは國の獨立を防衛するなり。共和の約束に因る主權は、民人之に服從すれども、之を崇拜せず。我が主權は天祖の威靈にして社會を保護するの用をなすと同時に、神聖侵すべからざるの特質を有す。（國大）

潛在の文例

若し此の際字數に制限を加へて五十字內外などゝ答案を限定される時は、

我が國の主權は萬世一系の皇位に存す。（故に）皇位を侵すは國の存在を毀損するもの、之を防衛するは國の獨立を防衛するなり。

とでも縮めるより外仕方がない。

處が記事的態度に出た文、文學的な材料などになると主想が潛在的に表面に表はれてないので中心思想摘出には可成の困難がある。

ガリバルジー、カブレラの巖窟に閑居せるや書を讀み文を愛し、マジニーの著、ユーゴーの作は特に好みたる所なり。少時の敎育行屆かずして知識に乏しきは、夙に自認する所にして數〻明言せし所なるも、猶事に當りて斷案を下すに際し、往々意に任せて縱肆の處置を敢て

するを憚らず。又公會に臨みて演說するに方りても、或は事實を誤り、或は迂說を縷述して恬然たり。爲に同派の士をして赧然背に汗せしむる事ありき。西鄕も隱退の後書見自ら樂しみしが、渉獵博からずして聞知する所の以て恃むに足らざるを悟り、知識を要するの特に切なる時に方りては、好みて他に讓り、專ら之に託して衡に當らしむるに黽め、漫に議論を上下して自己の無識を暴露する如きおらざりしは、智なりとすべきなり。（三宅雪嶺）

に至つては其の中心思想を捉へるに稍苦しむ。然し熟讀して見ると次の樣な事にならう。

ガリバルジーは讀書を好んだ。そして自分の無學は自認してゐたが人の智をからす時々は獨斷の誤りに陷つた。又演說の時に事實を誤り或は迂遠の議論をしたりして平氣でゐた。然るに西鄕南洲は隱退後讀書を樂しみとしてゐたがガリバルジーと異なり、見聞の狹いのを自覺して深い知識を要することは他の智者に託し、又むやみに議論して自分の無識を人に知らせなかつたのは賢明であるとしてよい。

かういふ困難な文章に對する時、各段落、各文毎に其の要點を考へて主想を捉へ從想を捨てゝ是等を綴り合す樣にすればよい。

さてかくして捉へた中心思想を如何に表現すべきかは次に來る重要問題である。假りに文章の

把捉せる大意を如何に表現すべきか

大意を正確に捉へ得たとしても、逐字的にそれを書いただけでは、只文章を書き直したに過ぎない。完全なものとは謂へない。殊に全文通釋に對すると同じ態度で、單に其の文の解釋に止まる樣なのは最も忌む處である。ぐつと全文の要點を頭に呑み込んで十分に消化し、更に作者の氣分にまでも立ち入つて、それを自分のものとし、それを原文よりも更に明快に簡潔に再現する事が大切である。それには語句に對する正確な知識と穩健妥當な常識と、透徹した頭腦と、條理一貫した表現力とを要し、是等が完全に其の機能を發揮するによつて始めて、語學の力と、頭腦の働きとが認められるのである。大意を記するのだから部分的解釋はどうでもよいと速斷して、之を粗略にする樣な事があつてはならぬ。部分々々が明瞭になつて始めて眞實なる大意は捉へ得るのである。故に全文を通釋する意氣込で仔細に各部を觀察した上、其の得た結果を自己の文章として記述する樣にしなければならぬ。

大意を記す問題には、短縮の程度を示してあるものと、たゞ漠然と大意を記せよなどゝいふものと、大意を說明せよといふものとの三種がある樣であるから、次に項を改めて說明を試みよう

第一項　大意の程度の示されてゐる問題

大意の程度の示されたる問題

短縮の程度を示してゐる問題には、「三四行ニ約メヨ」「ナルベク簡單ニ述ベヨ」などとあるのがそれで、まづ全文の眼目を捕捉し、骨子となつてゐる事柄を通觀して、要求された程度の短文に作ればよいのである。例へば、

次ノ文章ノ要旨ヲ五行以内ノ短文ニ約メテ答ヘヨ

吾人は我が力を恃むと共に、我が正義を恃みとす。此の如くして與國の我を扶くるあらば、與國と共にす可し。苟も與國なくんば、我自ら往くべき道を往かんのみ。吾人は決して外患を恐れざるなり。若し眞に畏るべきものあらば、そは内憂にあり。内憂の中、殊に畏るべきは、國民的精神の消磨にあり。知らず、我が國民は、大死一番自ら新生命を贏ち得るの覺悟あるか。活裡死あり、死中活あり。生を欲するものは死し、死を敢へてするものは生く。國家の前途を解決すべき秘機は、只此の死生の二字中にあり。（長商）

此の問題は、「短文ニ約メテ答ヘヨ」とあるだけで、文體の制限はないのだから口語文でも文語文でもよい譯である。而して其の短文は五行以内とあるのだが、一行の字數が定めてないから、小さな文字で書けば長くなり大きな文字で書けば短くなる譯である。そこで一行の標準を豫め定めて置く必要がある。それで自分はまづ一行を二十五字位の見當で書いたら可からうと思ふ。即ち

長文を短文に約める文例

吾等は吾等の力と正義とによつて立つ。世界に敵ぼない筈だ。外に對して何ら恐れる所はない。吾等の最も恐れるのは我が國民の無氣力といふ事だ。我が國民に此の行き詰りから脱して新しい生氣に甦らうとする意氣があるかどうか。これが國家の死活問題である。

次ノ文章ヲ三四行ノ短文ニ約メヨ

語の創新なるをめづるは、人情の自然なれども、語は新しきをのみ取るべきにあらず。古くよりいひふるしたる語の、今なほ棄てがたきまゝあり。かゝる語は分外に幽玄の旨を含めることあり、更に敷衍せらるべきことあり、新しき解釋を容るゝ事あり。語の創新ならざるか惡むは自然の風物の萬古一色なるを惡むが如し。いかなる新釋を容るとも餘あらん語は、實に不易の妙語なり。その幽玄なるは自然その物に比すべし。而してかゝるたぐひはひとり賢者詩人の語において見るのみにあらず、俚歌及び俗言のうちにもしば〳〵あり。（神商）

此の問題は、「短文ニ約メヨ」といふ要求であるから、もとの文語體によつて答へるがよい。即ち「語の創新なるをめづるは人情の自然なれども、古くよりいひふるしたる語の中にも、まゝ幽玄の旨を含めるあり新しき解釋を容るゝ妙語あり。かゝる語は賢者詩人の語のみならず、俚歌俗言にもしば〳〵あり。」

其の他「文ノ主要點ヲ簡單ナル文語體(五十字内外)ニテ書ケ。」などといふ形式の問題もあるが、これで大意を書く問題の大體は了解された事と思ふ。大意問題解答の文體は、指定してある場合の外は、一般に口語體で答へて差支へない。問題に就いては、常に周到なる注意を拂ひ、其の要求に副ふ事を忘れてはならない。

大意の程度の示されない問題

第二項　大意の程度の示されてない問題

省略の程度の示されてない場合には、其の文の内容に應じて適當な處置を取らねばならぬ。即ち形容詞や敷衍的説明の多い文は自然と短くなり、内容の充實してゐる文は、自然と長くなるわけである。

全文ノ大意ヲ通釋スベシ

「人生れて呱々の聲を發するより、長じて一個の成人と爲り、自營自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩德一ならず。之を近くして先づ父母の洪恩あり。之に次ぐに師長の恩あり。更に又至尊及び國家の恩あり。至尊は仁慈なる大御心を以て臣民を愛撫し、宏大なる御靈德を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は生民の安寧を維持し、其の福祉を增進し、兇惡を正し不逞を罰し、以て我が父母師長をして、我等に對する慈愛薫陶の務を完うせしめ、又我等をして、安全なる發育を遂ぐるを得しむ。若し國家にして其の務を成さずんば生民亂離塗炭に陷りて我等は遂に安全なる發育を遂ぐるに由なからん。我等が幸に一個の成人となれるは、實に是等數者の恩による。然らば則ち我等が成人の後に於て、是等數者に酬ゆるは、人間當然の義務にあらずや。(東女高師)

縮約の文例

此の問題は縮約の仕方によつては隨分簡單になる。即ち

「人は生れてから獨立するまでには他から種々の恩を受けてゐるものであるから、我々が成人の後に是等の恩に酬ゆるのは人間として當りまへの義務である。」

とする事も出來るがこれでは餘りに簡單過ぎる。今少しく詳しく、全文を解釋するつもりに

「人が生れてから獨立するまでに、他から受ける恩德は樣々である。天皇及國家の恩、師長の恩、父母の恩などがそれだ。天皇は、深い御惠を臣民に垂れ給ひ、すぐれた御德を以て國家を治め給ひ、國家の諸機關は、人民の安寧と幸福とを圖り、惡い者法規を守らない者を罰し吾等は其の保護の下に、父母師長の愛撫訓育を受け、完全なる發育を遂げ得る。だから我々が成人した後に是等の恩に報いるのは、人間として果さればならぬ筈の義務である。」

といふ位に答へるが可い。

「嗚呼ブリンヂイシイの港を出でてよりはや二十日あまりを經ぬ世の常ならば生面の客にさへ交を結びて旅の憂さを慰めあふが航海の習なるに微恙にことよせて房の裡にのみ籠りて同行の人々にも物言ふ事の少きは人知らぬ恨に頭のみ惱ましたればなり此の恨は初め一抹の雲の如く我が心を掠めて瑞西の山色をも見せず伊太利の古蹟にも心を留めさせず中ごろは世を厭ひ身をはかなみて朞日ごとに九廻すともいふべき慘痛をわれに負はせ今は心の奥に凝り固まりて一點の翳とのみなりたれど文讀むごとに物見る毎に鏡に映る影摩に應ずる響の如く限なき懐舊の情を喚び起して幾度となく我が心を苦しむ嗚呼いかにしてか斯の恨を銷せん。」（森鷗外）（高校）

此の文は前文に比較して大意を記するに稍困難である。まづ考へればならぬ事は、其の段落である。かういふ文の大意を捉へる時には何時でも第一に其の段落を調べるがよい。此の文では、「頭のみ惱ましたればなり」までが第一段、「我が心を苦しむ」までが第二段、それ以下が第三段と見てよい。而して其の第一段は行動の原因、第二段は恨の經過、第三段は懊惱の狀態で結んである。かう段を分けて意味を考へ、記述して行くのであるが、其の記述の順序は必ずしも本文の順序を

大意把捉に困難な場合の例

逐はないでもよい。それは文章に依つて相違はあるが、此の文の如きは、內容を時間的に考へると、第一段を第二段の次へ持つて行つてもよいのである。而して第二段の恨の經過が、最初、中頃、現今と分けて述べてある點のよく現はれる樣に記述するがいゝ。一體、論說文とか、純粹な叙事文なら可いが、かうした抒情的な文の大意を摘むことは甚だ困難である。とにかくかう考へて此の文の大意を書いて見ると。

「伊太利のブリンヂイシイの港を出てから二十日あまりにもなつた。其の間自分は始終船室に籠つて孤獨を守つて來たのは人知れず恨に惱んでゐるからである。其の恨は始めはふと心に這入り込んで來て、瑞西や伊太利の名勝古蹟にも心を向けさせず、それが段々ひどくなつて腸もちぎれる程苦しませ、今はそれが薄らいで、心の奥に一寸形跡を止めてゐるだけになつたが、でも何かにつけて懐舊の情を惹起させて、我が心を苦しめる。あゝどうしてこの恨みを散らすことが出來るであらう。一生この苦しみを續けなければならないのであらうか。」

といふ樣な事になる。

第三項　大意を說明する問題

眞の大意把捉の問題

第二項は大意の通釋であるが、これは「大意ヲ記セ」といふ形式で表現されたもので、眞の大意の把捉の問題である。これは括論すれば「大意ヲ説明セヨ」とある場合は「何々に就いて何々を言つた文」といふ風に書けばよいのである。然し問題によつては、全文を短縮した文を擧げて置けばよい場合もある。要するにこの種類の問題では、其の全文を觀察し、其の眼目とか要旨とかを他のものに紹介する態度で書けではよい。例へば、

左ノ文章ノ大意ヲ説明セヨ

我が國の詩文人の四季に對する感想はおしなべてかたよりたり彼等昔は春秋の優劣を風流心に分けかねけんをいつしか秋の色をひとへに悲しとのみ見とりて秋の七草の優にやさしき紅葉の錦のはでやかなるをも大かたは哀れを誘ふ媒とのみ詠めて秋の心を字のまゝに愁と釋きつ此の故に彼等の四季を歌ふや前半は常に樂しけれど後半は常に悲愴なりこれ一つには和漢の詩歌のとかくに事物の客觀に泥みて相を詠ずるを主とせるにより二つには中ごろ佛敎の渡り來て無常變轉のことわりを敎へ秋冬の景物をもてその無常觀の好比喩とせるに由るならめどその觀のとかくに悲哀に偏したるは事實なり。（山口商）

此の問題の解答を考へて見るに、これは必ずしも縮約しなければならぬといふ必要はない。其の

解答の文例

文の大體の意味がよく徹底する樣に説明したらよいのである。故に其の解答は、

我が國の詩人や文人達の四季に對する感想は、一般に偏してゐる。昔の詩人文人達は春と秋との優劣を定めかねて居たであらうが、いつのまにか秋を悲しいものと見る樣になり、優美な秋の七草や紅葉をも悲哀の感を催させるものとしてしまつた。だから春夏の歌は樂しく、秋冬の歌は悲しい。かうなつた原因は、第一には、和漢の詩歌が、客觀即ち離れて事物を觀察するといふ事に拘泥して、外形の樣子を詠ずるのを主とした爲であり、第二には、佛敎が渡來して、秋冬の眺めを以て、其の無常觀（世の中を果敢ないものとする見方）をあらはす樣になつた爲であらうが、彼等の四季に對する觀察が悲哀にかたよつてゐるのは事實である。」

といふ意。

位の解答で可からう。

要するに此の種の問題は通釋とは異なつて其の大體の意味を説明するのであるから、原文の語句の解釋に拘泥する必要はない樣であるが、原文の通釋が出來なければ、大意を捉へる事も出來ない譯であるから、一應は其の詳細なる解釋を附けて見るがよい。それから極めて簡潔の通る樣に極めて平易に説明を試みればならない。

第五章　國語鑑賞の問題

前章詳述したところは從來一般に行はれた國語讀解問題に關する說明であつたが、本章言はんとするところは、更に讀解より一段進んだ鑑賞の問題である。今までの入學試驗其の他の國語試驗に於て鑑賞問題は餘りに取扱はれてゐない。然し鑑賞の敎育は現時の流行であるので、過去に於て取扱はれてゐないにしても未來を保證する事は出來ない。余は時勢はもはや鑑賞問題を出すべく進んでゐるゝ思ふ。そこで今日以後の學生はこの方面の餘裕をも充分にしておかなければ及第の榮冠を戴く事は六ケしからう。そこでこれから其の說明を簡單に試みよう。

國語鑑賞問題

第一節　鑑賞問題の意義

鑑賞問題の意義

鑑賞とは美の妙味を解し、美の要素を分析し、美を識別し美を審査するの生活をいふのである。さうして此の鑑賞の能力を趣味といふのである。人心が美に打たれる時は、そこに感情發動して快不快の情を生ずるものである。而して美は快であり、醜は不快である。然しかやうに感ずる內にも智の働きが全然缺乏してゐるのではない。美に對して默然として瞑想するが如きは智の働きである。天然の美でも人工の美でも之を味はうとするならば單に感ずるばかりでなくて、之を觀察し、之を比較し、更に想像力の助を借らなければならない。故に鑑賞力即ち趣味ある人は、美なる事物を其の要素に分析し、美の原因を指示する力を持つてゐる。例へば玆に詩があるとすれば、其の美しい所は、句調にあるのか、韻律の調和にあるのか、字句が美しい內容を聯想させるのにあるのか。內容其のものが感興をそゝるのかを知つて其の詩の特色を辨別するのである。

文辭の妙を悟らしむる必要

從來の敎育は餘りに理智に走り過ぎてゐた。其の爲めに國語問題でも理智的のものが主となつて居た。勿論言語の理解といふ事も必要であるが、それ以外に文辭の妙を悟らしめる事は更に必要不可缺のものである。これを食物の例に採るならば、唯食物を嚙んで碎いて飲み込むだけでは全く器械に等しい。それでも身體の養ひになる事はなる。然しそれだけならば料理法なんて考へる必要はない、唯營養價の大なるものさへ食へばよい譯である。處がそれではどうしても滿足出來ない。まづ嚙みしめて味を知る、さうして其の味を識別し玩賞する。そこに始めて人間らしい幸福を感ずるのである。國語に於ても同樣だ。この一篇の文章はかういふ意味だと理解しただけでは不滿足だ。其の味を識別し、これを玩賞しなければならぬ。例へば、

いやどうも面白い戀愛談を聽かされ、我等一同感謝の至りに堪へません。さりながらです、

僕は岡本君の爲に其の戀人の死を祝します、祝すといふが不穩當ならば喜びます、ひそかに喜びます、寧ろ喜びます、却つて喜びます。若しも其の少女（むすめ）にして死なんだならです、其の結果の悲慘なる、必ず死の悲慘に增すものが有つたに違ひないと信ずるからです。（國木田獨歩「牛肉と馬鈴薯」）

を讀んで讀者は何人も其の文章の面白さを感ずるであらう。何所が面白いのだらう。何が面白いのだらう。若しも讀者にして此の句が面白い、此の行が面白い、何故面白いといふ事が明瞭に提へる事が出來たならば、蓋し其の文はもはや十分に我がものとなつたと考へて宜しからう。

此の文には色々の面白い所がある。「其の戀人の死を祝します」と書いて直ぐに「喜びます」といふ言葉に置き換へてある點は其の一つであらう。大體人が死んだ事を祝するといふ事があるか、況んや最愛の戀人の死を祝するなんて極めて不穩當ないひ方である。其の不穩當極まる言ひ方を直ぐに取消して喜びますといふ、これとても餘りに妥當な言ひ方とはいはれない。こんな妙な言葉を重ねて文章に勢をつけ、最後に其の不穩當なる言葉を穩當ならしめるべく理由を述べてある邊りは確かに面白い。之を修辭學上より見る時は、

1 不穩當にも「死を祝する」などと妙な事を言出した所は奇警法を用ひて人の好奇心をそゝった

ものと見る事が出來る。

2「祝します」と述べ直ちに「喜びます」と換へた所は正しく換置法といつてよい。

3「喜びます、ひそかに喜びます、寧ろ喜びます、却つて喜びます。」と漸層或は順應の原理に合するものといふ事が出來る。

かくの如くに或一文を捉出して其の文を玩賞し批判しようとするものが、國語鑑賞の問題である。故に國語鑑賞問題は結局文章の美を味はふ能力を調査しようとするものである。而して文章の美に關する原理を研究するものを修辭學といふ。故に文章の美を味はひ之を鑑賞する爲にはどうしても此の修辭に關する一般原理位は心得て置かなければならない。そこで次に其の大樣の說明を試みよう。

第二節　修辭の原理

修辭上顧慮すべき點は其の範圍極めて廣く此の小册子では到底其の全般を說明しつくす事は困難なので、玆では、まづ其の中の文章修飾論概略を說くことにする。此の文章の修飾の仕方形式を詞姿（Figures of speech）といふが、此の詞姿なるものは所謂言葉のあやなし方で、單に思想を

如何に知らしむべきかの努力ではなくて、寧ろ之を如何に感ぜしむべきかの努力である。かうして文章は血あり、涙あり、力ある文となり始めて味はひなるものが出來る。そこで文章を鑑賞する爲には必ず此の詞姿を知つて置かなければならない譯になる。

此の詞姿は又詞藻、詞態、詞品ともいはれ、其の分類も人々によつて種々樣々である。五十嵐氏の如きは之を八大原理に纏め更に之を細分して居られる。之を表記すれば次の如くなる。

八大原理
- (一)結體の原理
  - 直喩法
  - 隱喩法
  - 諷喩法
  - 活喩法
  - 結晶法
  - 問答法
  - 擧例法
  - 誇張法
  - 現寫法
- (二)腦化の原理
  - 對照法
  - 抑揚法
  - 換置法
  - 括進法
  - 列叙法
  - 詳悉法
  - 美化法
  - 稀薄法
  - 曲言法
- (三)增義の原理
  - 引用法
  - 隱引法
  - 緣裝法
  - 重義法
  - 擧隅法、側寫法、省略法

反語法、皮肉法、倒裝法

(四)存餘の原理
- 斷叙法
- 設疑法
- 接離法

(五)融會の原理
- 漸層法
- 飛移法
- 序次法
- 連鎖法

(六)奇警の原理
- 警句法
- 奇先法

(七)順應の原理
- 反復法
- 對隅法
- 避板法
- 擬態法

(八)變性の原理
- 方便法
- 遮斷法
- 變態法
- 招格法

- 咏嘆法
- 情化法

以下簡單に之が說明を試みよう。

結體の原理　1 **結體の原理**は一に固めの原理ともいひ抽象的の事を具體にし空漠朦朧捉へ難いものに形を與へて固めて見せる法である。例へば阿諛追從を「髭の塵を拂ふ」「鼻いきを窺ふ」といひ、又凝視の事を「眼が吸ひつく」といふが如きである。更に其の種類の說明をしよう。

直喩法　直喩法は古來行はれた譬喩の中で最も素直なもので、大抵の場合は「譬へば」「あたかも」「さながら」「如し」「似たり」「異ならず」等の說明詞が添うてゐる。例へば謹愼德に進む樣を形容して「戰々兢々深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し。」といふ類で、又前述の說明詞のない場合もあ

る。例へば「月に叢雲花に風、盛運久しからず。」といふ類は是である。

此の經はよく大いに一切衆生を饒益(ねうやく)して其の願を充滿せしむる事清冷池の能く一切諸々の渴乏者に滿つるが如く、寒者の火を得るが如く、裸者の衣を得るが如く、商人の主を得るが如く、子の母を得るが如く、渡るに舟を得るが如く、病に醫を得るが如く、暗きに燈を得るが如く、貧しきに寶を得るが如く、民の王を得るが如く、賈客の海を得るが如く、炬の闇暗除くが如し。（法華經）

は古いが最も「如く」の多い一例である。

直喩は斬新で人の意表に出で、而かも穩當で、容易に類似を見出し得べきものなるを要す。愈々學校へ出た。初めて教場へ這入つて高い所へ乘つた時は、何だか變だつた。講釋をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思つた。生徒は八釜しい。時々圖拔けた大きな聲で先生と云ふ。先生には應(こた)へた。今迄物理學校で毎日先生々々と呼びつけて居たが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのとは雲泥の差だ。何だか足の裏がむづ〳〵する。おれは卑怯な人間ではない臆病な男でもないが、惜しい事に膽力が缺けて居る。先生と大きな聲をされると、腹の減つた時に丸の內で午砲を聞いた樣な氣がする。（夏目漱石「坊ッちゃん」）

隱喩法

の「腹の減つた時に丸の內で午砲を聞いた樣な氣がする」といふ所などは實にうがち得た比喩だと思ふ。

隱喩法は表面上譬喩の形式を沒して譬ふるものと譬へられるものとを打つて一丸としたもので結局煎じ詰めた直喩といふ事になる。例へば「三界は火宅に似たり。」「百姓を魚肉の樣に取り扱ふ。」といふべき所を「似たり」「如し」の關係詞を取去つて、彼即ち是と引締めたものである。

諷喩法

竹木持(たけきれ)たして野原に放たば、小川を躍り越え石を飛び、樹を撲き草を薙ぎ、活潑、疎暴、虎に翼を添ふる如くなれど、見知らぬ人の前、棲み馴れぬ座敷の中には、身を縮め呼吸を殺し日影に曝せる鮒なり。（尾崎紅葉「此ぬし」）は其の一例である。

諷喩法は又寓言法ともいふ。要するに餘所事をいつて眞意を思ひつかせようとするものである例へば、

「燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや」は諷喩であるが、「燕雀の如き小人物何ぞ鴻鵠の如き大人物の志を知らんや」といへば直喩となる。

の如き是である。

活喩法　活喩法は無生物に生を與へ、或は無生物及下等動物などを人に擬するもので、一に擬法木ともいふ。例へば、

「三伏の酷暑に草木喘ぐ。」

「月斗牛の間を徘徊す。」

「良心戒めて曰く欺く勿れ盗む勿れ。」

結晶法　結晶法は前者に反對して生物を無生物化する詞姿である。故に擬物法、石化法などともいはれる。例へば、

「清盛は平家の塵芥、武家の糟糠。」

「人間は慾に手足のついたものぞかし。」

「軍人は胸の光る螢。教師は人を教へる機械である。」

の類。

擧例法　擧例法とは抽象的の立言を具象的にする爲に、其の立言に相當する事物の一部分を引いて其の事物の全體を代表せしめる詞姿である。例へば、

「盛者心滅の理の眞なる、例へば驕る平氏の久しからざるが如し。」

誇張法　「太陽は譬へば大なる火の塊の如きものである。」

「玻璃壜に水を盛りて火上に置けば、水の沸騰して昇り且つ降るを見る、是れ循環運動の甚だ簡單なるものなり。」

の類。

誇張法は事物の實際よりは誇張して過度に大きく、或は又過度に小さく言ひ做す詞姿である。例へば、

「流血杵を漂はす。」

「燕山の雪片大いさ蓆の如し。」

「芥子粒の如き根性魂。」

「蚤の足音、蟻の囁きまで聞く。」

「二人が中に降る涙、河の水嵩もまさるべし。」

の類。

現寫法　現寫法とは過去の事、或は未來の事を現在眼前にあるものの如く云ひなす詞姿をいふ。例へば過去の戰を記して、

「天明けたり、曉氣清し、全軍肅々として敵壘に向ふ、午前五時を報ず、進め擊て!!の命命あり、喇叭の聲起る。」

「首尾よく米國を敗りおほせようか、西洋人は日本を研し究初める、我れの長所を見出す、我を學ぶ、遂には我れを凌駕せんとする、玆に至つて吾等が使命は一段と重くなる。」

對照法

の類。

對照法とは相反した事物を並べて揭げる詞姿である。例へば、

「月鼈雲泥。」

「長いさゝぎが花は短うて、短い栗の花の長さよ。」

「荆棘より無花果を採らず、蒺藜より葡萄を採らず。」

『明月は座頭の妻の泣く夜かな。』一誦して涙下らしむ。げに逢ひがたき清光の一夜に負きて空しく蕭條の膝を抱く盲目者は、世にも不幸の人なるべし。さはれ、世の盲目者ならざる者、果たして盲目者よりも幸福の人なる乎。盲目者ならざるものも、屢々天上清光の虧け易きを恨み嘲つにあらずや。目なきものもとより悲しむべく、目あるもの亦未だ喜ぶに足らず、いづれは同じ破れ易き色身の歎きを載せて、うつろひ易き幸福の花を逝波の上に追ふ人の世の慣ひなり。嗚呼世に眞幸福はなき乎、目なきものをして凋まぬ心の華を觀ぜしめ、目あるものをして常住眞如の月の姿を打ち仰がしむるものは何ぞや。」（綱島梁川「回光錄」）

抑揚法

の類。

抑揚法とはまづ抑へて後揚げ、或はまづ揚げて後抑へるの法である。これには褒貶と口調との二義あるが要するに一種の對照法と見てよい。例へば、

「余がシーザーを害したるは、シーザーを愛する事の少なかりしが爲にあらずして、シーザーを愛するよりも一層多く羅馬を愛したるが爲なり。諸君はシーザー死して吾等がすべての自由の民と生くるよりも、シーザーがながらへて吾等がすべて奴隷と死するを選ばるゝか。シーザーは余を愛せしが故に余は彼に對して泣けり。彼は幸運なりしが故に余は之を喜びたり。彼は勇敢なりしが故に余は彼を敬せり。然れども彼は野心ありしが故に余は之を殺せり。彼の愛顧に對しては涙あり、彼の幸運に對しては喜びあり、彼の勇氣に對しては尊敬あり、而して彼の野心に對しては死ありしのみ。」

換置法

とあるは其の一例である。

換置法とは文勢を强める爲に一たび用ひた語を直ぐ撤回して他の更に適當なる語に置き換へる

詞姿である。即ち出直し法である。

「彼の行爲は不穩當なり、不穩當といはんよりは寧ろ不都合なり、否大不敬なり。」

「露兵は敗走せり、否豫定の退却を實行せり。」

「僕は君の爲に、其の戀人の死を祝します、祝すといふが不穩當なら喜びます、ひそかに喜びます、却つて喜びます、若し其の娘が死ななんだらです、其の結果の悲慘なる、必ず死の悲慘に增すものが有つたに違ひないと信じます。」

括進法

括進法は前に言つた事を括り束れて進んで行く詞姿である。即ち括つて出直す法である。例へば、

「交通して、欺いて、怒らして、戰つて、人の國を奪ふのが西洋諸國の所謂文明である。」

といふ所を

「交通する、欺く、怒らす、戰ふ、人の國を奪ふ―是れが所謂西洋諸國の文明である。」

「森閑とした浴室、長方形の浴槽、透明つて玉の樣な温泉、これを午後二時頃獨占してゐるとくだらない實感からも、夢の樣な妄想からも、脫却して了ふ。」

の類。

列叙法

列叙法とは幾多の事物を併せ揭げる際に、一つに締め括らずして其の一つ〳〵に同等の重みがある樣に列べて寫す詞姿である。例へば、

「梅、櫻及び桃を愛す。」

「月、雪、花にあこがれる。」

などの如くに一括しないで

「梅を、櫻を、桃を愛す。」

「月に、雪に、花にあこがれる。」

の如くするのであつて、

「讀む、書く、考ふるが余の業なり。」

「目が横についてゐ、鼻が縱に附いて、二本足で眞直に立つて歩き、這ふ、蹲踞む、坐る、横になる、飛ぶ、はねる、走る、引掻く、摑む、つまむ、ひねる、五本の指を一本一本別々にも働かせる、要するに手足共に自由自在に働く、おまけに哭く、笑ふ、ほゝゑむ、兎も角も無數の節をつけて聲を發する。これが常識即ち普通世間の俗眼で觀て人類と名づける一種の動物である。」（坪内逍遙氏「修身講義」）

の類是である。

詳悉法

詳悉法とは隙間なく殘る隈なく叙する詞姿である。例へば、

「有つて邪魔、無い方が爲になる書物。」

「東より、西より、北より、南より、乾より、坤より、巽より、艮より無數の軍兵駈け集まる。」

などの類これである。

朧化の原理

2 **化の原理** はまたぼかしの原理ともいふ。鋭く人の感を引き或は感情を害する傾きのある事物を和らげぼかして朧ろにする意味である。下品なるを品よくするのも此の原理である。故に要する所はまづ結體の原理の反對と見てよい。

稀薄法

稀薄法は人の感情に強く當る事物を薄く、淡く、ぼかして寫すものである。例へば、

「博奕」＝「手慰み」

「盗みをした」を「密かに物した。」

「恥しい」を「おほ文字樣。」

などいふ類で、

「わりなき御情にあつかり。」

美化法

「齢二八を過ぐれども、その心、未だ無下に幼く。」

「寶日上人瀧の下にてかくし所を洗ふ。」

等の類もそれである。

美化法とは美しい事物によせ、或は美しい事物に附加して背感の事物を美化する詞姿である。

例へば、

盗賊＝「梁上の君子。」「白浪」「綠林。」

虱＝「千手觀音。」

雨の漏るあばら屋＝「蕉破れては霧不斷の香を焼き、庇落ちては月常住の燈を掲ぐ。」

などの類これである。

曲言法

曲言法とは背感の事物を和げる爲に言をくねらして遠廻しに言ふ詞姿である。例へば、

「出來ぬ」「ならぬ。」

などいふ處を、

「いけませんと其の全くいふ譯ではありませんが、餘りにその御爲でないかと思はれまするに

よつて。」

といひ、或は又

「愚」「馬鹿」

といふ處を、

「餘りに賢いとはどうもいひかねる。」

「至極お人よしの方で。」

などいふの類である。

3 增義の原理　は又ふさしの原理ともいふのである。言表さうとする主體に關係のある事物を附加して其の意義を豐富にするの謂である。例へば「此の長い夜をひとりで明かすことか。」といへば意義の通ずるのを「足曳の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寢ん。」といふの類である。

引用法　引用法とは露はに成語或は故事を引いて文章を飾るの詞姿である。例へば、

「歲華は人を待たず白駒の隙を過ぐる事は電よりも疾し遙なりと思へる將來は忽焉として諸君の眼前に迫り來らん毫釐も油斷せばその理想はいまだ萬分の一も成就せざるにわが耳已に蟬鳴を聞きわが鬢已に霜色を現ずる悔あらん『明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬもの

かは。』大なる理想を實にせんの大志あるものは常に今日を限なりとする覺悟なかるべからず諸君よ明日ありと思ふ勿れ。」（坪内逍遙）

「獵夫は往々、遠樹に巢くへる鷹鳩を見るに忙しくして眼前の叢中に巨雉あるを知らざる事あり。人に注意せられて、足下を顧みる時は、已に、その健翼を揮つて飛び去りたる時なりとす。古人が「盡日尋春不見春、芒鞵踏遍隴頭雲、歸來笑撚梅花嗅、春在枝頭已十分。」と詠じたる、これを高遠に求めて、卑近に失するこの間の消息を道破したる好警句と云ふべし。」（東北大工）

隱引法　隱引法とは明らさまに斷らずして古語故事を自分の文中に編込むものをいふ。例へば古今集の序に、

和歌は「力をも入れずして天地を動かし。」

といふ句のあるのを引用して、

「歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してはたまるものかは。」

といふが如きで、

の類。

「ああ國家昏亂して忠臣現れ天下太平にして小人陸梁す、輕裘肥馬の間に醉生夢死するもの共に古今の興亡を語るに足らず、悠々たる世路誰に向ひてか邦家百年の大計を說かん。」（大町桂月）（專檢）

「凡そ物あれば則あり。國にしても、家にしても、其の存立には存立の直理、精神、主義、理想がある。」

「芭蕉は一俳人なり。されど五十年の生涯を自然の渴仰にさゝげて、あるは奥羽象潟の時雨に腸を絞り、あるは佐渡北海の荒波に魂を削りて、一樹の假の宿りにも、とく〳〵の雫結びもあへず、旅魂そゞろに枯野の風雲を追へりし彼が姿をしのぶもの、誰かその魂に鐫められたる實の一字を否むべき。」（綱島梁川）

の類はこれである。

緣裝法　緣裝法は緣故ある事物を添へ纏はせて立言を裝ふ詞姿をいふ。即ち國學者の所謂枕言葉、序詞はこれである。枕詞といふは次に來る語の形式的に定まつてゐる五字句をいふ。

久方の雨……
あらがれの土……

なまよみのかひ……
ちはやふるかみ……

の類はこれである。

序詞は枕詞の長いもので幾字になつても構はぬ。長い序詞には、

足曳の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜―

の如きのがある。

重義法　重義法は一語に二つ以上の意義をかね含ましめる詞姿である。例へば、

「澁かろか知られど柿の初ちぎり。」

「七重八重花はさけども山吹のみの一つだに無きぞ悲しき。」

の如き類。

其の他語呂法も一種の重義と見てよからう。

林間煖酒燒紅葉

に擬して、

「玄關席を改めて口上を聞く。」

といひ、又

「七重八重花は咲けども。」

の古歌に擬して、

「山吹のはながみばかり金入れにみの一つだになきぞかなしき。」

の樣なものもある。

存餘の原理　4 存餘の原理　とは又あましの原理、取置きの原理といひ、言ふべきだけの事をいはずに讀者の想像の餘地を存して置く詞委である。

擧隅法　擧隅法は一隅を擧げて四隅を知らしめ、一斑を示して全豹を察せしめる修飾で、平易にいへば一部分を提示して全體を察せしめるものである。例へば、

「二階の窓から島田が招く。」

「彼は競爭者の金剛石（ダイヤモンド）なるを聞きて、一度は汚され辱しめられたらんやにも怒りをなせしかど……（金色夜叉）

「斜十字の旗、日章旗の前に靡きぬ。」

などの類。

側寫法　側寫法は事物を叙するに正面よりせずして側面よりし、客を借りて主とし、他を以て自らを表はす詞委をいふ。例へば、

「衆皆泣きぬ」＝濡れぬ袂はなかりけり。

「隅田川に凉まばや」＝隅田の川風に扇やすめばや。

の類で、

三年間はまあ人並に勉强はしたが別段たちのいゝ方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利であつた。（漱石「坊ッちやん」）

母親が歸つて來てランプに灯をともす。俄に室内が明るくなつて只だ白く見えてゐた小光の顏に目鼻がちやんとつく。（高濱虚子「俳諧師」）

などは其の一例である。

省略法　省略法は無駄を省き文章を簡潔にして餘韻多からしめる詞委である。廣瀨淡窓の詩話に曰く、或人「板敷に下女取りおとす海鼠かな。」といふ發句を作つて師の添削を乞ふた。師曰く道具が多過ぎる。其の人「板敷に取おとしたる海鼠かな。」と改めた。師曰く、大分よくなつたがまだ要らぬ道具がある。其の人改め得ず。師乃ち「取おとし取おとしたる海鼠かな。」と改めた。無くても

差支へのない文句はない方がよい。

斷叙法　斷叙法は接續語を省き、文句と文句との關係を斷つて、文に力あらしめ、想像の餘地あらしめる詞委である。例へば、

「時雨(シグ)れけり、走り入りけり、晴れにけり。」（惟然坊）

「一筆啓上。火の用心。おせん泣かすな。馬肥やせ。」（本多作左衞門）

「戰へり、勝てり、健在なり。」（廣瀨中佐）

「來たり、見たり、勝ちたり。」（ジユリアス　シーザー）

接離法　接離法は一種の句讀法ともいつてよい。文法上切るべき所を續け、續くべき所を切つて趣味を添へる詞委である。例へば、日蓮僧の讀經に、

「此の經は無明の闇を照らす大法燈なり。生死の迷を斷つ大利劔也南無。妙法蓮華經南無。妙法蓮華經。」

の類是である。

反言法　反言法は眞意の反對より立言して正面よりいふよりも多くの効を收めようとする詞委である。例へば、

「教科書事件で金儲けした樣な大教育家に子供を托してご覽なさい、立派な君子人が出來ませう。」

「今になつて考へて見ると、不平に思つたのは私が未だ若かつたからだ。監督を賴まれたから引き受けて序に書生にして使ふ、―これが即ち親切といふもので此の外に親切といふものは人間に無いのだ。」（二葉亭「平凡」）

皮肉法　皮肉法は人の弱點を叙して嘲弄する詞委である。然し正面より罵詈攻擊せず、裏面より反語せず、罵詈と反語との間を行つて人の腸を抉るのが特徵である。

「世の中にかほどうるさきものはなし、ぶんぶといひて夜も寢られず。」

「蓮の葉の露は釋迦の涙かありがたや。ところへ蛙がびよいと出て、それは私の尿にて候。」

「主人は不滿な口氣で「第一氣に食はん顏だ。」と憎らしさうに云ふと、迷亭はすぐ引きうけて「鼻が額の中央に陣取つて乙に構へて居るなあ。」とあとをつける。「然も曲つて居らあ。」「少し猫だれ。猫脊の鼻はちと奇拔過ぎる。」と面白さうに笑ふ。「夫を剋(こく)する顏だ。」と主人は猶ほ口惜しさうである。「十九世紀で賣れ殘つて、二十世紀で店曝しに逢ふと云ふ相だ。」と迷亭は妙な事ばかり云ふ。」（夏目漱石「我輩は猫である。」）

其の他語學を鼻にかける人に「通辯になるによいでせう。」吝嗇家の富豪に「金の御番が御苦勞樣。」榮進する官吏に「上官の御機嫌取りがつらいだらう。」といふの類もこれである。

設疑法　設疑法とは容易に下し得べき結論をわざと疑問にして讀者に判斷せしめる詞姿である。例へば酒の害を列擧して「故に酒を飲むものは自暴自棄の愚者である。」と斷定しないで「然らば酒家は稱して智者といはれませうか。」又「武士でない。」と斷ずる處を「之をしも日本武士といふべきか。」といふの類である。

倒裝法　倒裝法は文法上、論理上の普通の順序を倒さにする詞姿でみる。これは感情が高まつて普通平正の形式に適ひ得ぬ場合を寫すに適した法で、國文では述部を前にし主部を後にするのが最も多く行はれる倒裝式である。

「愚なり、彼は。」

「何等の光彩ぞ、我が眼を射んとするは。何等の色澤ぞ、我が心を迷はさんとするは。」

といふは其の一例である。

融會の原理　5 融會の原理　是は讀者の心の裡に入り易く言表はすの法で、即ち既知より未知に、近きより遠きに及ぼし、我が趣味が讀者の心に融け込んで易々と會得される樣にするの法である。漸層法、序次法、連鎖法などは之に屬する。

漸層法　漸層法とは語句思想を次第に强く、次第に大きく、次第に深く高く按排する詞姿である。

「一人奮死せば以て十に對すべし。十以て百に對すべし。百以て千に對すべし。千以て萬に對すべし。萬以て天下に冠たるべし。」

「佛曰く百人の惡人に食を與へんよりは一人の善人を養ふに若かず。千人の善人に食を與へんよりは、一人の佛の五戒を守るものに食を與ふるに若かず。萬人の佛の五戒を守る者に食を與へんよりは、一人の須陁洹に食を與ふるに若かず。百萬人の須陁洹に食を與へんよりは、一人の阿那含に食を與ふるに若かず。千萬人の阿那含に食を與へんよりは、一人の阿羅漢に食を與ふるに若かず。十億の阿羅漢に食を與へんよりは、一人の辟支佛に食を與ふるに若かず。百億の辟支佛に食を與へんよりは、一人の三界の佛を養ふに若かず。過去、現在、未來三世の佛千億萬に食を與へんよりは、一人の無念、無住、無修、無證、即ち智識、偏頗、修養、悟、等の上に超越せし人に食を與ふるに若かず。」

飛移法　といふの類是である。

飛移法とは文の調子の急に變じて小なるもの忽ち大に、高きもの忽ち低きに飛び移るをいふ。

例へば、

「運は天にあり、牡丹餅は棚にあり。」

「三人寄れば文殊の智慧、百人寄つても出ぬは金なり。」

「開眼せぬ佛の如く、疱瘡せざる娘の如し。」

「演者自身の局部は回護の恐れがありますから―態と論じません。かの金田の御母堂の持たせらるゝ鼻の如きは尤も發達せる尤も偉大なる天下の珍品として御兩君に紹介いたして置きたいと思ひます。」寒月君は思はずヒヤヒヤといふ。「然し物も極度に達しますと、偉觀には相違御座いませんが、少々峻嶮過ぎるかと思はれます。古人の中にもソクラテス、ゴールドスミス若しくはサツカレーの鼻などは、構造の上からいふと隨分申し分は御座いませうが、其の申し分のある處に愛嬌が御座います。鼻高きが故に貴からず、奇なるが故に貴しとは此の故でも御座いませうか。下世話にも鼻より團子と申しますれば、美的價値から申しますれば先づ迷亭位の所が適當かと存じます。」……「是から鼻と顏の權衡に一言論及したいと思ひます。他に關係なく單獨に鼻論をやりますと、かの御母堂などはどこへ出しても恥しからぬ鼻―鞍馬山で展覽會があつても恐らく一等賞だらうと思はれる位な鼻を所有してゐらせられますが悲しいかな、あれは眼口其の他の諸先生と何等の相談もなく出來上つた鼻であります。ジュリアス、シーザーの鼻は大したものに相違御座いません。然しシーザーの鼻を鋏でちよん切つて當家の猫の額へ安置したらどんな者で御座いませうか。喩へにも猫の額と云ふ位な地面へ英雄の鼻柱が突兀として聳えたら、碁盤の上へ奈良の大佛を据ゑ付けた樣なもので、少しく比例を失するの極其の美的價値を落す事だらうと思ひます。」(夏目漱石「吾輩は猫である」)

序次法

序次法は近きより遠きに、易きより難きに、既知より未知に、順序正しく叙して讀者の心に入り易からしめる詞委である。多くの例證を擧示して後に斷案を下し、手近き譬喩を緒として難解の道理を會得せしめるなど其の主なる方法である。例へば、

「伯夷叔齊は餓死せり、楠正成、新田義貞は戰死せり、孔子は困厄の間に老いたり、基督は磔刑にせられたり、而して一方には盜賊の天壽を全うし、足利尊氏の天下を掌握せるあり、天道の是非疑ふべし、因果應報の理信ずべからず。」

といふの類是である。

連鎖法

連鎖法は蟬聯法、文字鎖、尻取文句ともいふ。前句の末語を再び次ぎの句の首に置くものである。例へば、

「三界皆佛國、佛國それ衰へむや、十方悉く寶土、寶土何ぞ壞れむや。」

「春に育つも花誘ふ、蝶は菜種の味知らず、菜種の蝶は花知らず、知られず知らぬ中ならば、浮かれ初めまい。狂ふまいもの味氣なや。」

「その矢張犬に相違ないボチが、私に對ふ……と犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか？……どちらだかそれは分らんが、兎に角互に熱情熱愛に、人畜の差別を撥無して、渾然として一如となる。

一如となる。だから今でも時々私は犬と一緒になつてこんな事を思ふ。あゝ儘になるなら人間の面の見えぬ處へ行つて飯を食つて生きてたいと。」（二葉亭「平凡」）

奇警の原理

6 **奇警の原理**　とは言奇にして人を警するの意、思ひまうけぬ立言によつて人を驚かし荒膽を拔くをいふ。これに屬するものには警句法、奇先法などがある。

警句法

警句法とはいふ所奇拔にして意表に出づるものをいふ。例へば、

「隱れたるより現はるゝはなく、微かなるより明かなるはなし。」

「强きものは折れ、鋭きものは挫け、堅きものは破る。」

「智慧のある馬鹿に親爺の困り果て。」

「餅は餅屋。」「牛は牛づれ。」「似たもの夫婦。」

「汝に出づるものは汝に返る。」

「大道廢れて仁義あり。慧智出でて大僞あり。六親和せずして孝慈あり。國家昏亂して忠臣あり。」（老子）

奇先法

奇先法はまづ奇言を發して人を驚かし、次に理由を附して成程と頷かしめるもの、即ち說明附の警句法である。例へば、

「裁判官は鈍刀なり、傷つくれども切る能はず。」

「結婚は鋏刀の如し、兩性反對の方面に働けども、他人の其の間に入り來るや容赦なく之を挾み切る。」

所謂謎々なども此の法の一種と見てよい。賞を約して實行せぬ君主を諷して、

「殿樣の御褒美とかけて。春の日と解く、心はくれさうでくれぬ。」

順應の原理

7 **順應の原理**　とは人の感情に順應するの意。其の言ふ所が口調よく、見よく、聞きよく、感じよく、換言すれば、肌ざはりよく人の感官感情を滑らかに動かすやうにするのである。これに屬するものに、頭韻法、脚韻法、對偶法、避板法等がある。

反覆法

反覆法とは同一の語句を繰返して趣味を高め興を添へる詞姿である。例へば、

「松島やあゝ松島や松島や。」

「弱きに弱き柳の糸の、よれによれたる痩馬なれば。」

其の他頭韻法、脚韻法、疊點法、反照法、照應法なども一種の反覆法である。

「かちで急げばはか行かず、何を知るべき難波津の名は住吉も住み憂しと、世を憂きふしの伏見山、そめぬ袂も捨てる身は。」（頭韻法）

「木の間より見ゆるは谷の螢かも、漁の舟の沖に行くかも。」（脚韻法）

「世の中に思ひあれども子を戀ふる思ひにまさる思ひなきかな。」（疊點法）

「賢なる哉回や。一簞の食一瓢の飲、陋巷に在り、人其の憂に堪へず、回や其の樂みを改めず賢なる哉回や。」（反照法）

對偶法

對偶法は又對句法ともいふ。調子の類似した文句を並列して並行の美、對立の美となる詞姿である。例へば、

「花霞の如く、人雲に似たり。」

「鐵蹄蹂躪す八州の草、白羽指揮す三越の雪。」

「甘言に友あり、直言に友を失ふ。」

「今年の花は去年の好きに似たり、去年の人は今年に至つて老ゆ。」

以上は二句對。

「伊勢の海の、伊勢の海の、清き汀の潮がひに、なのりそや摘まん、貝や拾はん、玉や拾はん。」は三句對。

「我れ一たび膝を屈せば則ち梓宮還るべし、太后復すべし、淵聖還るべし、中原得べし。」は四句對。

「今、佛世尊、大法を說き、大法雨を降らし、大法螺を吹き、大法鼓を擊ち、大法義を演べんと欲す。」は五句對である。

避板法

避板法は板即ち累調を避けて異中に同あり、同中に異あらしめて變化をつける詞姿である。例へば、

「行こか歸ろか、歸ろか行こか。」（語句前後法）

「花か蝶々か、蝶々か花か。」（同）

「山川悉く動み、國土皆震りき。」（用語轉換法）

「月夜よし夜よしと人にいひやらば。」（長短參差法）

「ひそかに指を折りて古人を數ふれば、賢きも去り、愚かなるも留まらず、たゞ空しき名のみ殘すことの哀れさよ。」（諸體交用法）

擬態法　擬態法とは事物の態度を模して之を活寫するの詞姿である。擬聲法、擬態法の二となる。

「伐木丁々。」

「おどろ〳〵と鳴る神。」

「ちう〳〵となく雀。」

の類は擬聲法。

「そろり〳〵と參らう。」

「いそ〳〵してゐる。」

は擬態法。

咏嘆法　咏嘆法は切なる思ひ胸に滿ちて之を語り得ざる時は之を咏嘆の聲に漏らし、之を語りつくし得ざる時は之に添ふるに咏嘆の語を以てする詞姿である。

「あはれ物憂きの世や。」

「あゝ、賢なる哉回や。」

の類。

情化法　情化法とは一種の情を表はす添詞を幹詞に加へて、優し味、可笑し味等をあらはし、或はかやうな情味を表はす樣に幹詞を變化し、屈折せしめる詞姿である。

「さ男鹿」「さ夜中」「か青い」「か細い」「いけ好かない」「いけづう〳〵しい」「くそ忌ま〳〵しい。」

などの類である。

變性の原理　8變性の原理　とは醜なる要素も場合によつては、其の性を變じて美なるものとすることが出來るといふ原理である。即ち時には、わざと口調惡く、耳ざはり惡い言葉を用ひ、或は聯絡なく筋の通らぬ文句を用ひて、全體の趣味を加へることが往々ある。例へば「我が戀は障子の引手嶺の松火うち袋に鶯の聲」などの樣に意味の解らぬ樣な所に妙味がある。この原理に屬するものには、變格法、遮斷法、超格法などがある。

方便法　方便法は文の主要部の美を發揮する方便として醜なる要素を用ひるの詞姿である。例へば、忠

臣の忠義を著しく表はさんが爲に逆臣の不忠を說き、或はまづ暴風雨を寫して次に光風霽月の心地よきを强くするの類である。

遮斷法　遮斷法は特殊の事情ある場合、例へば感情に激した場合等に文路を斷つの詞委である。例へば、

「涙限り聲限り、互に呼ばれ招かれて、姿を隱す汐ぐもり、聲を隔つる沖津浪、沖のかもめ磯千鳥泣きこがれてぞ……。」

「あなたはどうすると仰言るけれど、私は何だか眼がうるんで、もう無茶苦茶になつて來た……洵に情ないと思ふより外何も思つてゐられない……。」

の類である。

變態法　變態法は感情の狀態で、人稱や敬語等に對する態度を添へる詞委である。例へば、

「エヽむごい鬼よ、鬼神よ、なんぢ一人乘せたとて輕い舟が重からうか。人々の嘆きを見る眼はないか、聞く耳は持たぬか、乘せてたべなう乘せ居れと、聲を擧げうち招き、足すりして伏しまろぶ——。」

の類。

超格法　超格法は文の法格を超越して文に趣致を添へる詞委である。例へば、

「馬から落ちて落馬した。」

「南無伊勢天照如來樣、南無釋迦大神宮、南無春日大菩薩。」

「敵の一味なればとて親を手にかけ殺すとは、武家にも公家にもある事か。いかなる功名ほまれとなり、天上の榮華もわしやいやゝ、免して下され父樣と　……。」

などの類である。

鑑賞のかすゝ　叙述の形式的鑑賞の基礎は大略前述の如きものであらう。これらの基礎的概念の上に作者の感情が如何に美しく表はされ、その叙述は如何に巧妙に構成されてあるかを味はればならぬ。

修辭學上前述の如き知識を持つて置く事は單に鑑賞の上に必要なばかりでなく、これが解釋上にも亦與つて重要な事である。この知識がない爲に解釋を誤まり、或は解釋に苦しみ、或は極めて拙劣な解釋をする事も屢〻見受けられる。心すべき事である。

鑑賞にはこの修辭の原理に基く形式美の鑑賞の外、內容其のもの美を鑑賞するもの、內容形式一致美を鑑賞するものなどがあるが、そは通釋、大意の把捉等でも出來るので煩瑣を避ける爲に玆では略する事にする。

然し鑑賞問題は未だ出た事はない樣である。故に之は將來に俟たねばならぬ。將來果してどん

な問題が出るか、それは容易に決定する事は出來ないが、自分の考へる所ではまづ次節に述べる類ではあるまいかと思ふ。讀者も其の心して研究して貰ひたいものである。

第三節　鑑賞問題の實際例

修辭學上より説明せる問答

〔一〕左ノ文ヲ修辭學上ヨリ説明セヨ。

曉に起きて望めば、前面早く、家々の壁と寺塔とを辨ずる事を得たり。その樣譬へば帆を揚げたる無數の舟の横に列れるが如し。左の方にはロンバルヂヤの岸の平遠なる景を畫けるあり。遙かに地平線に接しては、アルピイの山脈の蒼靄に似たるあり。われは之を望みて彼の蒼の大なるを感ぜり。天球の半は、一時に影を我が心鏡に映ずる事を得たるなり。（森鷗外「即興詩人」）

〔答〕(1)「その樣譬へば帆を揚げたる無數の舟の横に列れるが如し。」は直喩法で、前面の景色を目に見る如くに説明したもの。

(2)「左の方にはロンバルヂヤの岸の平遠なる景を畫けるあり。」と「遙かに地平線に接しては、アルピイの山脈の蒼靄に似たるあり。」とは對句で對照の妙を感ぜしめる。

(3)「前面早く……。」「左の方には……。」「地平線に接しては……。」「われは之を望みて彼の蒼の大なるを感ぜり。」と進み、更に「天球の半は……。」と進むは漸層法で文の勢を示して、讀むものをして愉快ならしめる。

構成上の面白い所を説明せる問答

〔二〕左ノ文ノ構成上面白イ所ヲ説明セヨ。

梅に取るべきは、其の香、奇古なる其の幹。花の色は白きを尙ぶ、赤きは俗なり。一園内に行儀正しく列植するは、折角の梅花を俗了す。竹外籬畔、臥龍の影淸淺の水に横たはり。黃昏一片の月を添へて、暗香四野に浮動す。これ既に林和靖に言ひつくされたれど、梅花此の境に始めて奇をあらはし、此の境梅花を得て始めて俗氣を脫す。（大町桂月「筆のしづく」）

〔答〕(1) 梅に取るべきは其の香、奇古なる其の幹、花の色は白きを尙ぶ。」と揚げ「赤きは俗なり。一園内に行儀正しく列植するは折角の梅花を俗了す。」と抑へ「竹外籬畔……。」と揚げたるは抑揚法で面白い。

(2)「これ既に林和靖に言ひつくされたれど……。」は一種の引用法で林和靖の山園小梅の詩「衆芳搖落獨喧妍、占盡風情向小園、疎影横斜水淸淺、暗香浮動月黃昏、霜禽欲下先偸眼、粉蝶如知合斷魂、幸有微吟可相狎、不須檀板共金樽」の句を思はせて趣味が深い。

(3) 尙「其の香」「其の幹」「花の色」と梅の美なる點を揚げつくした所はまづ詳悉法と申しても

可からう。其の點も面白い。

尙此の種の問題は種々な形式で發表されようが大體前記の如き形式が其の根本であらう。故に茲では此れで省略して練習篇通解の部に於て重要なるもののみを說明して以て其の準備にしよう。

第六章　答案作法

現代文の解釋は頭から手が附けられないといふ樣な事がない代りに完全無缺の答案も出來ない要する所大多數の受驗者の答案は始んど同樣の成績を現はすので、他の學科に比して一層の注意を要する。

1 發問の趣旨をよく考へる事。誰でもよくやる事だが、問題が出ると、直ちに其の文章を讀んで合點して終ふ。此の文章は易い、此の文章は六ケしいなどと、其の爲うつかりすると發問の趣旨に反する答案を作製する事がある。大意を通解と考へたり、摘解だけでよいのに通解して見たりする。さうして折角易い問題が出て天がチヤンスを與へて呉れて居るのに逸して終ふ樣なものもあるのだ。故に問題が出た時はどうしても第一に其の發問の趣旨を靜かに考へればならぬ。

2 熟讀する事。次には問題の本文を熟讀する事である。さうして本文に句讀點のない時には熟慮し全文の思想系統をたどりつゝ、句讀點を施して行く。同時に全文の意味を系統的に捉へて見なければならぬ。

3 腹案を立てる事。それから發問の趣旨に合する樣に答案の腹案を立てればならぬ。腹案の出來ない前に筆を取つて答案を認めようとすると、氣がせいて往々にして答案が粗雜になり易い。然し幾ら腹案を立てると申しても一問にのみ執着して他の問題を書く餘裕がない樣な事になると不利であるから、時間と問題の關係は常に念頭に置いて考へればならぬ。

4 綺麗に書く事。文字は出來るだけ綺麗に書くがよい。文字が綺麗で、うまく整理して書いてあると、試驗官が答案を見た時、第一印象として非常な好感を持つ。此の好感は其の答案の上に同情と化して或種のプレミアムとなつて表はれるものだ。故に、

(一) 答案用紙に對し、紙面を見測らつて書くこと。

(二) 大小不同の文字を書かぬ事。小さ過ぎるより寧ろ大き過ぎるのを可とすること。

(三) 明確丁寧に文字を書くこと。從つて薄インキで餘りに細く書いたり、消したりする事は禁物である。

5 誤字、當字、脫字のない樣に注意する事。近頃の學生の誤字、當字をよく書くには驚く。先

誤字・當字・脱字のなきやう注意する事

文體は口語體にし假名は平假名

文法・語法を正す事

句讀點を施す事

答案の整理

日もある中學五年の生徒が著者の所へ手紙を寄越した。文字も綺麗だ。文章もなか〳〵よい、けれども誤字と當字の多いのには驚いた。「こんな事でどうして高等學校には入れるか。」と注意してやつた事だ。字劃曖昧な場合には寧ろ假名で書くがよい。但し略字は用ひて差支へない。

6 文體は口語體、假名は平假名の方がよい。答案の文體に制限されてない時は口語體で書く事これは現在學生の普通使用する文體であるといふ所から文語體で書くと文章がまづくなつたり、誤つたりするといふ點より考へて、又解釋は平明化であるから口語體の方が文語體に比して平明に表はす事が出來るからである。假名はまた片假名よりも平假名の方が美しい。

7 文法・語法を正す事。自動詞、他動詞の關係、送り假名、音便の假名遣、そにたは等誤り易いものである。他の學科の答案ではこんな事はあまりにやかましくいはないであらう。けれども國語の答案では、文字だの、語法、文法だのは第二の生命ともいふべきであるから、特に注意しなければならぬ。

8 句讀點を施す事。句讀點は漢文、外國文同樣に、我が現代文解釋の上にも特に重要であるから施さねばならぬ。

9 答案の整理。すべて物事は跡始末が大切である。書きつ放しはよくない。必ず今一應丁寧に眼を通して見るがよい。戰ひの勝敗は最後の五分間にある。あせつてはならない。今整理の要項を擧げて見ると次の如くなる。

（一）答案と問題の原文とを對照して見る。
（二）前項の條件に合するかどうか。
（三）答案の文旨は一貫してゐるか。
（四）受驗番號に誤謬はないか。

通釋篇は練習篇中の基礎

第七章　本書の學び方

以上大要總說を終る事にする。總說は解釋に關する基礎的準備である、解釋の理論である。此の理論の上に立脚して愈〻實際問題の解答をするのが次の練習篇である。本書練習篇は通釋篇、摘釋篇、大意篇、語釋篇、書取篇の五部に分ち練習する。

其の中通釋篇に最も力を注ぎ、これは更に語釋、通解、要價、備考の四項として、其の提出文中の難語難句は語釋中に、大意要領は要領中に、修辭其の他は備考中に說明して、解釋に對する基礎練習を行ふ。

其の基礎の上に部分解とも見られる、摘釋、大意、語釋、書取等の練習を加へ、以て受驗に對する周到なる準備として過去の問題の研究をなし、國語科に對する自信を强める意味に於て各篇共まづ官公立學校の試驗問題を第一に揭げ漸次に廣く現代文各班に亘つて練習せしめようとしてゐる。讀者達は宜しく其の心して學ばるべきである。

「小川の漣漪にも」

第二篇　通釋篇

〔一〕小川の漣漪にも

小川の漣漪にも岳影皺み、千本松原の露隈つること多きところ、歇帆、風帆、皆、晴灣に漕せるこの高根の上を行き、縉紳の別墅の楣間を照らす紫嵐の色は、又尋常一樣の家に入る。（山口高商。專檢）

語釋　◎漣漪（れんい）　さざなみ。◎皺み　皺になつてうつる。◎歇帆（けつはん）　美しい帆。◎風帆　風を孕んでゐる帆。◎晴灣　清らかな入江。◎高根　富士山のこと。◎縉紳　高貴な人。◎別墅（べつしよ）　別莊。◎楣間（びかん）　梁間。額を掛ける所。◎紫嵐（しらん）　紫彩の意。紫色した山峰。

通釋　小川の小波にも、山の影が皺となつて映り、千本松原の露がしきりに落ちるあたりでは美しい帆や風を孕んだ帆などが、皆、清らかな入江の水に映つてゐる此の富士山の上を行き、高貴の人の別莊の梁間に揭げられる紫色した山峰の景色は、又普通一般の民家にもはいつて來る。

大意　富士の影が小川の小波には皺の如くに映り、千本松原では其の入江に映す影の上を白帆

が行き、高貴な人の家に額に掲げる山の景色は、こゝでは又普通の民家にはいつて居ながらに見られる。

「不敵なる清盛入道」

〔二〕不敵なる清盛入道。

不敵なる清盛入道は、私門の榮にあきたらで、世に、人もなげに、ふるまはれけるこそゆゝしけれ。こゝは、卿相雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てしても、城南の離宮に、射山の嵐を忍ばせ給へり。（樗牛全集）（北大豫科。千葉醫專）

語釋　◎不敵なる　勢のよい亂暴な。◎入道　佛道に入つたものの稱。◎私門　自分の一族。◎人もなげ　傍若無人に、我がまゝ勝手に。◎ゆゝし　こゝでは「いまゝしい」の意。◎卿相　公卿。◎雲客　殿上人。◎流離　はなればなれになつてさすらふ。◎城南の離宮　鳥羽の北殿のこと。◎射山　鞆結射の山。上皇の御座所。射山の嵐とは、射山に吹く嵐、といふ意味で、山の木がひどい風に吹かれて苦しむやうに上皇が清盛の横暴に苦しまれた事をよそほへたのである。

通釋　勢のよい亂暴な清盛入道は、自分一族の繁榮にも滿足しないで、傍若無人、無茶な行動をされたのは、實にいまゝしい事である。それが爲に、公卿や殿上人で地位を奪はれて沈々に島流しにあはされたものが四十餘人に及び、法皇の樣な高貴な御身でさへも、鳥羽の奥殿に押し籠められ、その御座所で清盛の横暴を堪へ忍んでお過し遊ばした。

大意　不都合な清盛は、一族の繁榮にあきたらず、無茶な事をした。その爲、公卿殿上人で流されたもの四十餘人、法皇も鳥羽殿に押しこめられ給うて苦しまれた。それほど無茶な行ひをしたとの意。

「ラフアイツト」

〔備考〕「城南の離宮に、射山の嵐を忍ばせ給へり。」は一種の美化法である。

〔三〕ラフアイツト

ラフアイツト、高門の身を以て、弱冠にして孤劔飄然、身三軍の帥となり、敢爲勇奮、北米に猛進し、或は戈を杖とし、銃を枕とし、或は腥風血雨の間を冒し、百折屈せず、千撓撓まず、もつて、かれ民衆の苛政に苦しみたるを救ひ、羈絆に制せられたるを脫せしめ、遂に自由の光輝を、高く太平洋上に燦々たらしめたり。（神戸高商。名古屋高工）

語釋　◎ラフアイツト　獨立戰爭の時、米國を援けて功勞のあつたフランスの大政治家。◎高門の身　立派な門閥に生れた身分。◎弱冠　二十歳。◎孤劔飄然　只一人劔を提げてぶらりと家を出る事。◎三軍の帥　大軍の總大將。◎敢爲　難を恐れず　ドシ〳〵やつつける事。◎勇奮

勇ましく奮ひ立つ事。◎腥風血雨　慘憺たる戰爭の光景の形容。◎百折屈せず、千挫撓まず　幾度失敗しても少しも屈せぬ事。◎苛政　苛酷な政治。◎羈絆（きはん）　束縛、ひどいおきて。◎烱々（けけい）　輝くさま。

通釋　ラフアイツトは立派な家柄に生れた身でありながら、二十歳で只一人劔を提げてぶらりと家を出で、その身は大軍の大將となり、難儀を顧みず勇ましく奮ひ立ち、北米に勢鋭く進軍し、或は劔を杖として進み、或は銃を枕として寢たりなどして、具さに難儀を嘗め、或は腥い風が吹き血の雨が降る樣な、慘憺たる戰場に危險を冒して、幾度、失敗しても少しも屈せず、やり通して、彼等人民がむごい政治に苦しんでゐるのを救ひ、ひどいおきてに束縛されてゐるのをのがれさせてやり、とうゝ、米國では人民の自由が立派に實現する樣にしたのである。

大意　ラフアイツトは立派な家柄に生れながら二十歳にして家を出で大軍の大將となり、勇氣を奮つて北米に進み、慘憺たる戰場を往來し、如何なる艱難にも屈せず、遂に彼等を救つて立派な自由の民としたとの意。

〔四〕紳士たるものは

紳士たるものは容儀端正にして、威嚴あり、堅忍剛毅、逆境に處して晏如たり。其の心光風霽

「紳士たるものは」

月の如く、人に對して城府を設けず、赤心を人の腹中に措く。蓋し禮讓は、自主自重なる人の、必ず拂はざるべからざる債務なり。（仙臺高工）

語釋　◎容儀端正　風采の正しい事。◎堅忍　忍耐强い事。◎剛毅　意志の堅固な事。◎逆境　不仕合せな境遇。◎晏如（あんじよ）　平氣でゐるさま。◎光風霽月　心の潔白なことの譬。◎人に對して云々　人に對しても隔てを置かない事。◎赤心を云々　眞心を以て人に交る事。◎禮讓　禮儀厚く、人にへり下る事。◎自主自重なる人　獨立した人格を有し自らを重んずる人。◎債務　負債を拂ふべき義務。こゝでは當然なすべき義務の意。

通釋　紳士たるものは、風采をきちんと正しくし、威嚴を保ち、忍耐强く意志堅固に、不幸の境遇にゐても平氣で居り、其の心は清い風や晴れた月の如くに潔白で、人に對しては隔てを措かず、眞心を以て交際するのである。思ふに禮儀厚く人にへり下るといふ事は、獨立自尊の人格を有するものの必ずしなければならぬ義務である。

大意　紳士たるものは、外身なりを正しくし、內意志堅固に不幸を物ともせず、其の心は潔白で、心措きたく眞心を以て人に交る。思ふに禮儀は人格を重んずるものの當然の義務であるとの意。

「洵に忠孝兩全し難く」

〔五〕洵に忠孝兩全し難く

洵に忠孝兩全し難くて、骨肉の私情、さすがに斷ち易からざるも、事體の大小、云爲の前後、必ずしも、辨じ難からず。何ぞ妄りに、一身の安慰を冥々の後にのみ求めんや。（樗牛全集）（仙臺高工）

語釋　◎骨肉の私情　血統の同じき親子兄弟などをいふ。◎さすがに　やはり、いかにも。◎事體　事柄。◎云爲　言行。いふ事行ふ事。◎冥々の後　死んだ後。

通釋　ほんとに忠義と孝行との兩方を、同時に全うするといふことはむづかしくて、親子の間の情愛は、いかにも斷ち切りにくからうけれども、どんな事柄が重大で、どんな事柄が輕小であるか、又どんなことを後に行ふべきかといふ事は必ずしも見分けがつきにくいことではない。それだのにどうして無闇に、一身の慰安を死んだ後にばかり求めてよからうか、そんな事ではいけない。

大意　親子の私情から忠孝は兩全し難いといふが、事の大小輕重の分らないものでない。それだのに一身の安樂といふ事を死んだ後にまでも求めてよからうか、それではならぬ。事の大小輕重をよく考へて行はればならぬとの意。

「自然現象は」

〔六〕自然現象は

自然現象は何等の矯飾もなく、何等の制抑もなく、自由自在なる天眞自然の狀態を存す。黃塵十丈の都會にあつて、日夜簿書を左右にし、營々逐々、衣食に齷齪たるもの、一朝、自然の靈淑に接し、天空海濶の妙を知らば、其の壯快、恐らくは譬ふるに物なからん。これ、其の身、自然の美中に浴して眞に靈淑の氣を吸收すればなり。（海軍機關）

語釋　◎自然現象　自然界に現はれる色々の事柄。◎矯飾　外見を飾る事。◎制抑　制限したり抑へつける事。◎天眞　飾氣のない自然のまゝの事。◎黃塵十丈の都會　ちり、ほこりのたくさんたつてゐる都會。◎簿書　帳簿。◎營々　忙しいさま。◎逐々　早く走るさま。◎齷齪こせ〳〵と働くさま。◎靈淑　奧床しい靈妙な趣き。◎天空海濶　天の大きく、海のひろい事で廣大なさまをいふ。

通釋　天然界に現はれて居る事物は、何等外見の飾りもなく、何等の制限抑壓もなく自由自在な、ありまゝの有樣を存してゐる。そこで、塵ほこりのひどくたつてゐる都會にゐて、毎日帳簿を取扱つて、忙しく走りまはり、衣食の爲に、こせ〳〵働いてゐる者が、一たび自然の靈妙なる趣きに接し、廣大無邊の妙味を知つたならば、其の氣持のよい事は、多分譬へるに物もな

いほどであらう。これは其の身が自然の美の中に浸つて、直接に其の靈妙の氣を吸ふからである。

大意　自然現象は飾りもなく抑壓もなく自由にのび〳〵としてゐる。そこで、塵ほこりの多い都會に住んで衣食の爲にこせ〳〵働いてゐるものが、一度、大自然の靈氣に接すると非常に壯快味を感ずるものだ。之は其の身が、自然の美を浴びて直接に其の靈氣を吸ふからだといふ意。

「大勢なほ定まらずして」

〔七〕大勢なほ定まらずして

大勢なほ定まらずして、物議紛々たりしに、岩倉公は、俄に躬を以て責に當り、從容應答せしかば、雄藩の主も、爲に容を改め、朝議大いに決するに至る。而して、大令一度發して、外は將軍を廢し、內は攝、關、議奏、傳奏を廢し、親政の洪圖を旬日の內に定め、後世動かすべからざる基礎を立てられたるは、實に、公の輔翼の力なり。（千葉醫專）

語釋　◎大勢　大體の形勢。◎物議　世間の議論。◎紛々　まち〳〵なさま。◎從容　おちついたさま。◎雄藩　大藩のこと。◎容を改め　態度をかへること。◎朝議　朝廷の議論。◎大令　勅令。◎議奏　勅旨を下に傳へ、或は、又下から申し出た事を奏上する職。◎傳奏　天皇又は上皇へ色々の事を傳達奏聞する職。◎洪圖　大きなはかりごと。◎旬日　十日位。◎輔翼

「志を持するには」

左右よりたすけること。

通釋　世の大體の形勢が、まだきまらないで、世人の議論がまち〳〵であつたのに、岩倉公は俄に、自分で其の責任を引きうけて、よくおちついてすべての受け答へをしたので、大藩の大名も其の爲に態度をかへて來たから、朝廷の議論は一つにまとまるやうになつた。そして勅令が一度發せられて、外は、將軍を廢し、朝廷內では、攝政、關白、議奏、傳奏などを廢して、天子御自身で政を爲さるといふ大なる計畫を、僅か十日位の間に定め、後世になつても、動かす事の出來ない基礎を立てられたのは、實に公が天子をお助けして行かれた結果である。

大意　世間がまだやかましいのに岩倉公は、進んで事に當り、大藩を說き伏せて、遂に勅令を發せられ、將軍を廢し朝廷の組織をかへ、親政の動かすべからざる基を立てられたのは公の天子をお助けなされた結果である。

〔八〕志を持するには

志を持するには、伯夷を師とすべし。衣を千仞の岡に振ひ、足を萬里の流れに濯ふがごとくなるべし。衆を容るゝことは柳下惠を學ぶべし。天空しうして鳥の飛ぶにまかせ、海ひろうして魚の躍るにしたがふがごとくなるべし。（陸士）

語釋　◎伯夷　支那殷末、周初の高潔な人。即ち周の武王が殷の紂王を討つ時、其の大義名分に反くことを述べて諫めたが聞かれず、遂に「周の粟を食まず。」と首陽山にかくれ蕨を食して餓死したといふ高潔の士。◎千仞　一仞は八尺、千尋と同じで、多くは海又は谷などの深さを形容するに用ひる。◎衆を容るゝこと　何人でも受け入れることで、度量の廣いこと。◎柳下惠　周代の人、魯に仕へて士の模範として仰がれた。

通釋　志を高潔に保つには伯夷を手本として學ぶがよい。人といふものは、恰度、着物を千仞の岡の上で振ひ、足を萬里も流れる大きな川で濯ぐやうに、志を高潔に保たねばならぬ。衆人をうけ入れる度量の廣いことに於ては、柳下惠を見習ふがよい。人といふものは、恰度天が廣くて鳥が自由に飛ぶに任せ、海が廣くて魚が自由にはねまはるまゝにしてあるやうに、度量が大きくなくてはならぬ。

大意　志を保つには伯夷を師とするがよい。さうして高い岡で着物の塵を振ひ落し、大きな川で足の垢を美しく洗ひ落す樣に高潔なのがよい。人を容るるには柳下惠を學ぶがよい。さうして天海の廣く鳥や魚が自由に動くことが出來る樣に度量を廣くするがよい。

【備考】「志を持するに……。」と「衆を容るゝことは……。」とは對句になつてゐる。

「然れども日本人が」

「衣を千仞云々……。」と「足を萬里の云々。」「天空しうして云々。」と「海ひろうして云々」とは共に對句、さうして共に譬喩である。

〔九〕然れども日本人が

然れども日本人が、日本江山の洵美なるものを以てのみ。見よ、外邦の客皆日本を以て、宛然たるに、(絶對に)日本江山の洵美なるものあるにあらずや。……想ふに浩々たる造化、其の天現世界における極樂土となし、低回去る能はざるにあらずや。實が鄉に在るを以てならんや。實工の極を日本國に鍾む。是れ日本風景の渾圓球上他に異なる所以なり。(東京女高師)

語釋　◎絶對に　他に比較する事の出來ない事。唯一無二。◎江山の洵美　山川の景色の洵に美しい事。◎宛然たる世界に於ける極樂土　さながら現世における極樂世界のやうな所。◎低回去る能はざる　行つたり、もどつたりして立ち去る事の出來ぬこと。◎浩々たる造化　廣大な造物主。◎天工の極を日本國に鍾む　天然のたくみの最もすぐれたものを日本の國に鍾めてゐる。◎渾圓球上　地球上。

通釋　然しながら、日本人が、日本の山水の景色のほんとに美しい事をいふのは、單に、愛鄉の念にばかり原因するのではない。これは實に、他のものと比較することの出來ないほど、日

本の山水がほんとに美しいからである。見よ、外國の旅行者は皆日本を以て、恰度世界の樂園のやうなものとして、あとに心が引かれて去りかねるではないか。どう考へても廣大な造化の神は、その自然のたくみの最もすぐれたものが日本の國にあつめたのであらうと想像される。これが日本の風景が、地球上に於て、他と異なつて特にすぐれてをる理由である。

大意 日本人が日本の景色をほめるのは、愛鄕の念からばかりではなく、絕對に其の景色がよいからだ。だから外國人でも極樂淨土の樣だとして去りかねるではないか。思ふにこれは造化の神が美を日本に集めたからで、是日本風景が世界に冠たる所以である。

「凡大江の沿岸」

〔一〇〕凡大江の沿岸

凡、大江の沿岸若くは洲渚平衍の處、蘆荻叢生して、往々數十里も斷えず。時方に孟冬葉枯れ、花開きて、霜の如く、雪の如く、極目泥なし。否らざれば、則、長天杳渺、雲樹相接して倦飛の鳥、眼の能く見ざる所、雙眼鏡に藉りて、纔に其の低翔盤旋するを認む。此等の景致、其の宏遠豁大は、大陸中原に能く見るを得る所なれど、我が邦の如き細膩の風光に見慣れたる眼の到底想像も及ばざるところなり。（名古屋高工）

語釋 ◎洲渚　すはま。◎平衍　平らかなこと。◎孟冬　初冬。冬の初。◎長天　廣い空。◎杳渺　はるかにひろ〳〵としてゐること。◎雲樹相接し　空の雲と地上の樹木とが相接して。◎倦飛　うみつかれた樣に飛んでゐる事。◎低翔　低く飛ぶ。◎盤旋　輪を描くこと。◎細膩　こまかくて美しいこと。

通釋 すべて大きな河の沿岸又はすはまの平らかな所には、あしや、をぎがむらがつて生えてゐて、時としては數十里乃至百里もそれが續いてゐることがある。時は恰度冬の初めで、あしや、をぎの葉は枯れ、花が開いて、霜や雪のやうに眞つ白で、見渡す限りはてがない。さもない所は、廣い空が、はるかにひろ〳〵と見渡され、空の雲と地の樹木とが相接して、うみつかれた樣に飛んでゐる鳥も、肉眼ではよく見えないのを、雙眼鏡の力を藉つて、どうにかその低く輪を畫きながら飛んでゐるのを見ることが出來る。かやうな景色の、その遠くて大きな樣は大陸の中の野原ではよく見られる事だけれど、我が國のやうな、こまかくて美しい景色になれて來た眼には、とても想像もつかない事である。

大意 凡、大江のほとりやすはまは數十百里も蘆原が續き冬の初めなどはその花が白く見ゆる限り續き、さうでない所では遠く地平線上をだる相に飛ぶ鳥を雙眼鏡でやつと見るといふ大きな景色は、大陸では見られるけれども、我が國の如き小さな景色に慣れた眼には迚も想像のつ

かゐところだとの意。

〔一一〕眞の豪傑は

眞の豪傑は、人の爲し難き事を爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃やかなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。（東京高師、仙臺高工）

「眞の豪傑は」

語釋　◎人情に篤く　人情が深い。◎恩愛に濃やかなり　情及愛に富んでゐる。◎人に忍び　人に對してどんなひどい事でもすること。◎世に戻る　世の中の傾向にさからふこと。

通釋　ほかのものに勝れてえらい人は、人がようしない事をするのと併せて、人情に深く情愛も篤いものである。他人に對してどんなひどい事でもし、或は世の中の傾向にさからつた事をするものばかりがえらい人の事業だと考へるのは、豪傑の半面をわすれたものの考へ方である。

大意　ほんとうの豪傑は人の出來ないことをすると同時に情愛にも濃やかなものだ。然るを人をいぢめたり世に逆らつたりする事ばかりを偉人の事業だと思ふのは、半面しか見てゐない間違ひである。

〔一二〕憲法は國家統治の

「憲法は國家統治の」

憲法は國家統治の大法にして、國權の本體と、行用との大綱を規定す。其の形式は成文の法典たると、法令及び慣例を綜合して其の法理を成すとを問はず、國家あれば必ず國權の體用を規定するの法あることを要するものなり。（山口高商）

語釋　◎統治　すべ治める事。◎國權　國家の權力。◎行用　行ひ用ひる事。◎大綱　大きな綱目。おほもと。根本法則。◎成文の法典　文章に書きあらはした法律。◎法令　法律命令。◎綜合　すべまとめること。◎法理　法律全般に共通した原理。法律上の理論。◎體用　本體と行用。

通釋　憲法は、國家を統べ治める大きな規則であつて、國家の權力の根本は主體は何であるかといふ事と、この國權を實際に施す事とに關しての根本法則をきめたものである。その形式は、文章に書きあらはしたものであらうが、法律命令及慣例を纏めて、法律の理論上効力のあるものと認められて居るものであらうが、其の形式の如何にかゝはらず、兎に角國家といふものがあると、必ず國家の權力の主體と行用とをきめてある法がなくてはならぬものである。

大意　憲法は國家統治の根本法則で、國權の主體と其のはたらきとを定めたもので、文章になつた法律であらうが、なからうが、兎に角國家あれば必ず憲法を要するものである。

「その北馬南船」

〔一三〕その北馬南船

その北馬南船、行李卸さざるところなく、春花秋月、遊展遍からざるところなきは詩なり。その畛域を撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王侯に接するは詩なり。（朝比奈知泉）（海機。大阪高商。專檢）

語釋　◎北馬南船　諸方を旅行すること。北支那では水利に乏しく馬により、南支那では水流が多いから船によることを得るからかくいふ。◎行李卸さざる所なく　旅行中の手荷物、即ち柳行李の類を諸所でおろし、そこに滯留したことをいふのである。全國をあまく旅行したこと。◎遊展（ゆうげき）遍からざる所なき　前の「行李云々」の對句で意味も同じ。展ははきもの。◎畛域（しんゐき）を撤して諸生を待ち　畛域はあぜのさかひ。轉じて人に交はる時に隔てある事。こゝでは師弟の間のわげ隔てを除いて、門弟達に對する意。◎禮貌　禮儀正しいさま。

通釋　彼が南北に旅行して、旅の荷物を卸して滯在しない所がなく、春の花に秋の月に、殆んど遊び歩かない處がなかつたのは詩である。また彼が師弟の間の隔りを除いて、打ちとけて門弟達をもてなし、禮儀などをとりつくろはずに王公貴人に接したのは詩文である。（此の樣に山陽の言行は詩其のものである。）山陽をの人が詩であると考ふべし

「舟のゆくては」

大意　山陽が全國足跡至らざるなく、名所にして遊ばない所のないのは詩である。門弟に對して隔てなく、王侯に對しても禮にならはなかつたのも詩である。彼の言行は詩其のものであるの意。

〔備考〕「北馬南船」と「春花秋月」、「行李云々」と「遊展云々」、「畛域を撤して云々」と「禮貌を外にして云々」共に對句である。

〔一四〕舟のゆくては

舟のゆくては杳茫たる蒼海にして、その抵る所はシチリヤの島なり、あらず、亞弗利加の岸なり。ゆんでの方は巖石屹立したる伊太利の西岸にして、所々に大いなる洞穴あり。舷下の水は碧くして油の如し。舟の影の水に落ちたるは、極めて濃き青色にして、艪の影は濃淡の紋理ある青蛇を畫けり。われは辭を放ちて叫びぬ。「げに美しきは海なる哉、若し彼蒼の大いなるを除かば何物かよく之と美をくらぶべき。」（森鷗外）（海機）

語釋　杳茫たる　はるかにひろ〻くとした。◎ゆんで　左の方。◎屹立　山などのそびえ立つ貌。◎舷下の水　ふなべりの下の水。◎紋理　模樣。◎彼蒼（かのさう）　青空のこと。

通釋　舟の行先は廣々とした青海原で、その行くはてはシチリヤの島である。いや、まだその

先のアフリカの北岸である。ゆんでの方は巖石が高く聳えてゐる伊太利の西海岸で、所々に大きなほらあながある。舟の下の水は青くて油の樣である。水にうつつてゐる舟の影は、極めて濃い青色で、艪の影は濃淡の模樣のある青い蛇を畫いた樣に見える。私は思はず、聲をあげて叫んだ。「實に美しいものは海であるわい。若し、あの大きな青空を除いたら、何物もこの海と美しさをくらべることは出來ないだらう。」と。

大意　舟の行くはてはシチリヤではなくてアフリカの北岸だ。左手は斷崖絶壁のイタリヤ西海岸で、所々に洞穴がある。水に映る舟の影は濃青色で、艪の影は模樣のある青蛇を畫いた樣である。私は「實に美しいものは海だ、あの青空を除いたら海より美しいものはない。」と大聲を擧げて叫んだ。

【備考】「その抵る所はシチリヤ島なり、あらず、亞弗利加の岸なり。」は一種の出直し法である。これは文勢を強める上に非常に面白い。

〔一五〕往古學問としいへば

「往古學問としいへば」

往古學問としいへば、專ら儒教の研究にして、人々修身齊家の道を學ぶにありき。室町時代の季、天下糜爛し、文學は、燈火の正に滅せんとするが如くなりしを、五山の僧侶に依つて、纔に其の命脈を繋がれしに、元和偃武の後、國家寧靜し、漸く文事に志す者出で、殊に德川家康公は林道春を任用して、大に文學を奬勵したりき。（女高師）

語釋　◎往古　昔。◎學問としいへば　しは意味を強めることば。學問とさへいふと。◎儒教　孔子や孟子などの教。◎修身齊家　自分の身を修め家をとゝのへる。◎糜爛　米、肉等の腐れたゞれた事で、國亂れて疲弊するにいふ。◎五山　鎌倉五山と京都五山とある。こゝでは京都五山の事で天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺をいふ。◎命脈　命のつな。◎元和偃武　德川時代の始。元和元年大阪夏の陣が戰爭の終で、それから天下泰平となつた。そこで之を元和偃武といふ。◎寧靜　安寧平靜の約で、靜かによく治まること。◎文事　學問文學方面のこと。

通釋　昔、學問とさへいふと、專ら、儒教を研究することで、人々は身を修め家を齊へる道を學ぶのであつた。室町時代の末頃天下は大いにみだれて、文學はともし火の今にも消えようとする樣に衰へてゐたのを、京都の五山の僧に依つて、どうにか、その命のつなをつないで續いてゐたが、德川時代の初頃、卽ち元和年間の戰亂がをさまつて世が靜かになつた後、次第に文學に志すものが出て來たし、殊に德川家康公は、林道春を任用して、大いに文學を奬勵したの

であつた。

大意　昔は學問とさへいへば儒教の事であつた。室町時代の末頃戰亂の爲に學問は衰へ、五山の僧侶の手でやつと命をつないでゐた。それが元和の役以後次第に復活して、家康公は林道春を任用して大いに學問を奬められたのであつた。

「道は須臾も」

〔一六〕道は須臾も

道は須臾も離るべからざれば、一生の間、道を行ふ日にあらざるはなく、道のある所にあらざるはなし。然るを急進にしてもとめば、僅々の得ることありとも、皮膚の間にてやみなむ。いかで其の肉をかんで、滋味にあくことあるべき。（七高）

語釋　◎須臾　一寸の間。◎皮膚の間にてやみなむ　ほんの表面だけに止まらう。◎いかで云々　どうしてその肉をかんで、そのうまい味を十分に味ふことが出來ようぞ。

通釋　人のふみ行ふ道は、一寸の間も離れることの出來ないものであるから、人間一生の間、何時でも道をふみ行はない日とてはなく、何處に行つても人のふみ行ふ道のない所はない。さうだのに急いでせつかちに、道を求めたならば、少々は得る事があつてもそれは、ほんの表面だけに止まるであらう。たとへて見ると皮膚の中の肉をかんで、其のうまい味を充分に味ふことが出來ないやうに、どうして眞の道を深く知る事が出來ようぞ。

「文王は西北の方」

大意　道は一生の間何時でも、又何處でも行はればならないものである。それほど深遠なものであるから、急いで求めては、表面がわかるだけで、道の眞の妙味はわかるものでない。

〔一七〕文王は西北の方

文王は、西北の方、支那の化外の地に興り、大いに農桑を勸め、孥罪を廢し、關市の稅を寬め、鰥寡孤獨窮民を恤み、政教竝び施し、以て寬仁の治を行ひしは自由及社會政の祖なり。孟子は文王の德を稱して、「視民如傷」といひ、又書の無逸の篇に「文王知稼穡之艱難知小人之依。」といへり。いはゆる民情を知るものにして、君德の極といふべし。（山口高商）

語釋　◎化外の地　文化の行き屆かぬ邊鄙の地。◎農桑　農業と養蠶。◎孥罪　罪人の妻子まで罪する規則。◎關市の稅　關所の通行稅や市場にかける稅。◎鰥（くわん）　老いて妻の無いもの。◎寡　老いて夫のないもの。◎孤　幼にして親のないもの。◎獨　老いて子のないもの。◎窮民　上述の鰥寡孤獨の樣な困つてゐる人々。孟子の所謂四窮民のこと。◎恤（あはれ）み。◎政教　政治と教育。◎自由及社會政　自由政治即ち民をむやみに壓制しないで政治を行ふことと、社會政治即ち社會多數人の意志を尊重して行ふ政治。◎孟子　孟軻の著はした書物の名。◎視（ルコトヲ）レ民如（ノ）レ傷

人民を傷病者の樣にあはれみいたはる。◎書、書經。◎文王知ニ稼穡之艱難一知ニ小人之依一ふことをも知つてゐる。

通釋 文王は西北の方の支那の文化の行屆かぬ田舍からおこつて、盛んに農業や養蠶を奬勵し從來の罪人の妻子を罰する事をやめ、關所を通行する稅金や、市場にかける稅金を輕くし、年よつて妻のないものとか夫のないものとか、或はみなしごとか子のない老人達の樣に困つてゐる人々をあはれみたすけ、政治と敎育とを共に立派に行つて、情深い政事をしたのは、自由政治や社會政治の開祖である。孟子の中に、文王の德をほめて、「文王は民を傷病者の樣にあはれみいたはつた。」と記してあり、又書經の無逸篇に「文王は農業の困難であることを知り、又國民が、この農業によつて生活してゐる事をも知つてゐる。」といつてゐる。所謂人民の事情をよく知つてゐるもので、君として最も德ある人といつてよい。

大意 文王は支那西北の蠻地に起り、農業養蠶を奬勵し、刑罰を愼み、租稅を輕くし、困つてゐる人民を憐みたすけ、政治・敎育共に立派に行つたのは、今日デモクラシーの開祖である。孟子の中には「文王が仁慈の政をした。」事を記し、書經には「文王が農業の困難を知り、之が民

「あをによし奈良の都」

業であることを知つてゐた。」ことをほめてゐる。是民をよく知つてゐるもので、君として最も德あるものである。

〔一八〕あをによし奈良の都

あをによし奈良の都は荒れはてゝ、伽藍徒に古の名殘を留め、星月夜鎌倉の府は廢れつくして陰鬼空しく雨に哭す　あゝ東流の水、一たび逝いて復還らず、人間の富貴果して幾時ぞ、塞翁が馬上、歲月徒に過ぎて、邯鄲の枕頭、芳夢はやく覺めぬ。（專檢。米澤高工）

語釋 ◎あをによし　奈良の枕詞。◎伽藍　寺。◎星月夜　鎌倉の枕詞。◎鎌倉の府　鎌倉幕府。◎陰鬼　幽靈。◎空しく雨に哭す　何物もなくなつて、只幽靈だけが雨の夜泣く。◎東流の水　川のこと。支那では地勢上川は大抵東に流れてゐる。◎塞翁が馬上　人生の禍福は定まりないものだといふこと。昔支那の塞翁が曾て愛馬を失つた。心配してゐると其の愛馬が隣國から駿馬を伴うて歸つて來た。塞翁の息子は喜んで朝夕之に乘つてゐたが、一日落馬して大いに負傷した。其の後戰亂があつて、近所の若人は皆出征して多く戰死したが、塞翁の息子は落馬して不具になつてゐたから召集を免れて無事だつたといふ故事の引用。◎邯鄲の枕頭　昔支那の盧生といふものが邯鄲市上で、道士呂翁の枕を借りて眠り、一生の經歷を夢みたが、さめて

見たらまだ寢る前に呂翁がたきかけてゐた飯が煮えてしまうてゐなかつたといふ故事の引用。

◎芳夢　榮華の夢。

通釋　奈良の都は荒れてしまつて、寺の建物だけが、徒らに昔盛んであつた時の名殘を留めてゐるし、鎌倉の都は頽廢してしまつて、幽靈が空しく雨の夜に泣くといふ有樣である。あゝ川の水は一旦流れ去つたならば、二度とはかへつて來ないやうに、（時も亦再びかへつて來ない。）人間の富貴といふも果してどれだけ續くものであらうぞ。いくらも續くものでない。塞翁の馬のやうに、幸福と禍とがかはる〳〵起り、歲月は空しく過ぎ去つて、廬生が邯鄲で晝寢した時の樣に、榮華の夢は直ぐさめてしまふものである。

大意　昔榮えた奈良の都も鎌倉幕府も今はさびしく荒れ果てゝゐる。川の水の流れるやうに時は過去つて再び歸らない。人間の富貴なんてたよりないものだ。塞翁の馬の樣に福が禍となり、禍が福となつて月日は過ぎて行く。榮華の夢などは邯鄲夢の枕の如くに短いものだ。

〔一九〕下京より吉田に

下京より吉田に通ひたる朝なの景色は、今も猶、恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひきわたす霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つ一つかなたへと薄くなりて、向ふに寢たる東山はあるかなきかの夢より未だ覺めやらず、吉田の岡に竝び立ちたる松は、墨繪の刷毛の濃く薄く、花賣る少女の姿は隱れて、聲ぞまづ朝靄を漏れ來たる。かゝるやさしき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。（東京女高師）

語釋　◎恍惚　うつとりとすること。◎ひきわたす霞　たなびいてゐる霞。◎擬寶珠　橋の欄干の柱の頭につけた寶珠の形をした飾り物。◎朝靄　朝早く立ちこめる靄。◎やさしき景色　優美な景色。◎山河襟帶　山や河が襟のやうにめぐり、帶の樣にとりかこんでゐること。◎平安京　京都のこと。

通釋　自分が下京から吉田に通うてゐる頃の毎朝の景色は今でもやはり、うつとりとして眼の前にちらづく樣な氣がする。橫にたなびいてゐる霞の中に、三條の大橋の擬寶珠が、一つ一つだん〳〵向ふへと影が薄くなつて見え、向ふの方に寢たやうな恰好をしてゐる東山は、まだ夢から醒めないやうな風で、霞の中にあるかないかわからぬ位、ぼんやりとかすんで見え、吉田の岡に竝んで立つてゐる松は、墨繪の刷毛で、或は濃く、或は淡く書いたやうであり、花を賣る少女の姿は霧の中にかくれて見えずに、たゞ聲だけが、まづ、朝靄の中から洩れて聞えて來る。こんな優美な景色は、山や河がめぐり〳〵とりまいてゐる京都の特色である。

「山紫水明の語」

大意 下京から吉田に通うてゐた頃の景色は今でも眼にちらづくほどよかつた。すべてが霞や靄に包まれて、三條の大橋の擬寶珠も、東山も、吉田の岡の松もぼかされた樣にうつすらと見え、花賣女の姿は霧にかくれて聲だけ聞えて來るなど、こんなやさしい景色は、山河の美なそなへた京都の特色である。

（二〇）山紫水明の語

山紫水明の語よく京都の景色をいひあらはせり。何處の山水も、日中より朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるを知らば、三面を山にして、土地濕潤に、水分を含む事の、殊に濃かなる京都の朝夕が、いかに變化に富めるかは、說明を須ひずしても明かなるべし。昔て、夏を北陸の海岸に送れる事ありき。一日、驟雨の至れるを見る。疾風、さと吹き、浪戞かに高く、黑雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なりて海を覆ふ。波の音は雲の中にあり。雷光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か雷か。世界は唯一暗黑の中に、沒し去るかと疑はれて、凄まじかりき、かくの如く壯絕なる景は京都にては見るべからず。（東京女高師）

語釋 ◎山紫水明　山の紫色に、水の色明かなること。即ち山水の景色の美しいことをいふ。◎姿態　樣子。有樣。◎濕潤　しめつぽいこと。◎濃か（こまや）　多いこと。◎須ひず　必要がない。

◎驟雨　夕立。◎閃々　きらめくこと。◎凄まじかりき（すさ）、物すごくあつた。◎壯絕　すぐれてさかんなこと。

通釋 山紫水明といふ語は、よく京都の景色をいひあらはしてゐる。どこの山水も、日中よりは、朝晩の有樣が面白いのは水蒸氣の爲だといふことを知つたならば、三方が山になつて居り土地がしめつぽくて、水分を含むことの多い京都の朝晩がいかに變化に富んでゐるかといふことは、說明をしないでもわかるであらう。自分は昔て、ある夏を北陸の海岸で暮した事があつた。そして或る日夕立がやつて來たことがあつた。ひどい風がさつと吹き、浪が急に高くなり黑い雲が惡魔のやうに奔つて、見る見る、其の雲は重なりあつて、海の上一杯になつた。浪の音は、雲の中で響いてゐるのが聞える。いなびかりはびか〳〵ときらめき、磨つた墨のやうに黑い雲の間に、火花を散らすやうに光る。涙の音か雷の音か、どちらかわからぬが轟々たる響が聞える。世界はたゞ眞暗の中に、埋もれてしまふのではないかと疑はれて、實に物凄かつた。こんな非常にさかんな景色はとても京都では見ることは出來ない。

大意 山紫水明の語はよく京都の景色をいひあらはしてゐる。何處でも日中より朝晩の景色のよいのは水蒸氣のためだが、京都もまたさうだ。自分は一夏北陸の海岸に遊び、夕立で荒れた

天候に出會つた。眞黒な夏雲、たけり狂ふ荒波、轟々と響く雷、實に物凄かつた。こんなさかんな、勢のある景色は、京都ではとても見られない。

「梁の惠王」

〔二一〕梁の惠王

梁の惠王、吾國に徑寸の珠ありて、車の前後十二乘を照すとて齊の威王に誇られしかば、威王、寡人四臣ありて千里を照らす、何ぞ十二乘のみならんやと、いはれしには、惠王も慚づる色ありきとぞ。（海機）

語釋 ◎徑寸の珠　直徑一寸の珠、寶玉。◎十二乘　十二輛の車。◎寡人　拙者。王侯が自分を謙遜していふ語。

通釋 梁の惠王が、齊の威王に向つて「私の國には直徑一寸の寶玉があつて、十二輛の車の前後までも照らす。」といつて誇られたから、威王は、「拙者の國には四人の賢い臣があつて千里の遠方までも照らす、どうして車の十二輛位に止まらうや。」といはれたのには、惠王も赤面せられたといふことである。

大意 梁の惠王が、齊の威王に、寶玉の光を誇つたら、威王は四臣の德の光を誇つたので、惠王が赤面したといふことである。

「日本帝國が」

〔二二〕日本帝國が

日本帝國が、開闢以來、絶海に孤立し、世界の腐敗の外に超越し、清潔美麗なる風土山川に養育せられ、君臣・父子・夫婦・朋友の道正しく、殆んど理想的の國家を經營し來れるもの、他日、大いに世界の腐敗を掃蕩するが爲にはあらざるか、天下の微弱を扶持誘掖し、驕傲無禮を擊肘壓倒し、世界の私心を根絶し、道德上の帝王となりて、世界に君臨するは、日本が世界に對してなすべき、最大寄與にあらざるか。（大西全集）（山口高商）

語釋 ◎開闢以來　國が開けてこのかた。◎絶海　陸地から遠く離れてゐる海。◎孤立　獨り離れて立つこと。◎超越　ぬきんでゝをること。立ちはなれてをること。◎風土　土地氣候。◎理想的　最善最美と思はれること。申分のないこと。◎經營　いとなみつくること。◎他日　いつか。今後。後日。◎掃蕩　はらひ除くこと。◎微弱　微力で弱い者。◎扶持　たすけること。◎誘掖　みちびき助けること。◎驕傲　おごり高ぶること。◎擊肘　おさへつけて自由にさせぬこと。◎私心　こゝでは公明正大でない考をいだいてゐる國の意。◎寄與　貢獻。

通釋 日本帝國が、國が開けてからこのかた、遠く陸地をかけ離れた海の中に獨り立つて、世界人道の墮落を外に、立ち離れぬきんでゝ、而かも清く美しい土地氣候、山川の景色に養はれ